

家康
忠勝

兩公三百年祭紀要

GK138
139

忠家
勝康
兩公三百年祭紀要

目次

大祭の起因	一
第一日	四
例祭	五
記念教育講演會	七
提灯行列	九
第二日	一二
三百年祭	一三
饗宴	一四
夜會と鉢船	一八
第三日	一九
神輿渡御	三九
大名行列	四三
大煙火	四三

目次

協賛的事業及餘興

一	兩公記念展覽會	四七
二	櫻間青厓繪畫展覽會	五〇
三	アラモの戰役記念展覽會	五三
四	物産陳列所褒賞授與式	五五
五	三河郷友會	五五
六	額田郡青年大會	五六
七	墨西哥及南米幻燈會	五六
八	公德試驗所	五七
九	大樹寺の法會	五九
十	伊賀八幡宮の大祭	六一
十一	名蹟の表示	六一
十二	臨時列車と割引	六六
十三	餘興	六七
一	大祭と電、汽車乗客	六八
二	大祭と宿泊人	七〇
三	大祭と警察事故	七〇

數字に現はれたる大祭

一



289.1

85W35519

四 大祭と罹病者及負傷者……………七二

大祭委員の氏名……………七二

附 講演筆記目次

△家康公と日英の關係及忠勝公の大所

エチ、エー、コックス

△徳川家康を論じて功臣としての本多忠勝の事蹟に及ぶ

堀田 璋 左右

△家康公の墨西哥交通 志賀 重 昂

寫眞版目次

岡崎公園城址……………二

教育會講演會場……………七

花電車……………一三

藝妓の行列……………一四

大祭式場(一)……………一六

大祭式場(二)……………二二

學生の集合……………二三

軍樂隊……………二五

公園内の群集……………二七

鉦船……………二九

鉦船と煙火……………三〇

夜會場……………三〇

神輿渡御……………三九

大名行列……………四二

市中の光景……………四三

武者行列……………四四

家康の親書……………四八

忠勝の甲冑……………四九

青屋繪畫展覽會場……………五一

アラモ展覽會とアラモの牌……………五四

墨西哥及南米幻燈會……………五七

忠勝の自畫讃……………附四

家康兜……………九

蜻蛉切棺……………一二

牛八形鞍……………一七

鐘道馬標……………二〇

關ヶ原諸將手形……………二三

相川正宗刀……………二六

三池定守太刀……………二九

佐藤忠信の兜……………三二

家康 忠勝 両公三百年祭紀要

大祭の起因

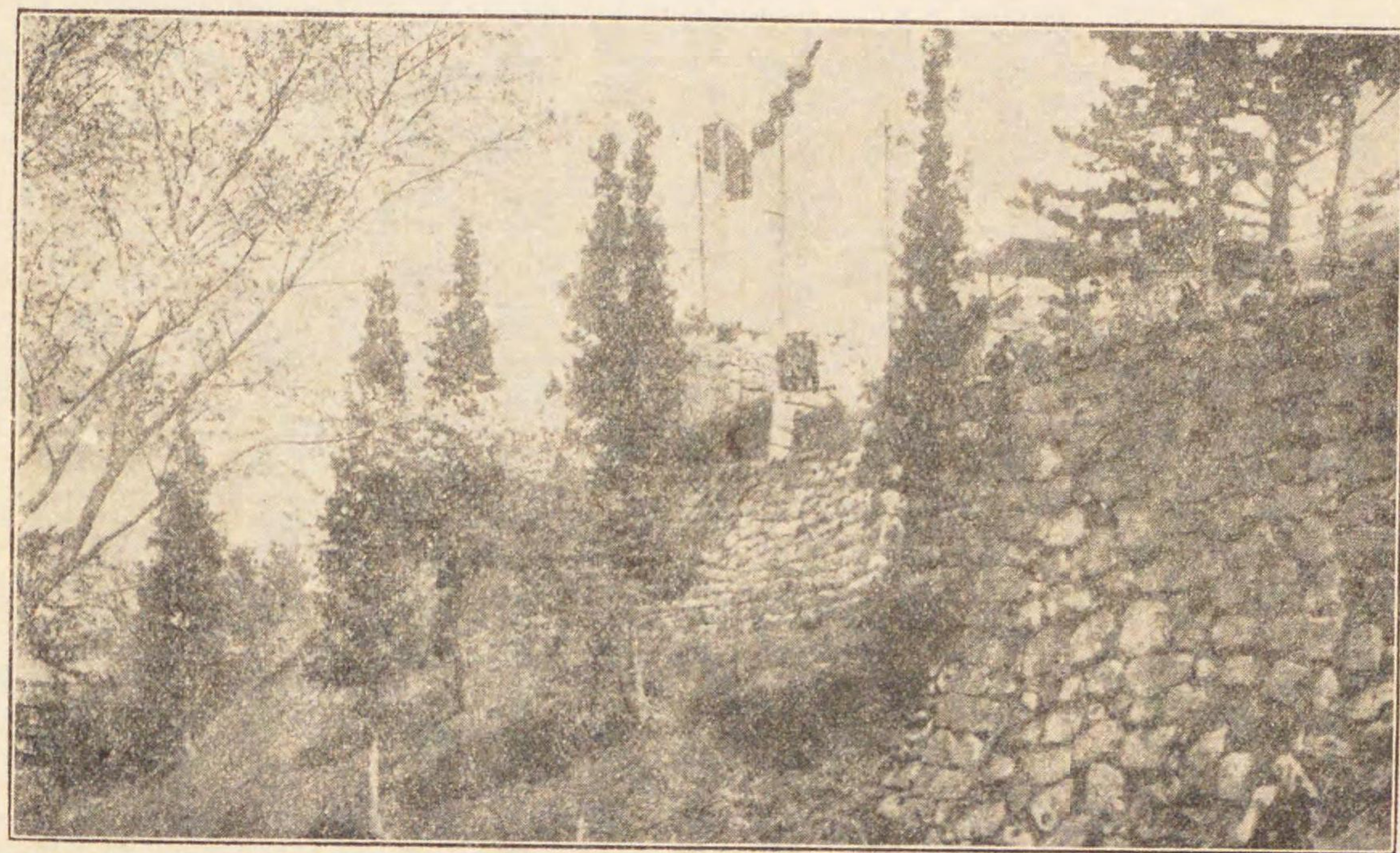
櫻花未だ地に萎せず、柳眉緑を展へて、天下の春は正に闌である。此時に當り、我本多子爵家に於ては、岡崎公園内縣社龍城神社(家康公誕生地)に於て、祭神家康公及家祖平八郎忠勝三百年祭を執行せられたのである。そうして其大祭は、大正四年四月十六日より三日に涉りて舉行せられ、徒らに形式的の式典を上くるに止まらず、祭典なるものをして、意義あるものたらしめんが爲め、新らしき試みがあらゆる方面に於て實行せられたのである。今茲に此大祭の記録を綴るに當り、其前提として、祭典總長土屋大將及副總長志賀重昂氏の此大祭に就ての談話を記載することにした。

土屋總長は語つて曰く、

忠勝公の三百年祭は正當は去る四十三年であつたが夫が延て一昨年大祭を舉行されん計畫なりしも計らずも其前年に先帝陛下崩御の御大事ありて世は諒闇の爲め御遠慮となり昨年更に又其計畫を立られしに又々昭憲皇太后の御大喪に遭ひ奉て中止の止むなきに至つたのである

意義ある祭典

土屋祭典總長の談話



跡城園公崎岡

然るに本年は既に諒闇明ともなり且徳川家康公の三百年祭に相當せしと且從來無格社であつた映世神社を龍城神社と改稱し同時に縣社に昇格され又本殿、拜殿共本多家より一萬餘圓を投せられて新築に成つたが未だ夫等の祝祭も濟で居ない爲め夫是を兼て大祭を行はるゝことになつたので、子爵家にも成るべく盛んに行はせられたい御希望である云々。

志賀副總長は語つて曰く、
本多家の舊知行は五萬石であつたが實収入は五萬石はなかつた、本多家は非常に貧乏で明治も十數年となりては一層に甚かつた、華族達との交際費十圓幾何といふにも差支へたことがある先代が亡なられた當時新聞に出す廣告料もなかつたのである、所が今より三十餘

年前に舊藩士で東京へ出て自分には人力車夫をして妻君に燒芋を賣らせて居た多門傳十郎と云ふ人が舊藩士等の懇請で本多家の財政整理の任に當り苦心して今日の本多家の財産を整理したのであつた、夫で本多家の財産が百萬圓になつたら立派なお祭をしやうと云ふのであり今や二百萬圓の財産になられた、先年の三百年祭相當の際は遠慮のため祭式は形式丈けで岡崎町には慈善の事を致された、忠勝公は伊勢の桑名で薨せられたのであるから桑名の寺で佛事をし且つ慈善及び教育事業に御寄附があつた、今度の祭は左様いふ譯で行はれるので本多家爵家でも意義ある祭典が出来らば財産の百分一を出さうと云ふ思召である、夫れで親戚や舊藩士は勿論貢縁故舊の人々一千名に案内をなし又七十歳以上の老人は敬老の意味に於て招待し男女へは徳川本多家御紋付の盃を贈つて今日の喜びを俱にし又新しき方では舊領内の小學校生徒一萬五千名へ本多家子爵の名を以て一人々々に案内状を發せられ其他有らゆる新式の方法を試みんとせらるゝのである、凡てを意義ある様にせらるゝのある云々。
斯くの如くにして、子爵家に於ては、偉人追慕の觀念を助長すると共に、一面公徳心と海外的思想を養成せん目的で、頗る有意味の祭典を行つたのである。

第一日 (四月十六日)

着々として
實行に入る

東雲の空も麗らかに霽れ渡りて、雀の囀る聲も長閑に、神の榮光を讃めまつるにも似た大祭の第一日は來た。三月末以來二旬に涉り、百餘名の大祭委員が準備も完く成りて、今や着々として其實行に入らんとするのである。

市中の盛装
は途行く人
の氣分をう
くる

岡崎の市街八千の軒場々々には、三ツ葵と立葵の紋を描ける提灯を立て列ね、覆ひの花笠、垂れし金銀の短冊の、そよ吹く風に颯も春めきて心地よく、軒を繞りての幔幕、辻々の緑門大額或は各商家が競ふての店頭裝飾など、盛装を盡したる市中の光景は、何れも途行く人の氣分をそよる。實に我岡崎三萬五千の市民は、此大祭に對し、あらゆる行爲の上に協賛の意を表し、全力を傾注し、遂に熱狂したのである。換言すれば、我岡崎市民の腦裡には大祭以外に何ものをも認めず、大祭なるものゝ外市民を支配するものがなかつたのである。嗚呼岡崎は熱狂の巷と化した。

祠前の櫻花

大祭の執行地たる岡崎公園は、新樹漸く空に連りて翠色半ば滴らんとし、春光未だ盡きず、殊に祠前の櫻花は、白雲の起るが如く、紅霞の靉くが如き自然の風光に加ふるに與ふ限りの盛装を凝らし、莞爾として大祭を迎へんと欲するが如き風情がある。

例 祭

毎年の例祭である。例年の如く其式典は上げられたるも、社殿の裝飾、神前の供物、さては苑内の裝置など、例年に比し一段の注意現はれて、自から尊嚴を加へたやうに拜したのである而して式典の順序は左の通りである。

例祭々式次第

例祭祭式次第

- 當日早旦社殿ヲ裝飾ス
- 午前八時社司以下所定ノ座ニ着ク
- 次、幣帛供進使參進 コレヨリ先キ
手水ノ儀アリ
- 次、幣帛供進使稜所に着ク
- 次、修禊 先御幣物次幣帛供進使及
隨員參列諸員
- 次、幣帛供進使所定ノ座ニ着ク
- 次、御幣物辛櫃ヲ便宜ノ所ニ置ク 幣帛供進使
隨員副フ
- 次、社司諸事辨備セル由ヲ幣帛供進使ニ申ス
- 次、社司御扉ヲ開キ畢リテ側ニ候ス(此間奏樂)

次、社掌以下神饌ヲ供ス(此間奏樂)

次、社司祝詞ヲ奏ス

次、幣帛供進使隨員御幣物ヲ辛櫃ヨリ出シ假ニ案上ニ置ク(案ハ豫メ便宜ノ所ニ置ク)

次、社司御幣物ヲ奉ル

次、幣帛供進使祝詞ヲ奏ス

次、幣帛供進使玉串ヲ奉リテ拜禮(玉串ハ隨員之ヲ附ス)

次、幣帛供進使隨員拜禮

次、本多家主玉串ヲ奉リテ拜禮

次、社司玉串ヲ奉リテ拜禮

次、社掌以下拜禮

次、參列諸員拜禮

次、社掌御幣物ヲ撤ス

次、社掌以下神饌ヲ撤ス(此間奏樂)

次、社司御扉ヲ閉ヂ畢リテ本座ニ復ス(此間奏樂)

次、社司祭儀畢レル由ヲ幣帛供進使ニ申ス

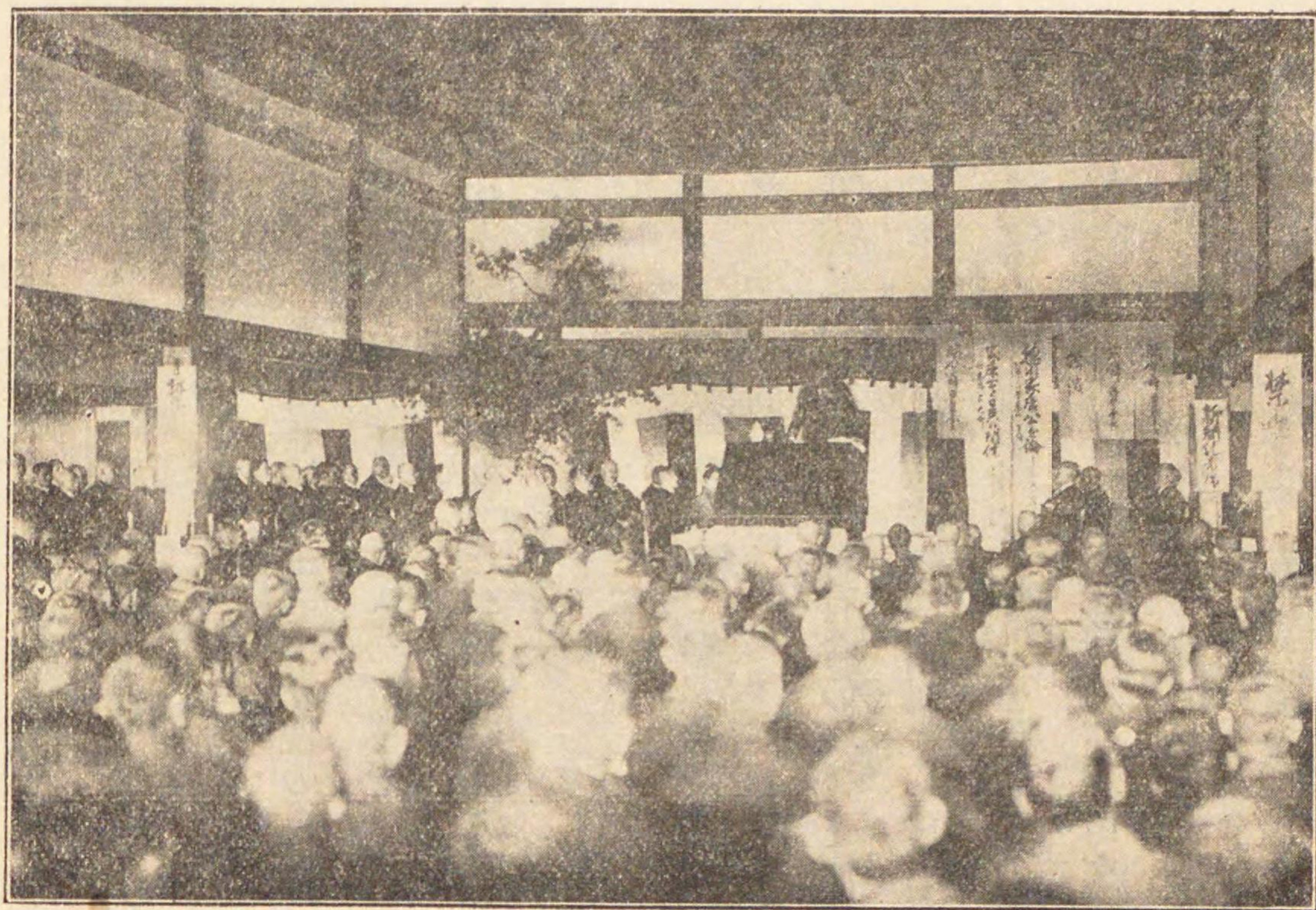
各退出

幣帛供進使たる愛知縣知事從四位勳三等法學博士松井茂代理愛知縣額田郡長從七位勳七等吉川一太郎氏は、愛知縣屬江口宗策額田郡書記小濱元夫の二氏を隨員として、當日午前七時過ぐる頃、已に着して式典の行はるゝのを俟つた、時到るや式は中川社司に依りて以上の次第に準し開始された、參列者は以上の供進使の外、殿上には祭主本多子爵、向拜には、土屋祭典總長、小柳津副總長、土屋海軍少將其他舊藩士、祭典委員等が列せられた、式典は午前十時を以て終了した。猶午后五時より、三百年祭夜祭式を執行し、本多子爵代理として、家扶淺尾鏝三郎氏が參列した。

■ 記念後援會

愛知縣教育會、全額田郡教育會の聯合主催にかゝる家康忠勝兩公三百年祭記念講演會は、當日午后一時より、三河別院内に開催された。來會者は以上の兩教育會員始め一般公衆にて、有繫の大會場も立錫の餘地なき盛況を呈したのである。早稻田大學教授エチ、エー、コックス氏の講演たる「家康公と日英の關係」及び堀田文學士の精細を盡くせる兩公關係の史實は聽衆に多大なる感動を與へた。會は先づ額田教育會長吉川太一郎氏の開會の辭に始まり、湯池内務部長は松井知事の代理として、左の式辭を朗讀した。

松井知事の
式辞



講演會場

夫レ世運滔々トシテ進歩シ其底止スル所ヲ知ラスト雖動モスレバ人心浮華ニ流レ虚飾ニ陥リ需用ヲ好ミ情ニ激ニシテ堅忍ノ徳ヲ欲ク或ハ事物ノ真相ヲ極メズシテ皮相ニ趨リ或ハ源本ニ溯ルヲ忘レ枝葉ヲ事トスルノ弊尠シトセズ此レ識者ノ憂フル所ナラズンバアラズ此時ニ方リ茲ニ愛知縣教育會額田郡教育會ハ徳川家康本多忠勝両公三百年祭記念講演會ヲ開催シ史學ノ大家ヲ聘シ両公ノ眞摯ナル性格及其事蹟ヲ聽キ其面目ヲ偲ビ其神靈ノ啓示ヲ感受シ以テ敬始尊本ノ念ヲ涵養シ民心教養ニ資セントス其効ヤ教育感化ノ上ニ尠少ナラザルヲ信シ一言蕪辭ヲ述ベテ式辞トナス。

大正四年四月十六日

愛知教育會長 法學博士 松井 茂

講師と演題

猶講師と演題は左の如くである、

△家康と日英の關係

附 忠勝公の大所

△徳川家康を論じて

功臣としての本多忠勝の事蹟に及ぶ

(以上講演の大意は末尾附録に在り)

午后四時半、講演會終了後額田郡公會堂に晚餐會を開く。來會者は兩講師始め、本多子爵、全夫人及令嗣、湯池内務部長、縣下に於ける各郡市教育會長、衆議院議員、縣會議員、中學程度以上の各學校長、額田郡に於ける町村教育會長、青年會長、農會長、小學校長、郡會議員、其他新聞記者等約三百餘名にして、席上コックス講師は、來賓一同に代りて謝辞を述べ、午后七時散會した。

早稻田大學教授

エチ、エー、コックス氏

文學士

堀田 璋 左右氏

提灯行列

長閑なる春の日も、暮れ告ぐる是字の鐘の音に送られて、苑内に装置せられたる幾百の大電燈、巽閣のイルミネーション、さては岡崎電燈會社の寄贈にかゝる天主台上に飾られたる徳川家馬標の金扇、本多家馬標の三ツ團子は、一時に点火せられ籠なる夜を照らして、煌々たる其光輝は晝を欺き、全く不夜城の觀あらしめた。時恰も軍樂の音高く、一萬五千の學生及青年會員は、『三河武士』の歌を叫びつゝ、紅提灯を点し連ね或は大行燈を押立て武步堂々として、龍城神社祠前に現はれて來た。これより先き此行列に關する委員は、大要左の如き豫定を以て行動を期したのである。

提灯行列舉行要項

舉行時日、四月十六日午後七時より約二時間

參加者、小學校兒童(尋常科第四年以上の男生)。師範學校、中學校、商業學校、青年會。

集落地、菅生川堤防(菅生川北岸公園下より殿橋に至る)
菅生川南岸殿橋より明神に至る)

行列順序、小學校兒童を先頭に、次て中學程度、次て青年會員の順にて整列する事。行進中は四列隊形を本体とし、道路狭き所は二列隊形を採る事、途中本多家の來賓に遇ふ時は、萬歳を唱へ敬意を表する事。

行列の順路、第一に龍城神社を參拜し、康生に出で、額田銀行より左折し横、能見を経て、伊賀八幡宮鳥居先きに至り八幡宮を拜し、舊道を引返して連尺、籠田、傳馬、両、投を通り、投尋常小學校にて散會する事。

前列は祠前を去りて已に一時間を過ぐるも、後列は猶祠前に來らず、其長さ凡そ一里に涉り蜿蜒として市中に練り込んだ、市中は到る處にイルミネーション輝き、幾千の提灯は点せられ、全く灯の海、灯の巷となつた。全く散會したのは午後十時過ぐる頃であつた。因みに我親愛なる健兒によつて歌はれたる『三河武士』の歌を左に記す。

『三河武士』(家康忠勝両公三百年祭。提灯行列行進の歌)

志賀重昂 作歌
鳥居 忱 作曲

- 一、産聲高く打ち揚げて、
天下の百獸皆震ふ。
- 十萬三河の美少年、
誰ぞ當年の寅童子。
- 二、唐の頭に蜻蛉切、
天下の群豪皆おそる。
- 十萬三河の美少年、
誰ぞ當年の平八郎。

名古屋なる扶桑新聞は十七日の紙上に報じて曰く、

岡崎夜景

三百年祭十六日夜の岡崎は不夜城を現出す殿橋々上には白青紫赤の色電燈數百を纏絡の如く吊し渡し橋畔の大線門にも岡崎電鐵會社の屋上にも亦電飾し其美麗云はん方なく水に映する様は恰かも彩玉を碎きしが如く此の附近菅生川の堤上には既報したる如き提灯行列は一万五千餘名の學生四列に整列し七時過ぎより軍樂隊を先頭に二中學二師範を初め長蛇の如く舊龍ヶ城龍城公園内に進めり神社を參拜し萬歳を三唱したる開聲は天地を震撼し昔日を偲ぶ天主閣上跡には恐れ多くも今上陛下東宮に在せし時御眺望あらせられし行在所附近の三ッ團子扇本多徳川兩公の旗印あり此に色電燈三百餘を附し下なる本多家別邸に附したる數白の電燈と相映じ眼も眩せんばかり康生町に出れば街の兩側には悉く鯨幕を張り廻し三間毎に三ッ葵の提灯を立て同行列の先頭額田銀行前に差しかるや子爵本多夫妻は同行三層樓上より令息及び舊臣と共にハンケチを打振り行列よりは之に和して萬歳を唱へ其れより伊賀八幡宮に參拜し投尋常小學校にて散會せり時に午後十時なりき當夜は此他種々の變裝行列ありて町内は雜踏せり

第二日

(四月十七日)

第一日の行事は豫定の如く進行して、空前の盛況を以て終り、已に第二日に入つた。昧早より院線の岡崎驛、西尾線の岡崎新驛より下車する客は、列車の到着する毎に恰も潮の寄するが如き勢を以て、吐き出された。岡崎電車鐵道は織るが如く、全力を盡して輸送に努むるも、到底其客の十分一をも運ぶことは出来なかつた。停車場口のみならず、矢矧橋口、井田口、欠口何れの方面も、道路といふ道路は陸續として、進む人計りである、岡崎へ岡崎へと。

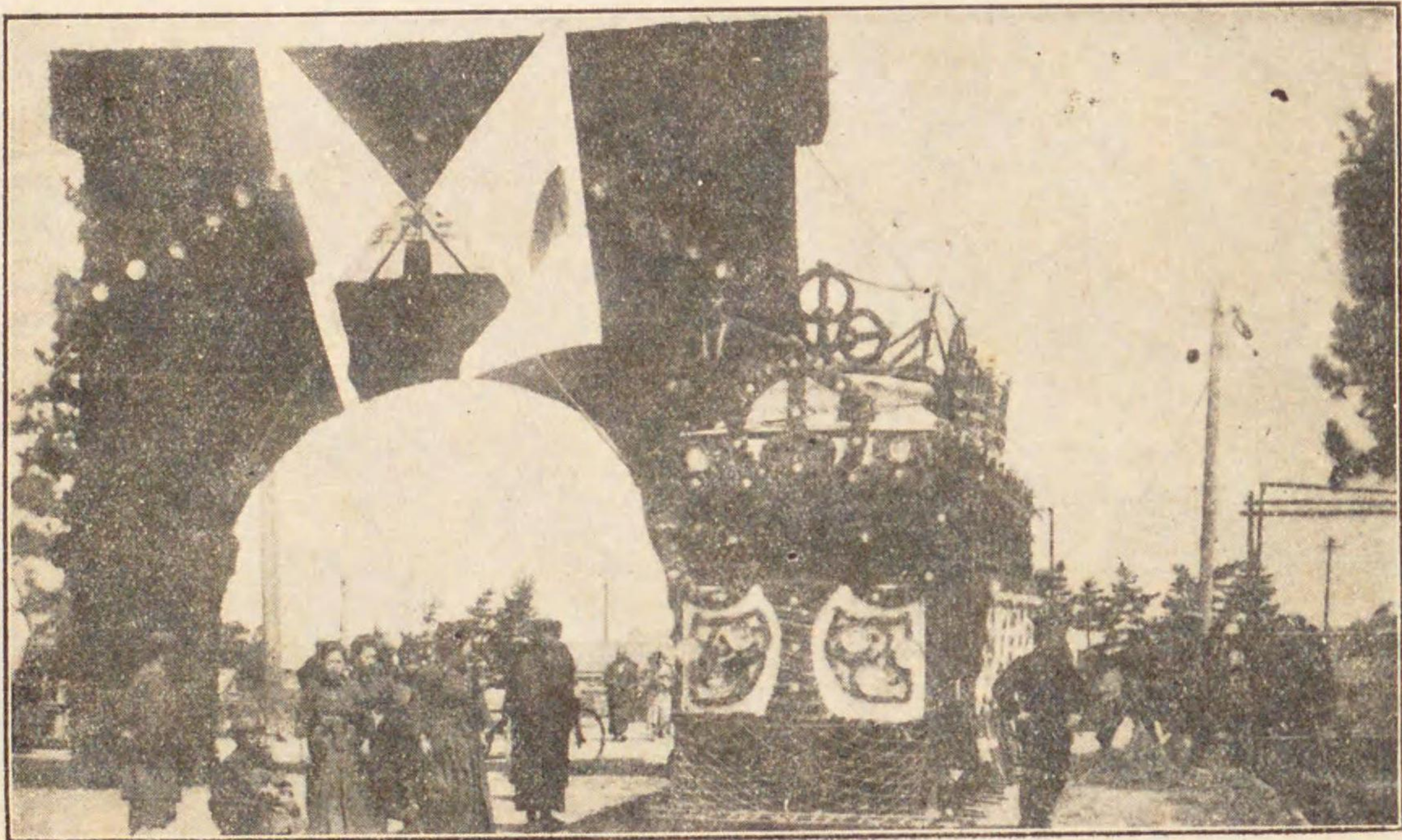
潮の寄するやうに吐き出された汽車の客

三百年祭

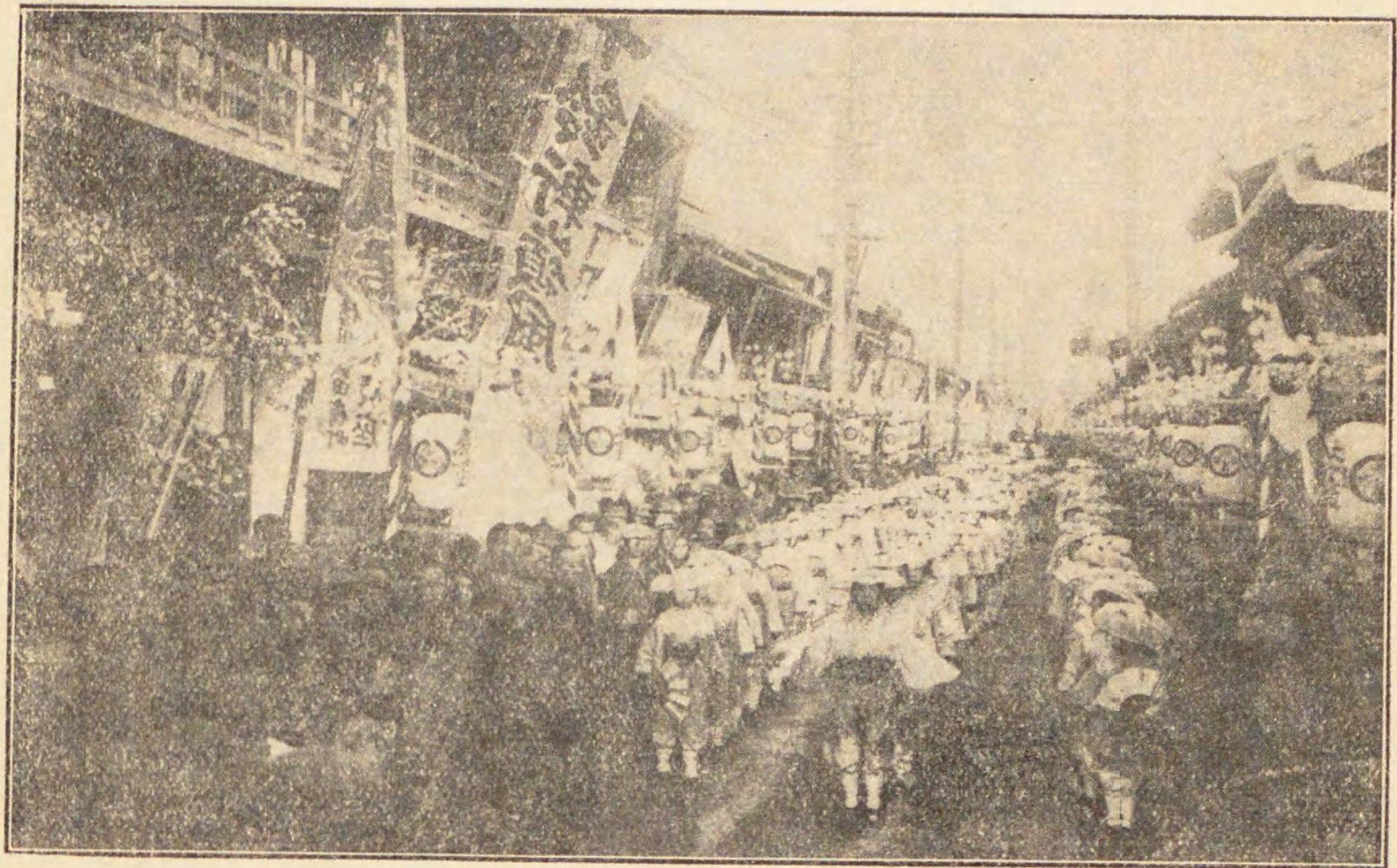
第一日に於ける雜鬧は、全く忘却されたる如く早旦より仕丁によりて苑内は淨められ、朝風に散る落花亦意あるが如く、清絶の尊さを感じしめた。今日は徳川宗家の賓客を始めとして、一千二百餘名の來賓を迎ふべき最も重き日である。早朝より各係員は各其部署に着き、東奔西走其任に努め、今や全く一大式典を上ぐるの準備は整頓した。時は已に午前九時を報して居る。茲に於て苑内警備の消防夫をして、同じく警備の警吏と共に、園内に在る公衆を一時園外に拂ふて、各其入口を警戒し、式典執行中來賓以外の公衆を遊覽せしめざるの用意をした。此時遅く來賓は續々と受付を襲ふて來た、受付を経たる來賓は、何れもフロック或は

一千二百の來賓

陸續として來賓受付を襲ふ



花電車



藝妓の行列

羽織、袴に正装せる其胸間に「家康忠勝兩公三百年祭」と記せる小短冊を結びたる櫻花の徽章を飾り、手に手に呈饌券や記念の繪端書や二三の刷物など受取り、嬉々として祠前に向つて去る。春の日は麗かに照らして居る、大御代の静かさが偲ばれる。時十時に垂んとする頃、木遣りの節高く尺の大筒を二筋の綱によりて曳きつゝ一隊の娘子軍は受付を壓倒して來た、こは傳馬藝妓の一隊で、今日の大祭に參拜し、且つ來賓接待の任に當らんが爲め、總勢總て百四十餘名を舉りて練り來つたのである。其服裝は何れも、薄紫の衣裳にて袖は元祿、脊には三ツ葵、表には立葵の大紋を着け、裵色に天龍を散らしたる裁着を穿ち、襦袢の襟は元祿の切り石模様、足袋は黒と赤の四ツ目模様、髪は田舎娘形、頭に

は藤娘笠を戴き、足には福草履をはき、腰には各瓢を付けたる、其嬌艶の容姿は、實に閉月羞花の粧ひを盡し、爛漫たる苑内の櫻花と相映し、傍人をして驚異の眼を放たしめた、其木遣りの唄に曰く。

「一」

ヤ、是の字つかむと、夢見て産れた、

ヨイヨイエンヤラサー。

古今の英雄東照權現、

祝ひ祭るや三百年、ヨイヨイ。

日本の御國の譽れは地球上、

ヨイヨイエンヤラサー。

「二」

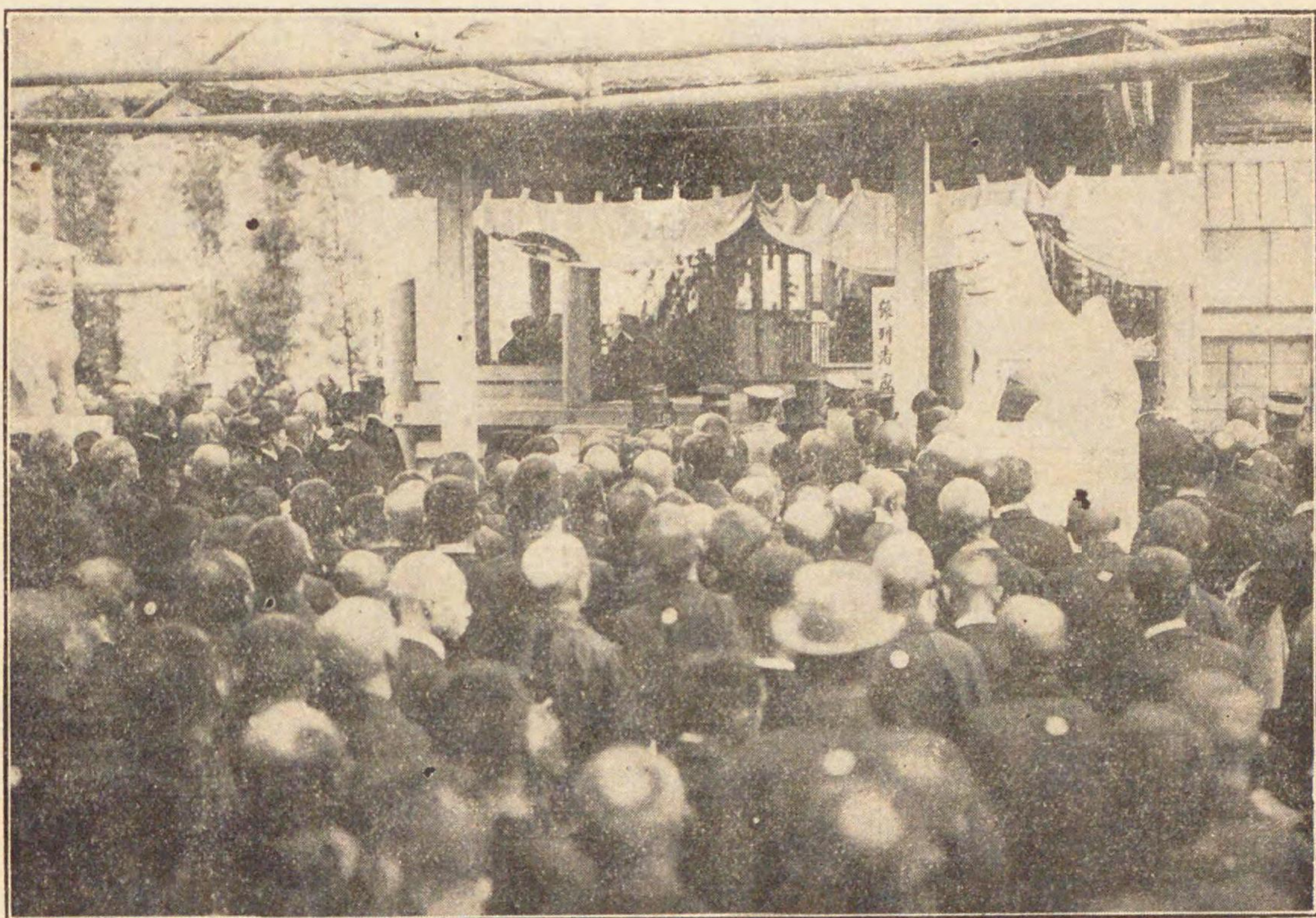
ヤ、五万石でも岡崎さまは、

ヨイヨイエンヤラサー。

鹿角の兜に御鎗は蜻蛉切り、

原霞外作

一万二千の
學生



大 祭 式 場 (一)

左り放れの立ち葵、ヨイヨイ。

天が下武名は並ぶものぞなき、

ヨイヨイエンヤラサ。

時刻は刻一刻と過ぎて行く、來賓は十

重二十重に受附に迫つて來た。

舊岡崎領内に存在する學校。第二師範學校、第二中學校、商業學校、高等女學校、盲啞學校、其他の各小學校生徒は、清海堀の西、伊賀川に沿ひる一体の地域に指定されたる位置に着き、將さに行はれんとする式典を俟ちつゝある。

時は午前十時三十分を報じた、一發の煙火は爆然として山河に轟き渡つた、愈々三百年大祭の式典は上げられんとする

のである。その式典の順序は左の如くである。

三百年祭祭式次第

當日早旦社殿ヲ裝飾シ式場ヲ辨備ス

午前十時社司以下祭員所定ノ座ニ着ク

午前十時三十分徳川本多兩家主並親戚殿上ノ座ニ着ク

次、祭典係參列諸員社前所定ノ座ニ着ク(太鼓ヲ打ツ)

次、修祓

次、社司御屏ヲ開キ畢リテ側ニ候ス(此間奏樂)

次、社掌以下神饌幣帛ヲ供ス(此間奏樂)

次、社司祝詞ヲ奏ス

次、本多家主祭文ヲ奏ス

次、祭典總長祭文ヲ奏ス

次、來賓祭文ヲ奏ス

次、各學校生徒頌徳歌ヲ合唱ス

三百年祭式
次第

次、社司玉串ヲ奉リテ拜禮

社掌以下座後拜禮(此間奏樂)

次、徳川本多兩家主並親戚玉串ヲ奉リテ拜禮

次、正副總長本多家々令玉串ヲ奉リテ拜禮

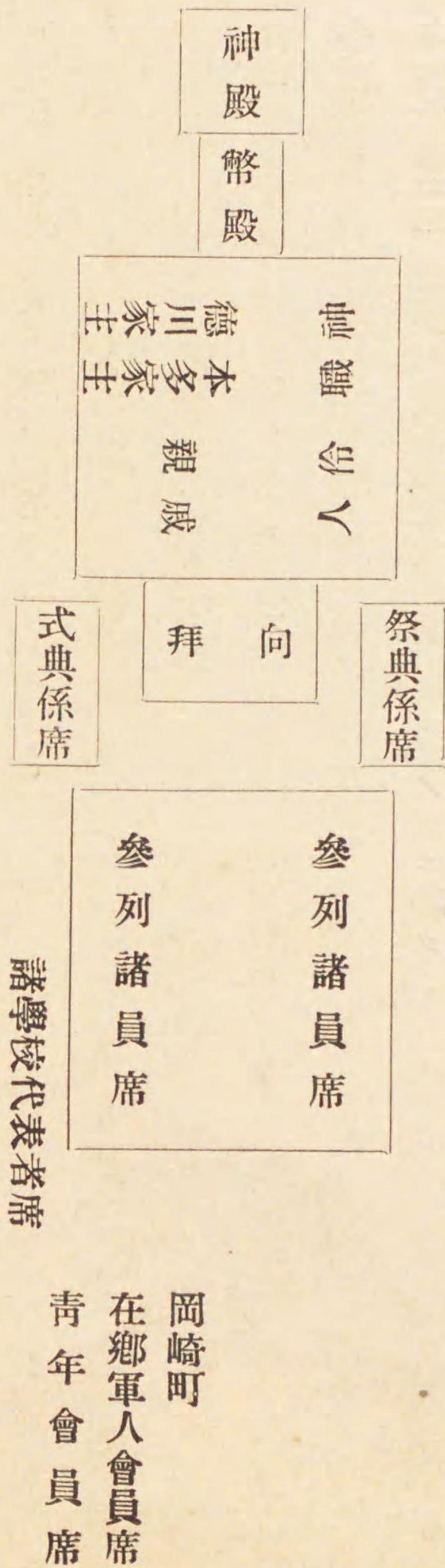
次、參列諸員拜禮

次、徳川本多兩家主並親戚及參列諸員退下

次、社掌以下神饌並幣帛ヲ撤ス(此間奏樂)

次、社司御扉ヲ閉ヂ畢リテ本座ニ復ス

次、社司以下祭員退下



賓客の方々

御扉は開か
れたり

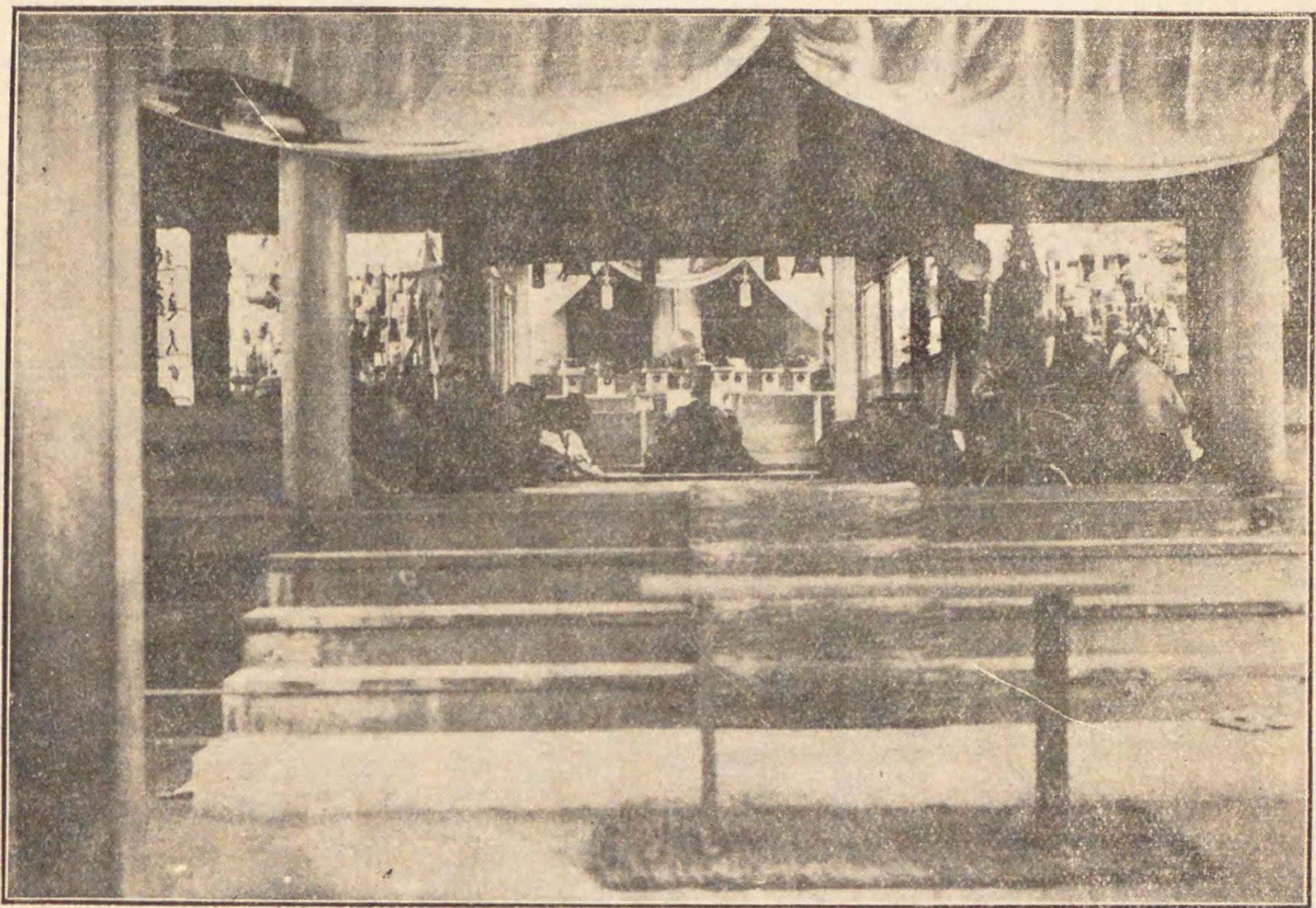
本多祭主の
祭文

これより先き、徳川家達公御代理として令嗣家正君を始め、子爵御親戚として酒井忠正(舊姫路藩主伯爵酒井忠興令嗣)伯爵真田幸正(舊松代藩主)御代理、伯爵松平頼壽(舊高松藩主)御代理、子爵本多涉(舊山崎藩主)御代理、本多賢壽麿、本多敏樹、子爵櫻井忠胤(舊尼崎藩主)井上全詮(舊鶴舞藩主)井上子爵家分家)同夫人艶子、前貴族院議員佐藤光興(新潟縣多額納税者)御代理の諸氏及祭主本多子爵、同夫人芳子、同令嗣本多忠昭氏は何れも、殿上に參拜せられ、來賓としての湯地内務部長(愛知縣知事代理)、加瀬騎兵旅團長、土屋海軍少將、岡崎所在各官衙長三河各郡長、各學校長、新聞記者等其他の參拜者は、何れも參列諸員席に、土屋總長始め各祭典委員は各其豫定の席に着いた。

偶々奏樂の響きは瞭亮として起る、一座肅然、自から襟を正して神威の尊嚴に伏した。此時中川社司によりて御扉は開かれ、社掌によりて神饌幣帛は供せられ、式は徐々に進んで、社司の祝詞あり、次て祭主本多子爵は祭文を朗讀せられた、曰く。

維レ大正四年四月十七日從三位勳四等子爵本多忠敬聊カ舊封内ニ産スル所ノ物ヲ供シ縣社龍城神社ニ謹ミテ徳川家康公ヲ祭り且ツ合祀セル所ノ吾祖忠勝君ノ靈ニ告グ

恭シク惟ミルニ家康公此處ニ誕生シ給ヒ允文允武上 皇室ヲ翼賛シ下百姓ヲ愛撫シ克ク三百年太平ノ基ヲ啓カセラル其大功偉勳海内誰レカ又比フベモノアランヤ吾祖忠勝君モ亦岡崎ノ



大 祭 式 場 (二)

北郊ニ誕生シ其祖父其父皆徳川氏ノ將帥ト爲リテ皆戰死シ忠勝君亦家康公ヲ贊ケテ大小五十有七戰功ヲ以テ諸候ニ封セラレ子孫連綿十七世爰ニ忠敬ニ至ル忠敬不肯固ヨリ云フニ足ラズト雖モ叩リニ 天寵ヲ辱フシテ榮爵ヲ賜リ貴族院議員トナリテ平生蹇蹇涓滴ノ忠ヲ 天朝及ビ國家ニ竭サンコトヲ期スルモノ是レ家康公ノ餘徳ト忠勝君ノ遺烈トニ頼ラザルモノナシトス乃チ私カニ資ヲ投ジテ社殿ヲ營ミ去歲工成リ家康公ヲ祭神トシ忠勝君ヲ合祀スルヤ特ニ縣社ニ列セシメラル因テ今茲ニ非奠ヲ設ケ二神三百年ノ忌辰ヲ祭り齋戒沐浴以テ三百年來海嶽ノ鴻恩ヲ仰ガントス祭酒薄シト雖モ庶幾クハ二神微衷ヲ嘉納シテ來リ亨ケヨ。

子 爵 本 多 忠 敬

大正四年四月十七日

次で、祭典總長土屋男爵は左の祭文を朗讀された。

茲ニ龍城神社鎮座東照大君及映世公三百年祭ヲ舉行セラル夫レ龍城ハ東照大君降誕ノ地タルヲ以テ古來神祠アリ又舊藩祖映世公ヲ始メテ神ニ祭リシハ實ニ忠敬公姫路在城ノ時ニ在リ爾來各所ニ轉封シ到ル處神殿ヲ建テ敬祭ス後岡崎城ニ移ルヤ亦神殿ヲ建テ春秋ノ祭聊カモ怠ラズ星移リ世變リ明治維新ニ際シ二社ヲ合シテ龍城神社ト稱ス後チ社殿造營ノ舉アリト雖モ漸次風雨ノ爲メニ破壊セラル客歲舊藩主本多子爵閣下私資ヲ投シテ社殿幣殿拜殿及神饌所社務所ヲ新築シ又更ラニ金五千圓ヲ寄進シ以テ永世維持ノ基礎トナセリ抑モ岡崎ハ二神ノ桑梓遺蹟流風尙存シ士民甘棠ヲ思ヒ敬仰已マズ宜ナル哉官其志望ヲ嘉納シ大正三年四月八日縣社ニ列セラル茲ニ於テカ二神在世ノ時 皇室ヲ奉尊シ國家ニ盡瘁セラレタルノ功績此ニ至リテ益々顯ハル今年二神三百年ノ大祭ニ際シ士民熱誠ニ奔走盡力シ此盛大ナル祭典ヲ見ルニ至レリ熟ラ惟ミルニ舊岡崎藩士一千舊岡崎領内ノ人民十萬子孫連綿衣食豐足以テ三百年ノ久シキニ至リタルモノ是レ全ク二神ガ餘徳ニ頼ラザルモノナシトス今舊藩主本多子爵閣下ノ二神三百年大祭ヲ主催セラル、ニ當リ舊領内ノ士民益ニ二神ノ餘徳ヲ仰ギテ又彌々舊領主ノ遺澤ヲ追念

土屋祭典總長の祭文

ス感激何ンガ堪ヘン謹ミテ蕪辭ヲ捧ゲテ恭シク二神ヲ拜謝シ奉ル

大正四年四月十七日

家康忠勝兩公三百年祭總長

男爵土屋光春

來賓を代表
せる千賀岡
崎町長の祭
文

次て來賓總代として、千賀岡崎町長は左の祭文を朗讀された。

維時大正四年四月十七日岡崎町長千賀又市謹ンデ縣社龍城神社ノ社前ニ跪キ德川家康、本多忠勝兩公ノ英靈ニ告グ。

往昔足利氏季世ニ當リ天下紛亂麻ノ如ク蒼生塗炭ノ苦ニ陥リ其底止スル所ヲ知ラズ兩公我岡崎ノ地邊ニ起リ今川氏織田氏等強敵ノ間ニ介在シ備サニ苦辛ヲ凌ギ君臣水魚ノ交リ相得テ相親シク上ハ皇室ヲ尊ビ下ハ蒼生ヲ慈ミ強ヲ挫キ暴ヲ抑ヘ終ニ克ク大亂ヲ鎮定シ三百年泰平ノ基ヲ開キ其功富岳ヨリ高く其恩東海ヨリモ深シ宜ナルカナ世ヲ舉リテ尊崇至ラザルナシ茲ニ我舊岡崎藩主本多子爵ハ忠勝公ノ裔孫ナリ曩キニ巨費ヲ投シテ其城址ヲ相シ龍城神社ヲ建設シ以テ兩公ノ英靈ヲ祀ル今ヤ其功ヲ竣ヘ此良辰ヲトシ三百年大祭ヲ舉行セラル御宗家徳川子爵閣下ヲ始メ朝野貴官紳士ノ參拜アリ此岡崎町空前ノ盛典ヲ觀ル豈ニ感激ノ至リナラズヤ蓋シ其世道ヲ益シ人心ヲ導クニ於テ偉ナリト謂ツ可シ茲ニ恭シク清酌潔羞ヲ奠シ以テ永ク兩

公ノ庇護ヲ祈ル嗚呼英靈降リテ尙クハ饗ケヨ

大正四年四月十七日

岡崎町長 千賀又市

唱歌「葵の譽」の合唱



學生の集合

此時、來集せる一万二千の學生は、特に招聘せる第三師團陸軍々樂隊によりて吹奏せらるゝ軍樂の調へに和して、一齋に兩公頌徳の歌「葵の譽」を合唱した、壯快言語に絶し、天地も爲めに震撼した。二神も莞爾として傾聽された事と思ふ。

「葵の譽」

(家康忠勝兩公三百年祭。唱歌)

正五位勳五等

鳥居

沈作歌

梁田

貞作曲

一、清き流の徳川や、水魚の中の君と臣。

三葉葵に立葵、何れ劣らぬいふよる』

豊太閤は何者ぞ、千載不出の英雄ぞ。

其の英雄を凌ぎしは、三河の勇士の魂ぞ。

二、鷹野姿のいと軽く、渠制するは唯是れと。

山の尾崎に駒を立て、鞭を揮ふも勇しさ』

豊太閤の握るなる、天下を呑むや東照公。

仰げや仰げ其勇氣、三河の正氣予茲に在る。

三、金の瓢の馬標、押し行く敵の間にて。

川の岸邊に鎗を立て、馬に水飼ふ勇しさ。

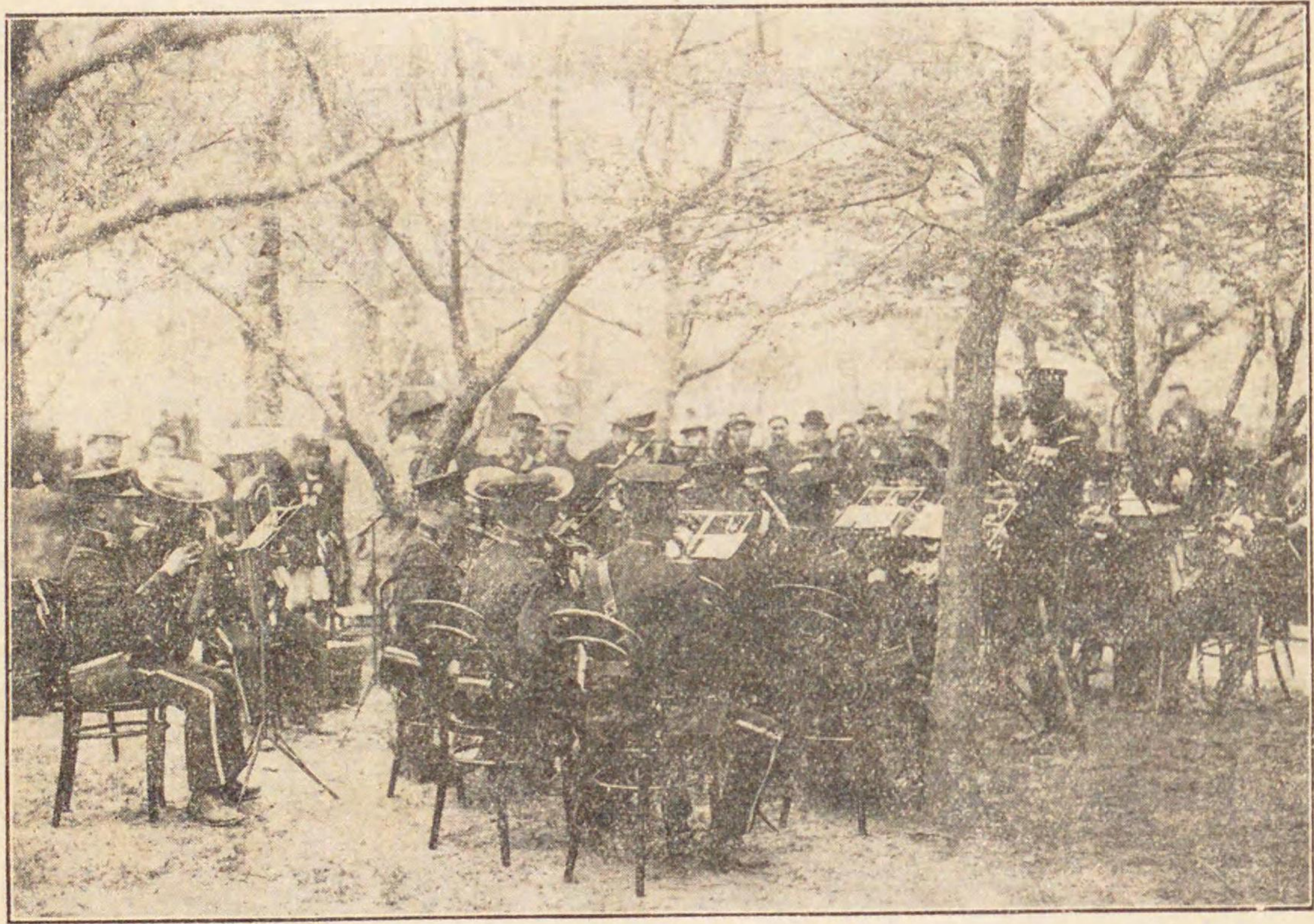
豊太閤の率ゆなる、軍旅を呑むや映世公。

慕へや慕へ其勇氣、三河の正氣ぞ茲に在る。

猶次第に準じて豫定の如く進行し、全く式典を終了したのは正午十二時稍過ぎであつた。

饗宴

大食堂の饗宴



軍隊樂隊

式典の終了と共に大食堂は開かれた。

大食堂は舊持佛堂跡に在り、間口七間奥行十七間の杉皮葺の大建物である。來賓は曩きに受取りたる案内書に依り、神殿西より天主臺西を越えて、廊下橋を渡り大食堂へと進んで來る。來賓接待係は今や遅しと來賓を迎へてそれごとく食卓に導いて行く、卓上には三重の折詰、瓶詰の酒、記念杯、風呂敷、猶協賛會より寄贈せる記念杯など、一纏めとして配置してある。此處に會する賓客總て一千余名。盛装せる百四十餘名の歌妓は、食卓の間に入り乱れて大に幹旋の勞を取る、其華かさは咲き乱れたる万朶の花のやうである、翻然として胡蝶の花を追ふて飛ぶや

烏帽子、直垂の徳川氏の本多祭主

大阪、東京朝日の記事

うである、春は正に閑である。

時恰も、祠前を辞したる烏帽子、直垂の徳川家正氏は、素袍、冠の本多祭主及酒井伯爵令副其他の御親戚と共に、陸軍大將の禮装せる土屋祭典總長、シルクハットにフロックコートの小柳津、志賀の兩祭典副總長に導かれて、天主臺上に登臨され、志賀副總長の説明により所謂一千八百年來王霸歴代の興亡の跡を下瞰されつゝあつた。

當日此式典に列し、親しく其光景を目撃されたる内外新聞記者諸君が、其新聞紙上に載せられたる報導を其まゝ此に轉載して、以て此大祭記事の上に光彩を添ゆることにした。

大阪朝日新聞は曰く(東京朝日新聞も同文)

●賑ひの頂點 (岡崎の三百年祭)

徳川本多兩公の三百年祭三日間中最も盛大に行はるべき十七日は花曇りの日和となり朝來岡崎に入込む者幾十萬全町人を以て埋まり空前の賑ひを呈せり祭典は午前十一時兩公を祀れる公園内の縣社龍城神社にて行はる、徳川公爵家より來れる家正氏は烏帽子直垂本多子爵は素袍冠の扮裝にて酒井伯爵を始め親戚の人々並に祭典委員長土屋大將に續いて來賓加世麟兵第四旅團長、内外新聞記者、在郷軍人、青年會員並に此日特に請待を受けたる本多家舊領内二十五箇町村の小學生徒一萬七千名參列し祭主本多子爵、土屋大將其の他祭文を奏するや第三師團軍樂隊の吹奏に連れ小學生一同は「清き流れの徳川や、水魚の中に君と臣、三ツ葉葵に立葵いづれ劣らぬいさよさ」の唱歌を唱ふ實に岡崎城址も揺るかんばかりなり、次で徳川本多兩家始め玉串を捧げ參列者何れも拜禮して祭式終るや來賓一千餘名の爲に大食堂は開かれ宴酣なる頃岡崎藝妓百三十名は徳川本多兩家の定紋つけたる元祿好みの衣裳に花笠姿美はしく六十名の樓主連は一文字の侍姿にて尺玉の

大阪毎日の記事



公園内の群集

煙火を籠箱に仕込み上に大なる兜を載せたる車を曳き「岡崎様は五萬石」と云ふ木遣くづしの唄面白く祭場に練込みたるか餘りの混雑のため數名の卒倒者を出したり。

大阪毎日新聞は曰く。

▲葵の譽

(湧が如き岡崎の賑ひ)

徳川家康、本多忠勝兩公三百年祭祝典第二日(十七日)は午前十時三十分家康公誕生地なる參州岡崎町公園龍城神社に於て執行參列者は徳川宗家令嗣家正氏本多子爵舊臣土屋大將其他二萬餘名にて盛況を極めたり祭典中第三師團軍樂隊の奏樂につれ學生一同は新作「葵の譽」を三唱し同十二時式を終り後午餐の饗應ありたり午後六時より菅生川の邊り堤防にて本多子爵主催の大夜會あり子爵及祭典總長土屋大將の挨拶あり地方に名高き餘船六隻は見るも眩く裝飾され煙花の打揚げあり又藝妓其他二百餘名の元祿模様の水色襦子の揃ひの衣裳に丸龍を染め抜きたる同じ短袴の出で立ちにて編笠を被り一齊に兩公の頌徳歌を唱へて町内を練り廻るなど同町の雜沓前日に倍したり。

神戸ヘラルド新聞は、三百年祭典式場に於ける光景を以て、畫の如き雅趣ありと

題して曰く。

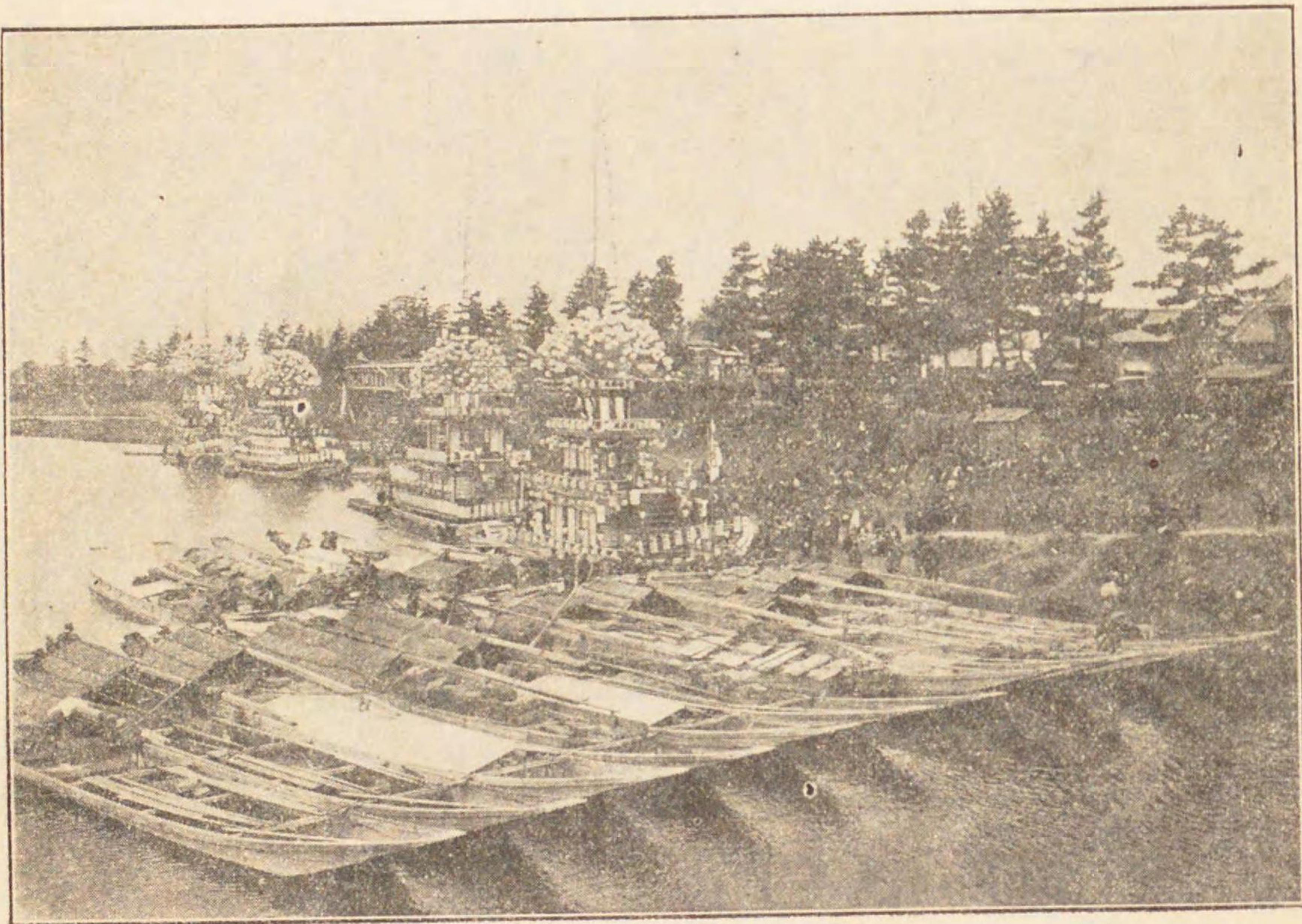
其の餘徳と遺烈との爲めに合祀せられたる兩英雄の直孫……徳川家正君及び本多子爵は古式の衣冠束帯にて着席せられた、サテ参列の方を見れば奇異にして實に記念とすべき光景を呈出し全くの史的にして且つ畫趣がある、フロツクコートに禮帽の人、陸海軍服の人、羽織袴の人は、徳川將軍家の初代期に正しく着用せられたる鎧兜に身を固めたる人と相列び其間に鮮かなる青色の衣物着けて橙色の脚絆草鞋の扮粧、鼠色絹紗の透明なる奇形の笠被りたる藝妓の群を瞥見するかを認めれば此處には洋装制服の中學師範學校生徒の大群あり、彼處には麻袴着用の父老あり、赤十字社の看護婦看護人あり、カーキ色の兵士あり、試みに新舊兩日本雙面の象徴を現はせり云々。

■夜會と鉾船

本多祭主の主催にかゝる夜會は、此日午後六時より菅生河畔なる大棧敷に於て催された、晝過ぎる頃よりの花曇り空は、何時しか薄墨を流したやうな空と變り、三々伍々來賓を迎へんとする時刻には、はやホロ／＼と雨のこぼるゝのを觀るやうになつた。然れども來賓諸氏は雨を冒し車を飛ばして來會された、今其氏名を上ぐれば。

今井安良、本郷榮、堀田璋左右、報知新聞社、千藏尙、小山田勘二、大口喜六、大阪朝日新聞社、大阪毎日新聞社、河村健吾、吉川一太郎、土屋光金、中川喜代馬、名古屋新聞社、名古屋日報社、前川榮、萬朝報社、藤澤茂登一、古橋卓四郎、コックス、神戸ヘラルド社、主カーチス、旭野慧憲、湯池幸平、宍戸俊治、新愛知新聞社、ジャパンプライムス社主筆、守

主人側



船 鉾

永兵次、千賀又市、政教社、林喜江太郎、岡崎朝報社、野依治郎、牧野廣吉、深田三太夫、舟橋賢鑑、後藤狂夫、西岸寺、參陽新聞社、淨専寺、新朝報社、新三河新聞社、千賀千太郎、西三新聞社、鋤柄角之助、中川輝二、酒井忠正、同隨行、櫻井子爵、同隨行、井上正詮、同夫人、眞田伯爵御代理、松平伯爵御代理、本多子爵御代理、佐藤家御代理、本多敏樹。

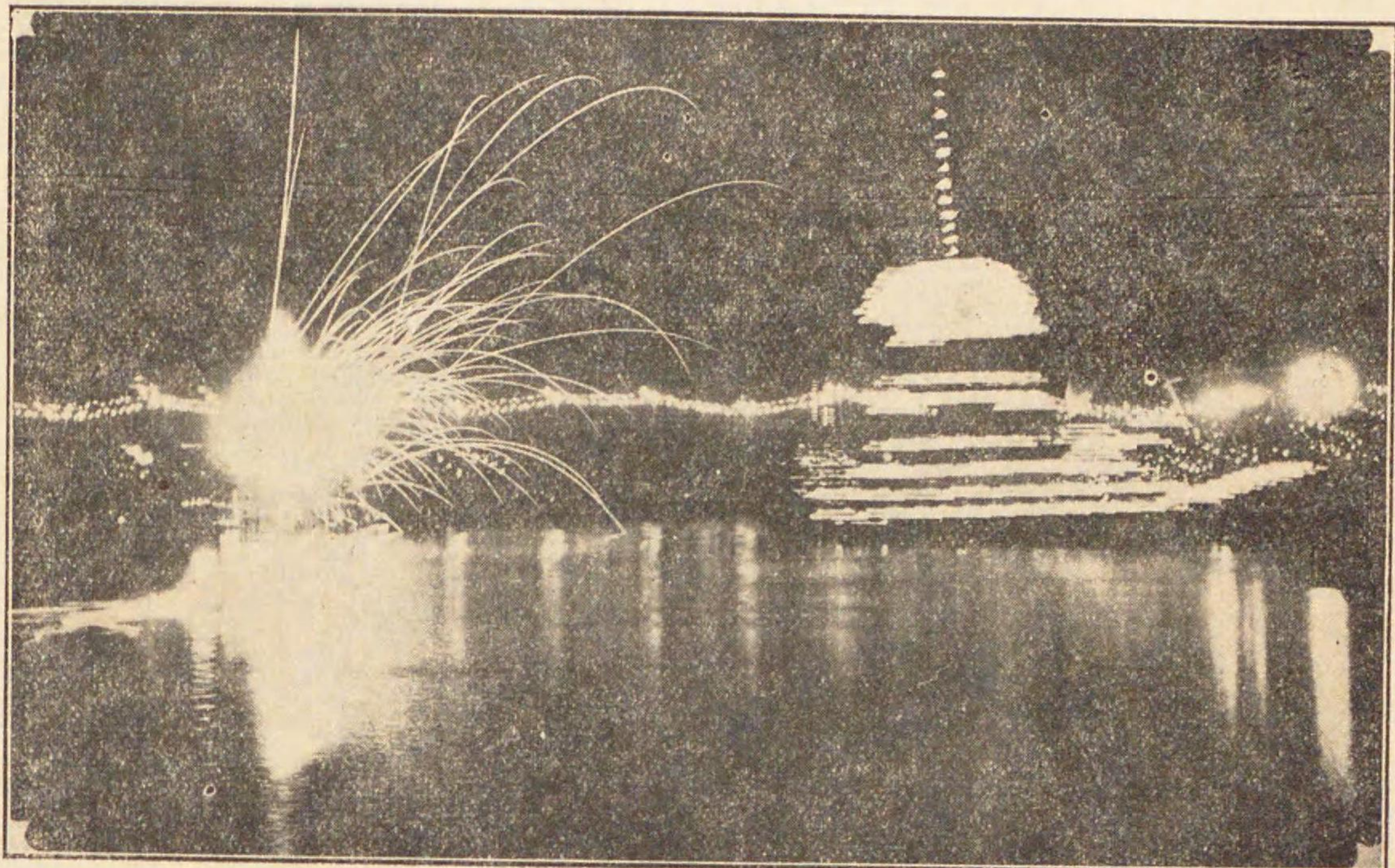
の諸氏にして、猶主人側よりは。

本多子爵、同夫人、土屋男爵、小柳津要人、志賀重昂。

の諸氏が列席された。會場たる棧敷は殿橋の下流北岸に南面して、長さ五十間に涉

裝飾された
大棧敷

元祿風の歌
妓



火 花 と 船 鉾

り建てられた。賓客は一列に南面して坐に着く、肩後には五色の錦幕を張り詰め、天井には、五彩の裝飾美しく、縦横に引き廻され、電燈は晝の如く輝き、其結構は一時的の棧敷として驚くばかりの成効で、係員の苦心も認められた。

灼々として朱火燿き渡り、知らぬ間に一坐は夜の幕に入った。濛々たる春雨は益々降り來つて擔を垂る点滴の音さへ耳に傳へて來る。前面を視れば既に數艘の鉾船は舳艫相銜んで遊戈して來て居る。幸ひ雨覆ひの用意も整ひ無事夜會は豫定の通り進んで、元祿風の装ひせる歌妓により配膳され、志賀祭典副總長の挨拶により宴は開かれた。酒數行の後、本多祭主の挨拶あり來賓として神戸ヘラルド社主カーチス氏の謝辭があつた。

六艘の鉾船

五彩天を掩
ひ管弦流
れに響く

これより先き、當夜の餘興たる鉾船は、殿橋上流に千鳥丸、猩々丸の二艘、下流に龍城丸、八千代丸、晴明丸、瓢丸の四艘を浮べ、鉾なす其提灯は高くぬば玉の闇に聳れて輝き、管弦の音は流れに響きて、十萬の觀客の中心となつて居た。

篠つく雨もなんのその、霏々たる細雨に何を恐れん三河男。舟中の壯漢は裸身にて甲板に現れ、火蓋を切つた。爆然たる其響きは囂々と山河に轟き渡り、彩花は闇の空を描き、金魚、銀魚は絶へず水中に發射せられて、恰も錦繡を展へた如く、痛快極まつて寧ろ腹を刳ぐられるやうな心地がする。

八十の賓客、何れも狂喜して坐を起ち欄に倚り、酔に乗じて喝采の聲止まず、降りまざる雨も今は此壯舉に痛快さを加ふるのみである。

夜會の終りしは降りしきる雨の午後十一時過ぐる頃であつた。猶此夜の光景を寫したる新聞雜誌記者諸氏の麗筆を其まゝ此に載せて、當夜を偲ぶの料とするのみならず、不文なる記事を補ふことにした。

『日本及日本人』の記者三田村鳶魚氏は、五月一日發行の同誌上に『岡崎の三百年祭』と題し十三頁に涉り詳細に記載せられたるが、其五菅生川の鉾船の項に曰く。

菅生川の北岸に連互した看棚さしきに、本多子爵は雲の如くに來集せる賓客を引いて、盛んなる招

「日本及日
本人」の記
事



夜會場(左端、本多祭主)

三二
 讖を開かれた、繰へる鉾船は、殿橋を界として、上游に二隻、下游に四隻、此夕を粧飾す可く、將た東照宮の偉業、平八郎忠勝君の餘光を、逆に壯大にすべく、今や三河花火の特色を天下に示さんとして、只管に時の移るを待つ。

志賀重昂氏は看棚の中央に立ち、輾然として如何にも嬉しさうなる壯貌、徐に挨拶の辞を陳ぶ「舊主人も他技なし若し夫れ酒に至つては敢て諸君の敵たるを避けず、祭儀總長土屋大將も旅順攻撃の餘勇、馬伏波も物かは、千盞萬鍾も未だ曾て怯むべしとは思はず、次長小柳津要人七十二、戊辰の際に四十五戦せり意氣尙ほ存す、長髯を掀げて好んで酬答すべし、予も亦飲みては人後に落ちざる自信を有す」満座哄然。矧川漁長は人に先ちて喜び殆んど快心に堪へざるが如し、白髪は金太郎の頭上にもチラチラ見ゆ、胡麻塩の金太郎、胡麻金式の志賀先生、

涓滴の量なき我等も先生の爲めに酔ふのであつた、酒は飲んでも飲まいでも、酔ふ可き機會はと、案外な五斗兵衛。ドオン、空鐵砲ではない烟火の筒音、鉾船は早く看棚近く進んで居た。我眼界の闇を奪ふ四隻の燈影。樓船は自体を悉く吊燈に飾つて、尙ほ屋根の上に萬竿を植ゑ、每竿各燈森然たる丘狀をなし、更に丘上に一竿長く天に朝せり、斗字形に三四十燈を點す、鉾船の名は實を得て居る。畢竟燈火で造つた花車屋臺である、馬鹿囃子は葛西の藝術家を待たずとも、鉾船の鉦鼓勇ましく、急笛の賑はしく、靜に四隻は看棚の前を來往交替する。打上げ、建物、交番に爆聲壯快に空中を彩る、大濱の打上げ、岡崎の建物は三河花火の精粹と聞いた、眼前に數番の建物を見て、聞いたよりも岡崎名物の巧妙優秀なのが知れた建物は船首に架を置き、架上に彩花を以て種々の圖書を描くのである、炳乎たる青黃赤白は宛ら海印定中の所現かと思はれた。舟中の健兒は爆發と共に熱狂して、多般の歡呼を揚げて踊躍する、衣被の脱けて赤裸となるまで踊躍する、彼等は花火を造作するために死し、點火爆發の際にも傷く、彼等は花火の成功の爲めに死傷を厭はぬ、昧死して一發の壯興を買ひて悔まぬ。鉾船は各々距離を得んとして、其の舳を轉じ、水面を開く時、岸上棚上の歡呼拍手は一齋に起つた、今や岡崎花火の最特技、天下の奇觀なる金魚花火は試打せらるゝのである四隻交々爆聲を放つて、菅生の川瀬に抛射する、忽に水面赤く、渾々たる火球は流れを溯る

と見る間に玉は碎けて千萬顆、點々として水面を渡るや、漸く魚形となり、鬚搖き尾動き、一夥群遊し、乍ら左旁右側に珠没し顆出て、江草驟に青き處、三顆兩顆の綺鱗、簇々として浮泳し、復た橋脚を分明にしては、四顆五顆取次に粲たる金魚を現して、此際天地の縮小を感せずもあれ、轉た人間に盆池の頓大せるを覺わしめた。

今夜天黒く月なきを僥倖とした看棚上の人は、惚惚の極、衣袂の露を知らなかつたか、棚外の群衆は傘繖相連り、宵來の雨を防ぎ兼ねて居つた。春天無情、花を散らす飄風に次いで看棚を冒す冷雨を送り、兩岸に重沓せる歡喜の群衆を煩ひするか、碧翁はソッナ没分漢を好みましようぞ。月こそ違へ、鉦船は例年菅生神社の祭儀に於ける岡崎名物として知られ、昔の江戸にも聞けた花火である、さはれ、今夜の盛儀に豫期された全帝國無二の壯觀、それが意外の降雨に逢つて、鉦船の中に敦圉せる健兒は憤慨に堪へぬ、奮激した健兒は意氣冲天の概を以て、懸命に煙火發射に勉めた爲めに、今夜は幾十年にも希觀の成績を挙げた。天寵の豊かな三河の健兒は、斯くも激勵されて逆取循守の實驗をし得たのである、一旦の支障に退屈するようでは、何の事功も收められぬ、今宵の雨は著しくも健兒に教へけるよ、東照宮の威靈は其故國に来れる我等にも、千古不刊の垂訓を煙火に託して與へられたのであらう。

菅生川に鉦船を見て、江戸の兩國の花火を偲ぶ、彼の萬治寛文頃に著明な淺草川の屋形船

帝國無二の壯觀

其の形式は儘に鉦船傳來である。熱い錢湯は伊勢の風品吹から移つたやうに納涼の花火も三河から江戸に流播したのは疑ひもない、三河花火の根本は大濱豊橋にあると云ふ、若し戰國の世に農兵と硝薬とを馴蕩せしめた結果、治平の時に花火に轉化したものならば、これぞ徳川氏の軍備の餘澤であつて、撥亂反正の偉業は、軍陣の際に奇攻の主たる硝薬を、四衆が快心悦目の料とした、花火が京都大阪に欣賞せられずして、江戸に驩呼されたのを思へば、説明せずとも傳播の由來は知れる。

外字新聞たる神戸ヘラルドは曰く。

船は棧敷なる饗宴席の前面に停ると見るや、架上の彩火は忽ち點せられ徳川本多兩家の紋及び文字は炳乎として現はれぬ、煙花の内にて最も奇觀なる金魚煙火と稱ふるものあり。爆薬は七十五ヤード乃至一百ヤードの距離にて抛射せらるるや、見るく水面赤く化し、十呎乃至十二呎の火の舌は紅に水を撃ちて碎け流に逆ひて蠕動するや、漸く魚形となり、此くて金魚の群となり、鱗影閃々水に溯る處無二の奇觀となすなり。此の如き技術は岡崎より幾陪蓰する大部會にありと雖も猶且つ大奇觀と爲すに足れり。實に三河の州は煙花の規模巧妙、熟練を以て古來世上に鳴り居れること故ありと云ふべき哉。

外字新聞たるジャパン、タイムスは曰く。

鉦 船

岡崎町内の六區より各々一隻即ち六隻の鉦船なるものは川に浮ばされたり。鉦船とは二艘の長き川船を結びて一隻となし其中央に囃子樂人を置くべき三層の屋臺を築き、其上に一個年の日敷に擬へて三百六十條の竿を植て、竿端に提灯を吊り每竿各燈森然たる丘状を作り、更に丘上に一竿長く天に朝し、一個年の月敷に擬へて此に十二個の提灯を段々に吊るし、此の如きもの六隻悉く燈を點じて徐るに菅生川を下るなり。其壯觀誠に盡くし難し云々。

ジャパン
タイムスの記
事

神戸ヘラル
ドの記事

又曰く。

東京の子供は何れも鍵屋玉屋と口にすれども、此等の名高き煙花家は元來岡崎より移り来る者なりとは誰れか知る人あるか。三世以前火薬の製造は三河に輸入せられて以來三河の人は煙火の技術に於て絶特なる人種とはなりぬ。毎年夏季祭禮舉行の際には人々何れも其技術を競ひ合ひ火薬爆烈の爲めに死傷する者あるに至れり。煙火は連続に迸發せられ而も健兒は手に之を振りつゝ迸發するなり。夜の最奇觀は金魚なり。爆聲の後二三分にして大なる金魚の群れは水面に游泳するなり。此煙花の秘密は嚴に有たれ、日本の他の處に於ては未だ之を擬造する能はざるものなり。他の處に於ては未だ金魚の擬造に成功せざるなり。翌日は三千個の怪物大なる煙火筒……其の多くは直径一尺乃至一尺餘……は岡崎町内三個の便宜なる場所より發放せられたり。不幸にして當日は曇勝ちなりしも、夕景に至るや爆發は愈々起り、見物人の首は此處より彼處へと曲ぐる暇さへなかりき。

猶翌十八日發行の愛知縣下の各新聞紙は、争ふて當日の模様を報導せるが、今茲に其二三を轉載する。

新愛知新聞は報して曰く。

▲春宵河畔の宴

三河岡崎公園の下、菅生川の北岸に、長さ四十間の棧敷が出来た、柱は紅白の布で巻き、座には藁床の上に雪白の木綿を敷つめ、天井には花電燈、川に臨むは軒端には、立葵の定紋附いた提灯が一行に點された、これが十日の夜、本多子爵に依つて催された、家康、忠勝兩公三百年祭の夜會場であつた、生憎の雨脚が宵の程から、この祭の街を訪れて、参詣の群集が傘と傘とで町を埋めて歩く中を、それでも當夜の來賓達は定め時刻までに續々とやつて來て總て五十名と註されたが、主人側の子爵、夫人、令嗣、櫻井子爵等孰れも黒の紋服で、五色の錦幕を後にして着席した處には、如何にも華族様らしい閑雅さが見えた、その外には八字髭の白い、額に日露戰爭の疵のある土屋大將、早稻田大學のヨックス氏、神戸ヘラルドの記者カーチス氏などが來賓中に異彩を放つて居た、其處へ給仕役として俵馬藝妓中粒撰の美人連が三十人許り現はれた、それが皆藤紫の縞子地に、葵の紋と源氏模様とを金糸で縫取つた衣服の、裾捌きもしよやかな元祿姿であつた

菓子器も膳も折箱も總てが杉柁づくめで出來て、昔太閤秀吉が利休の庵室へ行つた時、利休が不在で床の間の花筒が留守居顔に一輪の花を挿て居たのを見て、秀吉がそれを相手に獨りて茶を呑んで歸つてから、その花筒に「今宵のあるじ」といふ名が附いた、その「今宵のあるじ」は今本多家に傳はつて秘藏の器の一つとなつてゐる、それを模造したといふ、曰く附の花筒を來客へのお土産に贈つたり、會場の設備また接待の趣向總てが餘程凝つたものであつた、來客一同は折々降りかかる雨飛沫をも厭はずに、十時近き頃まで歡興の限を盡した。棧敷の下の川面には殿橋の上流に二艘と下流に四艘の鉾船が、幾百の白提灯を紫陽花形に點じたり柱のやうに連ねたりして、名物の花火を見せた、葵の紋や「大祭祝」の文字などを五色の仕掛花火で現はしたのは、爰ならでは見られぬ技巧の妙を盡したもので、また船首に据附けた數本の筒口から一齊に五色の玉を宙空へ噴き上げるのは、まるで數千の色風船の糸を一度に風に向つて切つたやうであつた、その外呼び物の金魚銀魚が水の上をちら／＼と泳ぎ廻る光景など繪にも筆にも盡せぬ壯觀とは此の事であつたらう、兩岸の堤やら殿橋の上やらに、しとしとと降る夜の雨に濡れながら、傘の海を作つた數萬の群衆は夜の更けるまで喝采を續けた。

名古屋新聞は報して曰く。

●春雨濃き大夜會

譬へ難き美觀壯觀はお自慢の花火、心も清々しくなる會場の設備

岡崎に於ける三百年祭第二日、本多子の招待に係る大夜會は十七日午後六時より開かれた、簾々と降り来る雨を冒し、身動きもならぬ菅生川堤の賑かさを人の間を縫ひながら行く殿橋より約半町ばかり下つた右岸の棧敷が會場である、設備はと見れば板圍の極めて簡單なものであるが、而も雨の漏るやうな心配も無し床は藁床の上に白布を敷き詰め、菅生川に沿つた方には紅白の布を巻いた手摺が設けてある、脊の方は五色の幕が嚴めしく引き廻され

「外見とは全く打つて變り清々しい氣分のある會場」

である、客は凡そ百名内外、今宵の主人本多子を始め土屋大將、志賀重昂氏は何れも紋付袴、客には軍人あり、官吏あり舊藩士あり、新聞記者あり千姿萬態、服装のさり／＼なるも面白い、席定まるや志賀氏は一言挨拶を爲して曰く、何は無くとも酒は充分あり、大に歡を盡されん事を望む、主人本多子は酒に掛けては豪の者、諸君の攻撃に會して恐るゝ人にあらず、土屋男また此の点に於ては決して人に後れを取る者にあらず、小柳津君亦常に

「飲酒に於て他人に後れを取るやうにては昔の武士」
たりし價無しと主張し、年八旬に近からんとするも元氣極めて旺盛なり斯く申す拙者も及ばずながら諸君のお相手として
不足なき一人たるを確信し居れり云々と例の志賀式を發揮する、此の頃から菅生川に浮べられてあつた満船飾の銚船四隻
は雖の節勇ましく徐々として會場前へと近附き始めた、ズラリと現はれた元祿姿の美妓數十名の嬌態は酒間の間に配され
何れ劣らぬ花あやめ、銚船からは手筒、亂玉、大紅葉と

「三河御自慢の仕掛花火が續々と揚られる空と水の」

美しき、會場の正面へ来た頃には三河花火の最も得意とする金魚、銀魚の放射が始まつた、放射されたる煙火の水面に至
るや四散八裂うよよと泳ぎ始める珍らしき、全く金魚の遊んでゐる通りに見える、之より先に本多子の簡單なる挨拶があ
つて後、神戸ヘラルドのカーチス君が「斯ういふ壯烈、雄大なる催しに會したものは日本在住の西洋人中恐らく私と此の
場にある外人のみであらう」と深き感謝の情を満面に現はし餘りの華やかさに目を剝いて嬉然として居つたのも無理は無
い、モウ追々時が移つて九時前後頃になると各船とも競て最後の大仕掛を眼目に掛る即ち

「二發の轟音と共に五色の彩火より成る小球は忽ち」

花形となり或は大圓形の火球となりそれが風車式にクル／＼と廻り出し空中正に百花綫爛、水面亦之と相映じて百花爛漫
其の美しき、壯きや云はん豪とや云はん、蓋し天下の美觀である、お陸で折角意匠を凝した元祿藝者も之が爲め見向いて
呉れる者も無い位、藝者は藝者で亦之に見惚れてばかりゐるので馬鹿を見たのは斯んな煙火は見慣れて居るといふ手合の
上戸連のみ、宴の終つたのは春雨降しきる十時頃であつた。

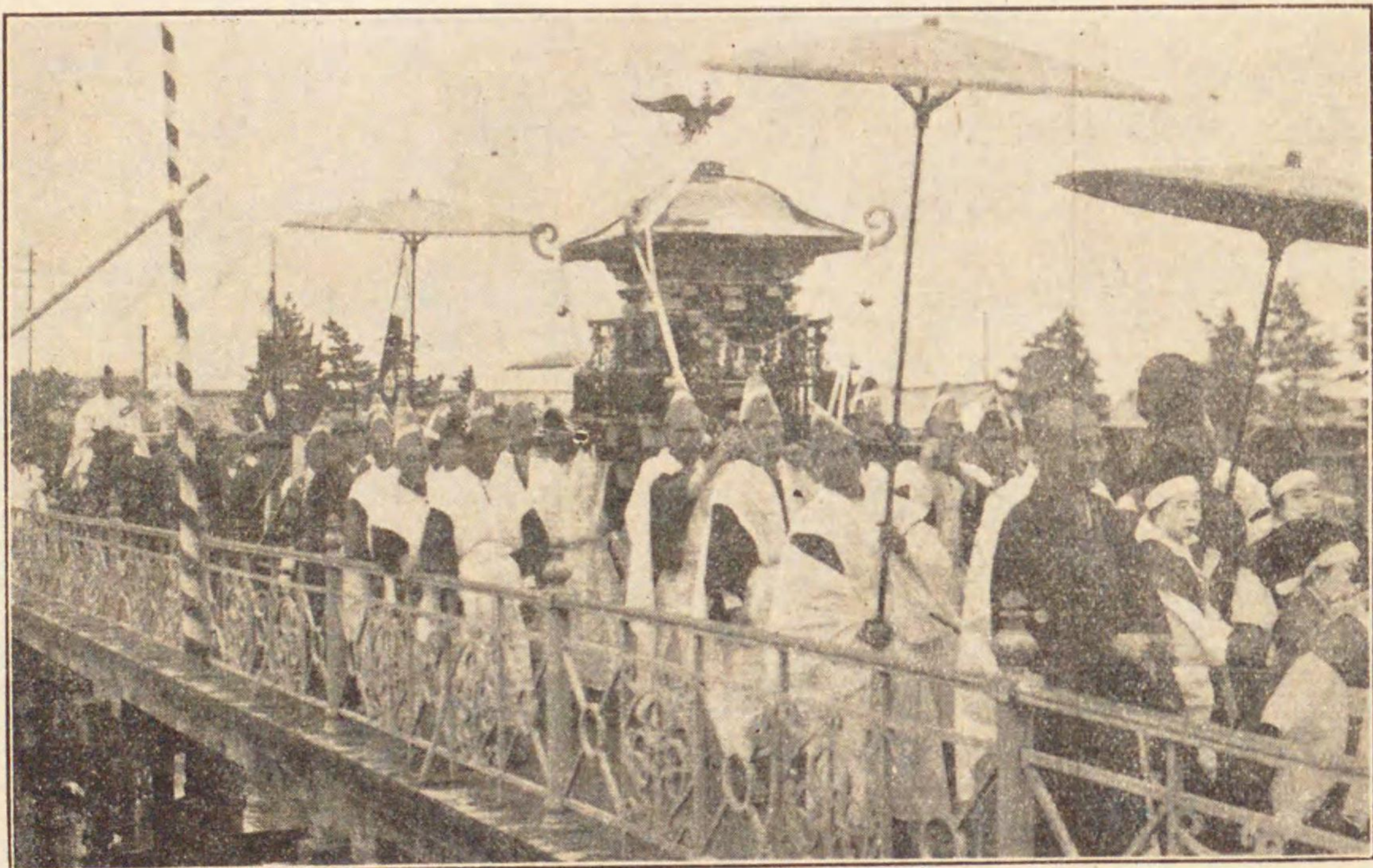
猶ジャパン、タイムスは其紙上第一頁に一號活字を以て『岡崎に於ける雄大なる三百年祭饗
宴』と題し、次に二號活字にて『招賓は最後の秒時まで何れも王侯の如く饗應せられたり』と特
筆大書した。又岡崎協賛會より、當夜の來賓に對し、花瓶(銘今宵の主)茶碗(甲山燒)岡崎案内
等を贈りたるか、其花瓶に就て記して曰く。

王侯の如き
饗宴

花瓶「今宵
の主」

今宵の主

春天の無情



神輿渡御

兩公三百年祭の招賓を待つに、岡崎町の委員諸氏は特に鐵
道驛まで出張し居りて優遇せられたり。岡崎町は招賓に對
し種々の記念品を贈られたるが、其内に本多子爵家々寶の
一たる青銅花瓶の摸造品を以てせられたり。太閤秀吉一日
茶博士利休の家に臨まる、時に利休家に在らず、然らばと
此の日本のナポレオンは其茶室に入りたりしに、椿花一枝
を瓶に挿みありしかば、是れが今宵の主よとて客自ら茶を
點じ打ち與じてをりたり。利休は歸室して英雄の小説的趣
味に嘆服し、此出來事の記念として花瓶を愛護せり。此の
花瓶は後に本多子爵家に傳はり、「今宵の主」と稱へられて
珍重せられたり。兩公三百年祭の時、岡崎町にては此を摸
造して招賓に贈りたるなり。

第三日 (四月十八日)

前夜來の雨は歇みたるも、陰雲未だ空を覆ふ
て去らず、苑内の櫻は、大方散り失せて、残ん
の花を吹く風は生暖く肌に不快の感を與へ、誰
しも春天の無情を恨むの外はない。

神輿渡御

青葉若葉吹く風に誘はれて、時折ホロ／＼と零るゝ雨を恐れ、逡巡として決行を見合せつゝありし神輿の渡御は、豫定の時刻より遅ること三時間、天候の稍順調なるを見て、遂に執行された、而して其行列順序は左の通りである。

行列順序

消防 三人
 前 驅 鐵棒引 白丁一人
 獅 子 連尺小供六十人 年行司 十人 先導式典係長 (騎馬)
 消防 三人 馬丁 一人 前 驅 鐵棒引 白丁一人

式典係 一人 大名行列 傘持 白丁一人 武者行列 大字惣代羽織袴
 約五十人 本多家主代理 約六十人 笠被約 十七人
 式典係 一人 大名行列 馬 沓持 白丁一人 武者行列 大字惣代羽織袴

傘持 白丁二人 伶人 太鼓持 白丁二人
 神職 (騎馬) 淨 鹽 (白丁) 淨衣一人 眞 榊 白丁四人 十人
 馬丁 伶人 火鉢持 白丁二人

五色旗 白丁一人 御 楯 白丁一人 御 鉾 白丁一人 御 弓矢 白丁一人 雜 兒 連尺子供四人 添四人
 五色旗 白丁一人 御 楯 白丁一人 御 鉾 白丁一人 御 弓矢 白丁一人 稚 兒 連尺子供四人 添四人
 御太刀 白丁一人 御 幣 淨衣一人 御 旗 白丁一人 神 職 二人 傘持 二人
 御 旗 白丁一人 神 輿 台持 白丁一人 神 職 二人 傘持 二人
 御 旗 白丁一人 神 輿 台持 白丁一人 唐 櫃 白丁四人 神 馬 白丁一人
 傘持 白丁一人 傘持 白丁一人 式典係
 社 司 (騎馬) (豫 備 白丁二人) 社 掌 (騎馬)
 沓持 白丁一人 沓持 白丁一人 式典係
 馬丁 一人 馬丁 一人

大字惣代羽織袴 約 二十人
 大字惣代羽織袴



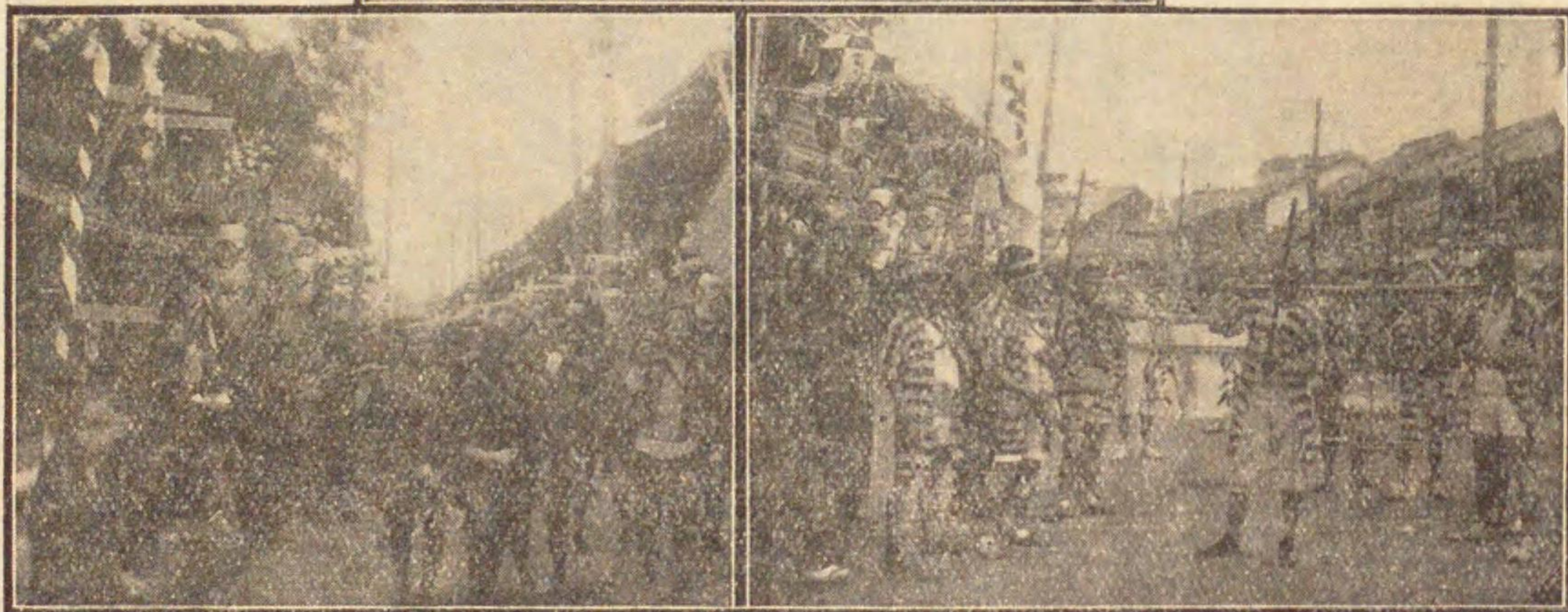
列行コッヤ

一行は、公園前なる盲啞學校前の廣庭に集合し、午前十一時を以て、出發合圖の太鼓の音響々と鳴り渡るや、徐々と順路を東に取り、國道康生を岡崎郵便局角に至り、南へ殿橋を越へ、岡崎商業學校附近に至りて引返し、縣道康生、横、能見、伊賀を通り、井田坂上に至りて又引返し、伊賀八幡宮に參拜、社内にて中食の上三十分休憩、前路を郵便局に進んだ、偶々微雨ありしも仗ち歌む、郵便局角に戻り、東へ國道を康生、籠田、傳馬、両、投を経て、欠坂上に至りて引返し、徳王神社にて休憩、前路を引返して、板屋、八帖を過ぎ、矢作橋畔に達し小憩、又引返し、午后七時暮色空を染めし頃、無事還御するを得た。沿道に於ける拜觀者は到る處に暗列して、恰も屏風を起て列ねたやらである、其雜問の光景は名狀す可らざるものがあつた。



下部左 傳馬通

上部 連尺通
下部右 横町通



市中の光景

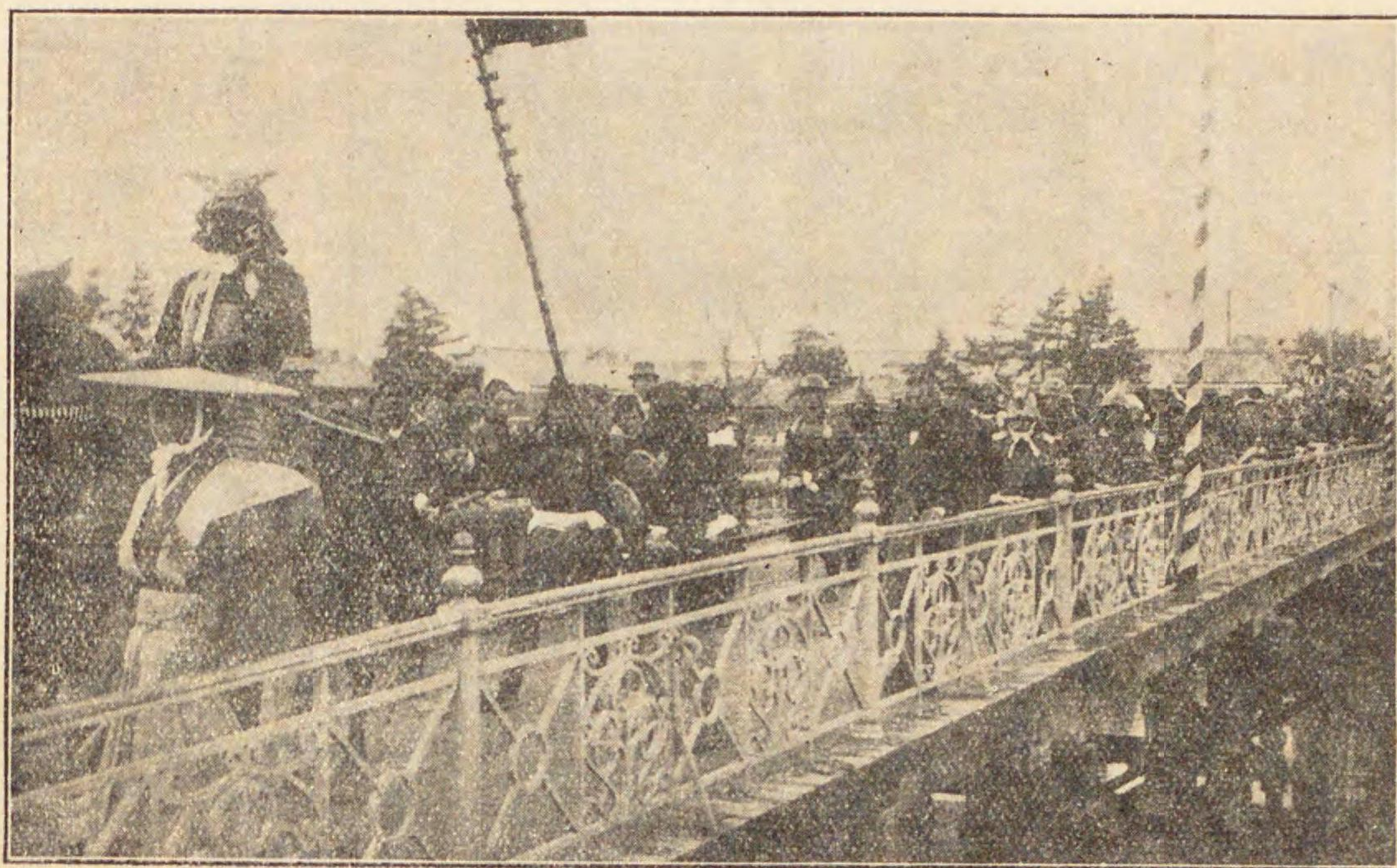
大名行列

舊岡崎領内なる碧海郡上郷村榊塚の有志より組織されたる大名行列は、神輿渡御の前驅となり、市内を練り歩いた、其長持擔ひの雲助、槍持の奴など何れも熟練の結果現はれて、巧妙なる動作は、觀者をして轉た今昔の感に堪わざらしめた。

大煙火

舊岡崎領内三百有餘の町村より奉納の煙火は、其玉數三千二百有餘發の多數に上り、到底之を一個所の筒場に於て打ち揚ぐる事は出来なくなつた。茲に於て餘興係は苦心の結果、遂に三個所に於て行ふことにした、實に岡崎に於ける煙火として未曾有の盛況である

天に震ひ地を慄かす



武者行列

四四

其筒場と、用意の筒数は

甲筒場	明大寺是字山	一尺筒一本	六寸筒二本	五寸筒六本
乙筒場	傳馬天神山	同 二本	同 一本	同 五本
丙筒場	板屋菅生川堤	同 一本	同 一本	同 六本

以上の筒場に於て、晝夜の間断なく打ち揚ぐ

る煙火は、殷々轟々山河に轟き、五彩は天を掩ふて實に壯觀を極めた、殊に百有餘發の尺玉煙火は霹靂の響き、天に震ひ地を慄かし、其痛快にして雄大なる光景は幾万の觀者をして知らず識らず喝采の聲を上げしめた、夜に入つては雨降りまさりて、寧ろ壯烈の感があつた、輕装せる煙火の壯夫は、降りしきる雨をもともせず、ヨイシヨイシの聲高く、市中を練り廻りて、夜の更け行くも知らなかつた。

新愛知新聞は曰く

●火中に躍る裸男

(名物の花火と三河男の意氣)

岡崎の大祭の餘興の中で一番人氣を呼んで居るものは、やはり三河名物の花火である、昔から随分花火大會なども開かれたが、尺玉が百本以上打揚げられるといふのは六十年以來今度の大祭が始めてだと、町でも花火通の老人が物語つた。元來三河花火には空中に五彩の光りを放つ外に素人の窺ひ知らぬ處に名物としての味はひがある、尺玉といふのは玉の直径が一尺もあるのだから、ドン・響いて玉が筒を脱れる時の勢ひといつたら其ころ猛烈なものであつて、近くの障子の紙なども破れたり、素人は耳の鼓膜を損じたりする位のものだ、だからこれに口火を點けに行くといふ事は頗る危険な仕事である、だが花火に懸つては非常の勇氣を持つて居ると云はるゝ三河男達は、大いに花火土地の意氣を見せて、態と禪一貫の丸裸になつて、おまけに口火を點けてから一歩たつて身を退くやうな事はしない、其儘につと花火筒に凭れたまゝ耳を聳せん許りの爆聲を聞いて莞爾とする、それが萬一仕損じて玉が筒の中で爆たりするやうな事があると、無論活ては居られぬのだから謂はゞ命賭けの仕事である、これ迄にはこんな災厄に遭遇つて、全身松葉で燻された様になつて死んだ男の例はいくらもある。それから早打といふのも随分危ない仕事で、これは先の玉が空中で爆せる途端に、次の玉が筒を脱れる位に矢繼早に打揚げるのだから、筒の傍には矢張り口火男が居て、後からくと玉を投げ込まねばならぬ、その玉も以前は筒の側に置いて、火氣を防ぐ爲め上から毛布などを掛けてあつたものだが、それでは卑怯だといふので、この頃ではほんの申譯に晒木綿を被せて置くに過ぎない。

當日の状況を報導せし新聞紙中より、其二三を抜摘して左に轉載す。

大阪朝日新聞に曰く。

●煙火と行列の大賑ひ

徳川、本多兩公三百年祭二日目の十七日は生憎夕刻より雨降り出したるも熱狂せる岡崎町民は兩位何のものかほと菅生川に浮べたる六隻の銚船に提燈を以て滿船飾をなし火影麗はしく雨の川水に映する間に名物の手筒亂玉、金魚煙火等を打出

大阪朝日新聞の記事

新愛知新聞の記事

し沿岸の宴會場には絶えず歡聲と喝采湧き市街の電燈裝飾も雨に一層の光を増して身動きもならぬ程の出入りありたり、三日目の十八日は夜來の雨歇み前日來準備されたる是字山、天神山、菅生堤防の三箇所にて尺玉以下二千發の三河煙火を打揚げ盛觀を極め午後は神輿の市街巡御あり之に續いて甲冑武士三河武士の時代行列市内を巡り岡崎藝妓も行列を作りて囃し巡り前日にも増したる盛況を極めたり、尙當日午前八時より額田郡青年大會を公會堂に開き來會者二千名餘名にて講演などありしが午後一時より墨西哥及、南米幻燈會を開き志賀重昂今井安良氏等の説明講演あり其他全町に互り種々の餘興催され三日に互るお祭りも芽出度茲に終りを告げたり。

大阪毎日新聞に曰く。

●彩花空を掩ふ

(東照宮三百年祭)

三州岡崎町に於る家康忠勝兩公三百年祭第三日は前夜來の雨晴れしも曇り勝にて氣遣はしかりしも前日に變らぬ大盛況を極め午前十一時三河武士の行列を先頭とせる神輿渡御の式と公園にては相撲其他の餘興あり最も目立たるは同地名物の煙花にて各町競うて寄附せる尺玉八寸五寸玉の大煙花など二千餘發は晝夜を分たず中空を彩どりて壯觀なりき別けて早打と稱し三十發以上息をも繼がず連發せる際の如き全く岡崎の天空は紫電彩花もて掩はるゝの壯觀を呈し歡聲鳴りも止まず又是字寺に開催せる徳川本多家寶物展覽會には家康公着用の兜、忠勝公の鹿角の兜、蜻蛉切りの鎧其他兩公の手書など史家の參考となるべき珍品多數にて觀覽者引きも切らず全市は幾萬の人に明け人に暮るゝの盛況を呈せり。

扶桑新聞に曰く。

●岡崎三百年祭 (第三日)

(符焦れし武者行列と打揚煙火、不夜城の壯觀目も醒めん許り)

岡崎町兩公三百年三日目は前夜來春雨にて時刻遅れて町民が之を當祭第一の誇りとし又第一に▲期待せし武者 行列は龍城公園より渡り初めたり先づ數十の長持を擔へる昔の儘を今に見る雲助は色褪せ破れたる衣裳にて聲張上げて雲助歌を歌ひ碧海郡榊塚の大名行列之れに次ぎ三ツ團子祭大旗春風に靡き陣太鼓の音勇ましく各々好みの

扶桑新聞の
記事

大阪毎日新
聞の記事

甲冑に身を固めたる武者數十名徒歩百十名練り渡りたるは

▲此上無き壯觀 なりし次に馬上神官數名衣冠束帯にて白丁七八十名警護し同公園西門を出で康生町を東に進み同町郵便局前より伊賀八幡に折れて同社に參拜し茲に晝餐を終へて午後再び郵便局前に來り同局前を東にとり康生籠田方面に向ひたるは午後三時頃なりし然して町民は固より各地商人より望を囁せられし煙火は

▲玉實實に三千 餘にして甲乙丙と定められたる箇所より終日間斷無く打ち上げ又並々ならぬ大玉とて其響山川に雷鳴し天地も震れん許りなり然れども彼の黃菊白菊は暗雲に閉ざれて折角の妙趣向も一向に榮無かりしは遺憾なりしが各々揃ひの裨裨にて立働居るは誠に美事なりし殊に新町は

▲面々顔を彩り 駿河臺錦小路大久保等と大書したる大旗を押し立て大久保皮肉老爺の盟登城に扮したるは取り分け人目を引きたり又傳馬町藝妓は三ツ葉葵の裁着を付け木遣を矮音高らかに歌ひつゝ忠勝公の摸型甲を出し能見、横の二町よりは金色燦然たる數臺の山車を出したる事にて岡崎町は

▲空前の出入に して實に雜沓を極めたり尙額田郡青年大會は投尋常小學校に集合擊劍角力試學競技職業競技を催し非常の盛況を呈したり然して夜に入りては各町一層の出入にて致る所にイルミナーションは點せられ通行深夜迄も絶間無く十八日の岡崎の夜は眞に不夜城と化したり。

■兩公記念展覽會

十六日より二十五日に至る十日間、城南是字寺に於て、徳川公爵家、本多子爵家等より出品の兩公に因みある寶物の展覽會は開催された。出品の重なるものは、徳川家の家康公の親筆花鳥風月の軸、及公の御兜、本多家の忠勝公の甲冑、蜻蛉剪鎗等を始めとして、壹百二十点にして何れも考古家、美術家、教育家の好參考品たるのみならず、史家の好資料である、十日間に渉る入場者は總て二万一千餘人を算した。

史家の好資
料

兜、這般の知識ある者ならば、其製作に就けても、多大な考徴になるのであらう。(後略)

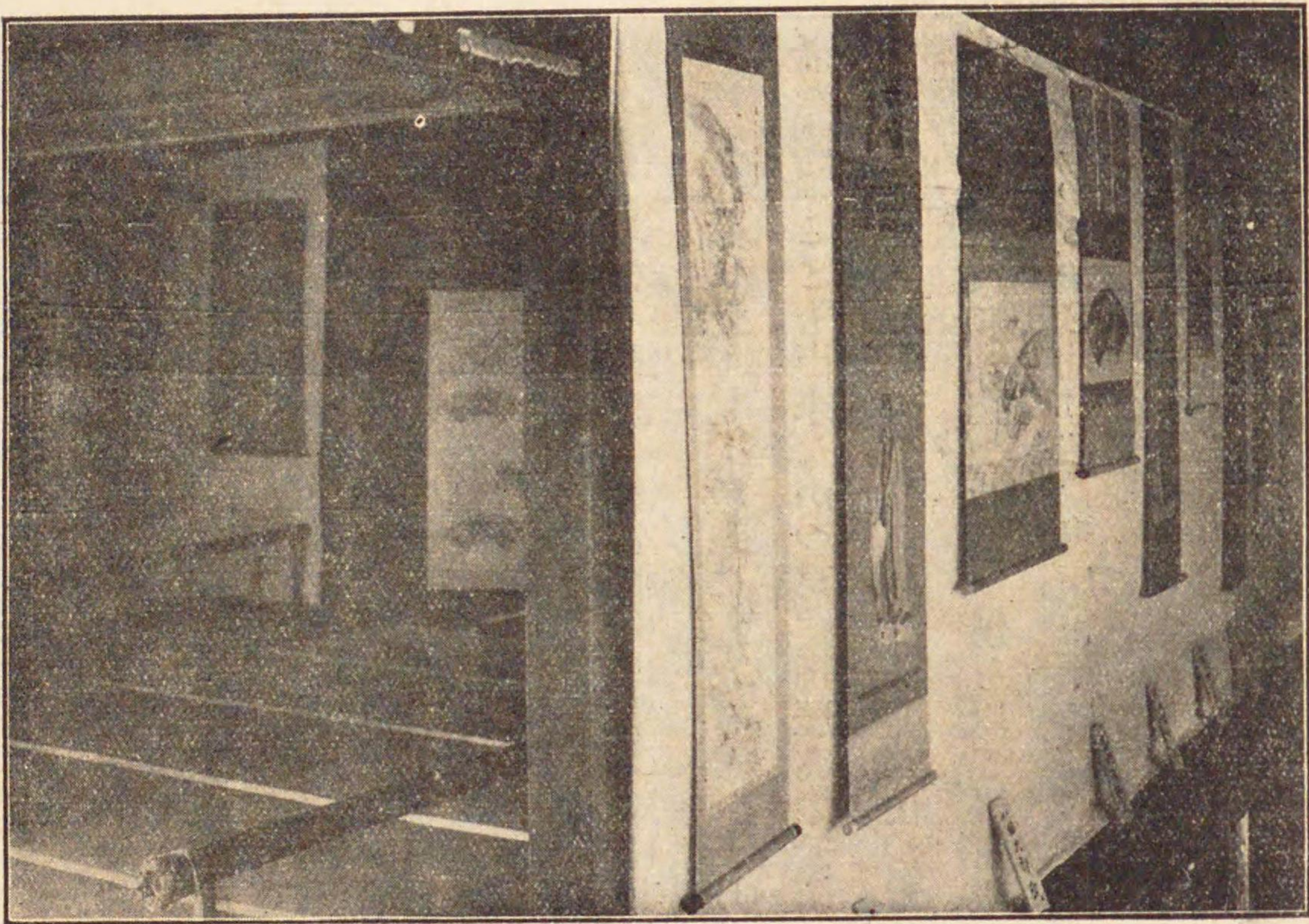
猶此展覽會に於ては、混雑を避くる爲め、入場料金五錢を徴收したるも、赤十字社、愛國婦人會其他あらゆる公共團體の會員たる事を證明する徽章を携帯したる者には無料入場を許るし又此混雑の場合に際し、釣銭を取る日本在來の悪風を矯正する意味に於て、必ず釣銭の求めに應ぜざる事にした、而して入場料として徴收したる金額は、之を岡崎町教育會へ寄附したのである。

寶物の寫真版中、一の谷の兜、家康筆「花鳥風月」の幅は、徳川公爵家の御所藏にして、其他は本多子爵家の所藏である。

■青厓繪畫展覽會

四月十六日より、十九日に至る間、協賛會主催の下に岡崎町菅生滿性寺方丈に於て、舊岡崎藩士にして畫家たる櫻間青厓先生の遺墨展覽會を開催された、出品点数五十餘点、何れも秘藏の逸品にして、先生の遺墨を代表する傑作を網羅した、開會中觀覽者二千餘名を算し、來賓には茶菓を饗した。因みに先生の小傳を左に録す。

櫻間青厓小傳



櫻間青厓の
小傳

青厓會の光景

櫻間青厓、名は威、字は善訥といふ、別に迂亭と稱した、江戸本郷森川町本多邸に生る、家祖を出右衛門といひ、其父某は備前の人である、慶長甲寅の役大阪城に入り、戰敗れて本多濃州(忠政)の將稻垣掃部の手に捕へられた、然れども性傲岸にして屈する色なく、如何に訊問さるゝも一言も答へなかつた、掃部は怒つて之を斬つた、濃州其狀を聞き、其勇を愛し其膽を稱し、意に其子出右衛門を收めて家臣となし、祿五十石を給はつた、二子あり、長子能保は家を嗣ぎ、次子源兵衛は元祿中別に祿五十石を賜はり、櫻間家は宗支兩家となつた、青厓は宗家出右衛門の次男で、家督の兄を練右衛門と云つ

た、而して支家は五代目藤兵衛の代に至り、其子新七郎に不都合の行爲あつたため、絶家されんとする時、特に宗家の次子なる善訥を以て其名跡を繼がしめることになつた、是れが即ち青厓で、四十六七歳の頃である、其祿は減じて六人扶持となつた、けれども、忠顯、忠彦兩侯が、繪畫を好まれたるが故に特に家格は醫師席を以て取扱はれて居た。

青厓は畫を片桐相隱に學ぶ、渡邊華山と同時代である、其技倆は華山も一步を譲り、毎に云ふ、山水は我青厓に及ばすと、故に人の山水畫を索むるものあれば、華山其絹紙を青厓に囑して代作せしめ、華山は只落款のみした、されは華山と署名せし山水畫幅の十中七八は此青厓の筆である、或書に畫を華山に學び殊に其眞に迫るを記したるは本末を誤つたものである、青厓が逸話に就ては、枚擧に違なきも、一日華山の來訪せし時、青厓例の如く囊中空しく酒肴を調ふことも出来なかつた、青厓突然云ふ、僕今急用ありて門外に出でんとす、君乞ふ留守をせよ、且つ君の羽織を借せと、華山が着た外套を携へて去つた、幾干もなくして、酒來り着來る、共に快談快飲し、燭を以て繼ぐやうになつた、華山歸らんとして探るに羽織なし何處にあるかと聞けば、青厓言下に答へて云ふ、君と我と既に飲み既に食ひしに非らずやと答へて肱を枕し鼯雷の如し、されど華山は毫も怒らず、畢生の益友として交つた、故に其子小華が青厓畫幅の箱書には、必ず父執の字を冠せ、他には決して此二字を書かなかつたさうである。

嘉永四年二月十八日、江戸に没す、年六十有餘。

カーチス氏は満性寺に開催せる櫻間青厓繪畫展覽會の中青厓の肖像に就て批評せり。

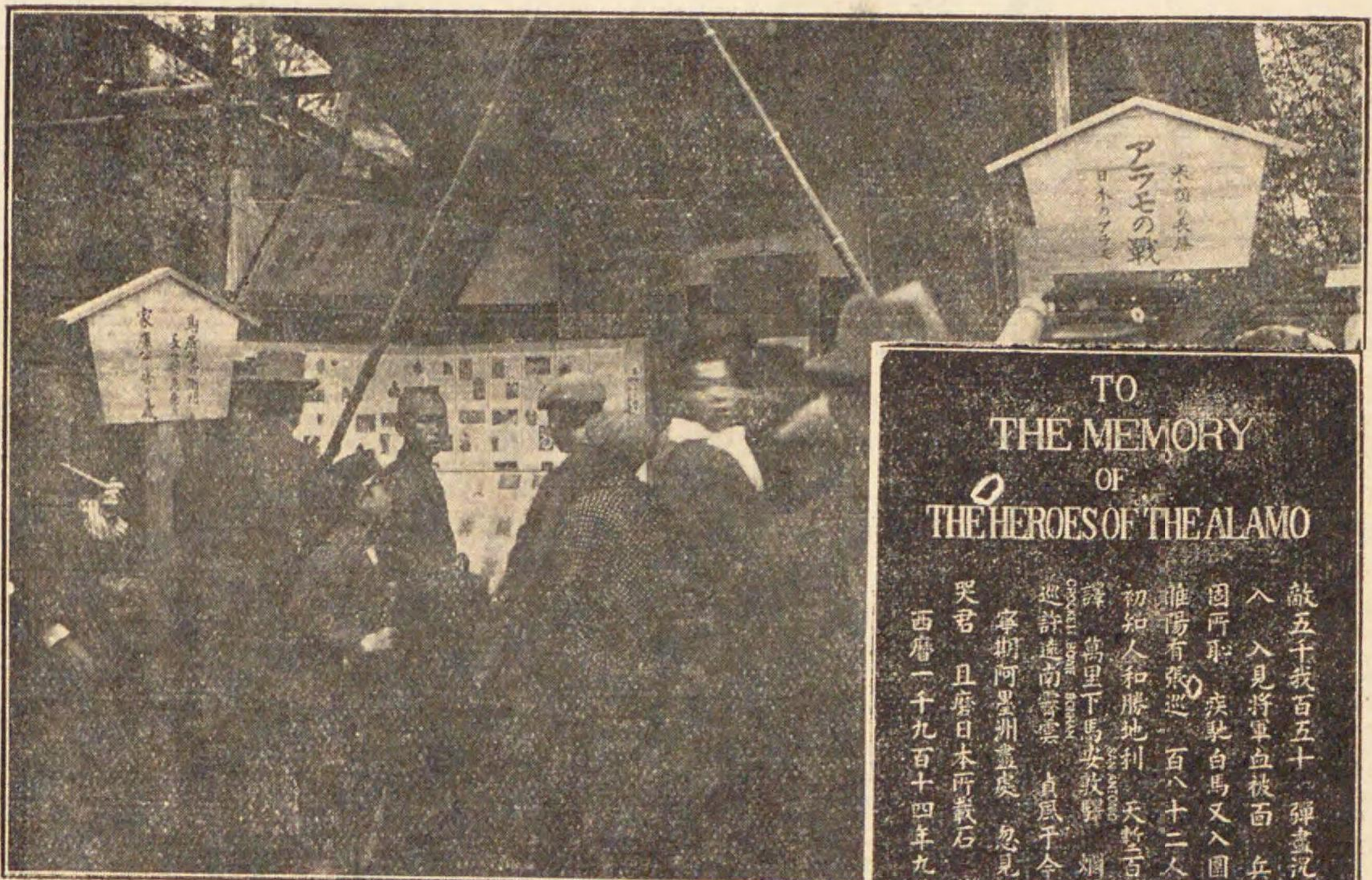
展覽品の中余は黒と白にて畫ける(墨畫の事)此の大畫家彼れ自身の肖像あるを認めたり其鼻は異常に大なり、是は此の如き大天才には此の如き異常なる鼻官あるべけん人に見はしむべき様此の肖像を畫ける者は眞の容貌より以上に其墨を使用し過ぎたるものと覺ゆ云々。

アラモの戦役記念展覽會

岡崎舊城内廓の石垣下に「鳥居強右衛門が家康公に長篠の危急を告げたる處」と書いた揭示がある、其傍にアラモ戦役記念の小展覽會は開かれた、出品の總てが志賀重昂氏である。何んが故に北米アラモの戦役記念の展覽會が、此處に催されたかと云へば、此戦が恰も我長篠戦役に酷似して居るからである、今其二役を對照して見ると

- ▲テクサス國サン、アントニオ町アラモ寺 主將 ウイリアム、パレット、トレヴィイス、齡二十五歳。
- △日本參州設樂郡長篠城 主將 奥平九郎貞昌(後、信昌)、齡二十二歳。
- ▲テクサス軍小勢なれば、ケンタッキー州のアーヴィッド、クロツケット、南カロライナ州のボナム、援兵として來る。
- △長篠軍小勢なれば、參州五井の松平彌九郎景忠、岡竹谷の松平又七郎家忠、援兵として來る。
- ▲アラモは義徒一百五十人、援兵三十二人、合計一百八十二人、墨西哥の大統領サンタ、アンナ自から率ゐる五千の敵軍

長篠の危急を告げたる處



敵五千我百五十、彈盡糧絕、死守所誓固
入、見將軍血被面、在營力嬰壁立、誰能加一男子、見死不為
國所恥、疾馳白馬又入、操十笑曰與君死、妻孥復戰氣益振、不說
推傷有幾、百八十二人、生而降者無一人、二十四日、
初始人和勝地、天鼓百里何隆隆、河北遼遼唐天地、夜合海外狂九
譯、萬里下馬安教、爛漫火時地、性靈當年劍血、君不見死
巡許進前營、直抵于今吹者、西俗未必忘降、斷頭將軍所不聞
擊物阿墨州、忽見斷頭將軍、意氣當看裏西列、長條備前
哭君、且磨日本所教石、淋漓為勸、
西曆一千九百十四年九月、日本、志賀重昂、

Prof. Shigetaka Juko Shiga Tokyo
San Antonio Texas
September, 1914

碑のモラアミ會覽展念記モラア

▲アラモ糧食彈藥缺乏するや、十重二十重の圍を脱して援軍を外に乞ひ、復命(事實上の)の後、節に殉じたるはホナム。
▲長篠糧食彈藥缺乏するや、十重二十重の圍を脱して援軍を外に乞ひ、復命(事實上の)の後、節に殉じたるは鳥居強右衛門。
斯くの如くである。志賀氏は猶米國の長篠、日本のアラモと呼んで、酷似の意味を表し、又桑港將た紐育より二千哩を距る墨西哥の國境にあるテクサス洲サンアントニオ市のアラモ寺に、我長篠の古戰場より獲たる石を以て碑を

に圍まる、即ち二十七倍の敵。
▲長篠は奥平勢五百餘人、兩松平の援兵三百餘人、合計八百餘人、甲州の大將武田勝頼自から率ゐる二万一千の敵軍に圍まる、即ち二十七倍の敵。

造り、テクサス獨立戰役殉難烈士の碑を建てたのである。出品物は此戰役史や、寫真や氏が建碑の事實を報導したる米國新聞雜誌等であつた。猶其傍らに「アラモの戰」と題せる小冊子(代金壹錢)、碑を寫したる端書(代金壹錢)と置き、公德試驗所と同じく、自由に希望者に持ち去らしめた。要するに志賀氏の意義は東西意氣の吻合を示し、日米の親善を期せられたものである。

物産陳列所褒賞授與式

額田郡物産陳列所は、四月十五日より五月五日に涉り、開所記念展覽會と稱し、當地方物産の展覽をなし、四月十六日午前十一時を以て、額田郡公會堂内に褒賞授與式を行つた。出品物は、生糸及紡績糸、織物、石製品、金屬製品、木竹製品等にして、總点数五百八十点、出品人員百九十一名、内一等受賞者五名、二等受賞者二十四名、三等受賞者四十一名、四等受賞者六十二名であつた。

三河郷友會

十七日午後一時より、額田郡公會堂に於て、三河郷友會評議員會を開き、續て午後二時より總會を開會した、總會終了後直ちに講演會を開き。

△米國の鳥居強右衛門

△現今の社會

講師 志賀重昂氏
文學士 寺田精一氏

兩氏の講演があつた、來賓の重なるは、各郡委員長、藤澤第二師範學校長、旭野第二中學校長及各町村長等にして、講演後直ちに晚餐會を開き、午後七時散會した。

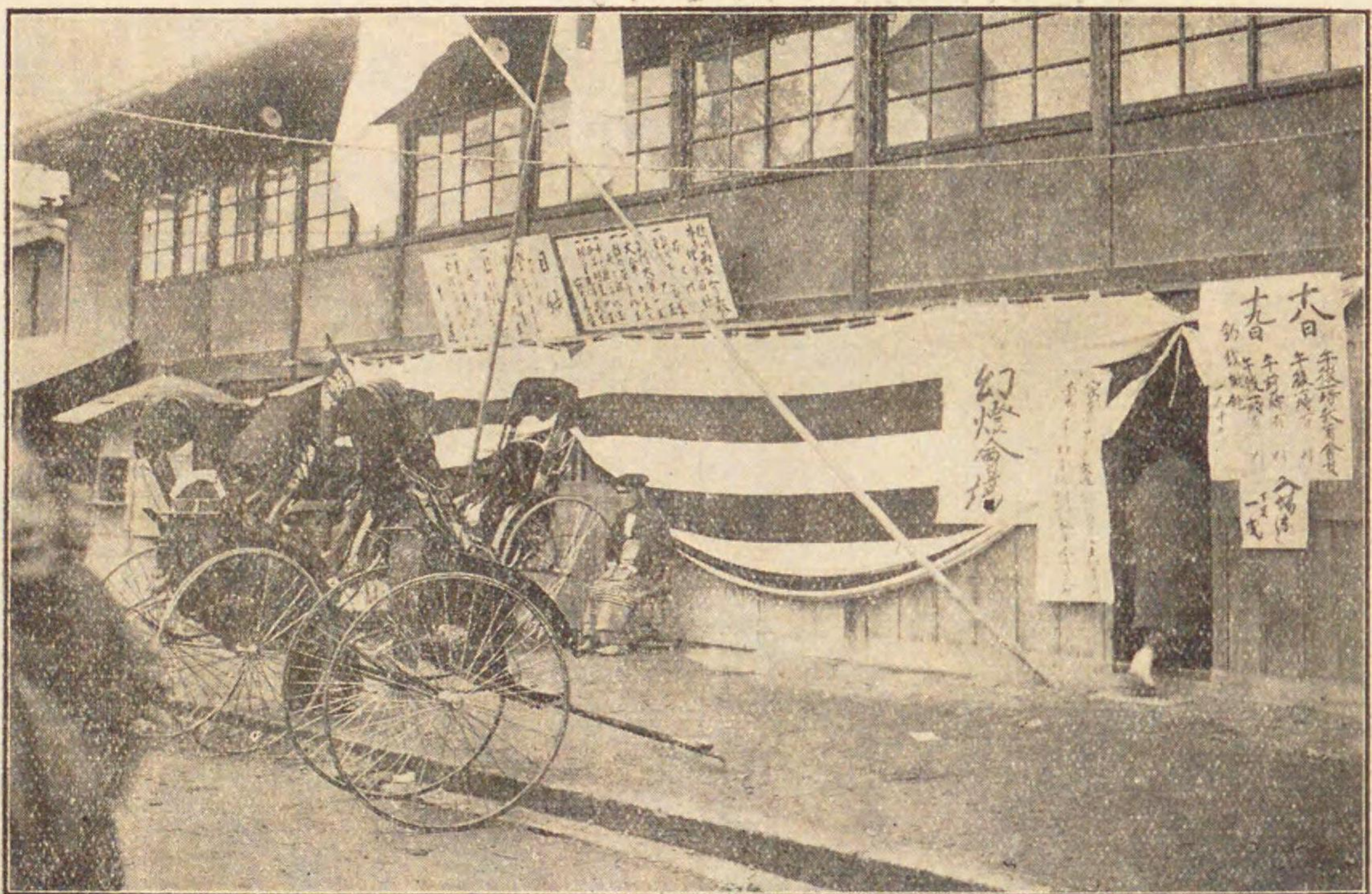
■青年大會

額田郡青年大會は、十八日午前十時より額田郡公會堂に於て開催された、講師として濱田聯隊區司令官代理の講話あり、午餐の後午後一時より、運動會に移り、庭内競技として、角力、擊劍、銃槍等あり、最後に優勝旗の授與式あり、午後六時散會した、來會者は來賓百餘名の外二千百五十名に達し、未曾有の盛況を呈した。

■墨西哥及南米幻燈會

四月十八日午後一時、同日午後七時、翌十九日午後一時の三回に涉りて、墨西哥及南米の幻燈會は、六地藏寶來座に催された、此幻燈會を開くに就ての趣旨は、家康公が駿府大御所時代に太平洋を隔てたる東方の國と交通せんが爲め伊豆伊東に於て、大船を造られ、これを濃昆數

家康公と
墨西哥及
英吉利



墨西哥及南米幻燈會

般國(墨西哥)へ派遣された。西、伊伽羅羅國(英吉利)とも締盟された。英吉利に就ては英國人コックス氏が講演會に於ける講演によりて説明されて居るが、墨西哥に就ては此幻燈會に於ける伯刺西爾史學協會名譽會員志賀重昂氏の講演及日本ラテン亞米利加主事今井安良氏によりて説明された。(志賀氏の説明の筆記は外國人に説くため、特に英文に改め卷末にあり)要はこれに因みて、家康公の意志を繼紹せんが爲めである。影畫は約四百枚で何れも鮮明を極め、觀者をして大に感動せしめた。

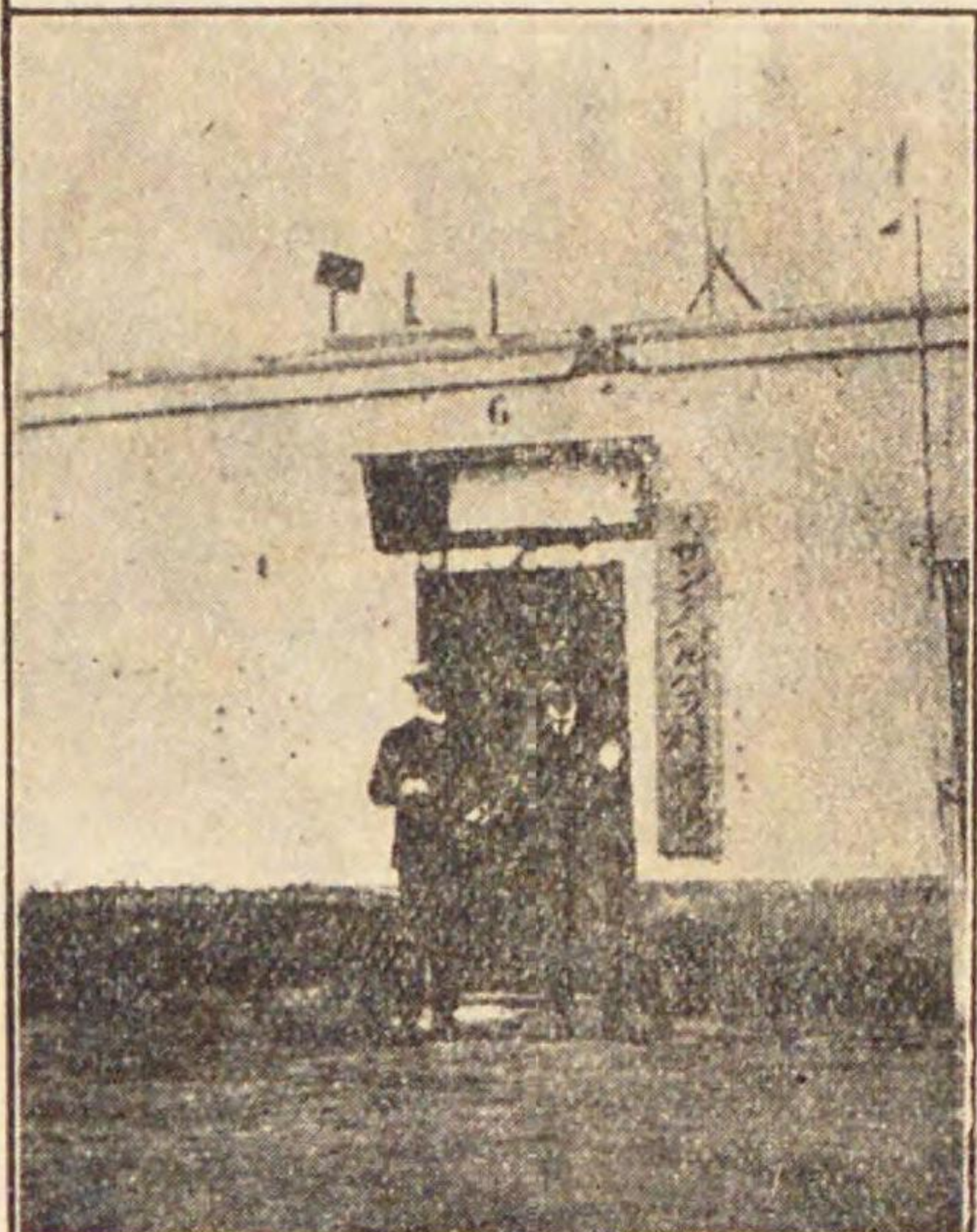
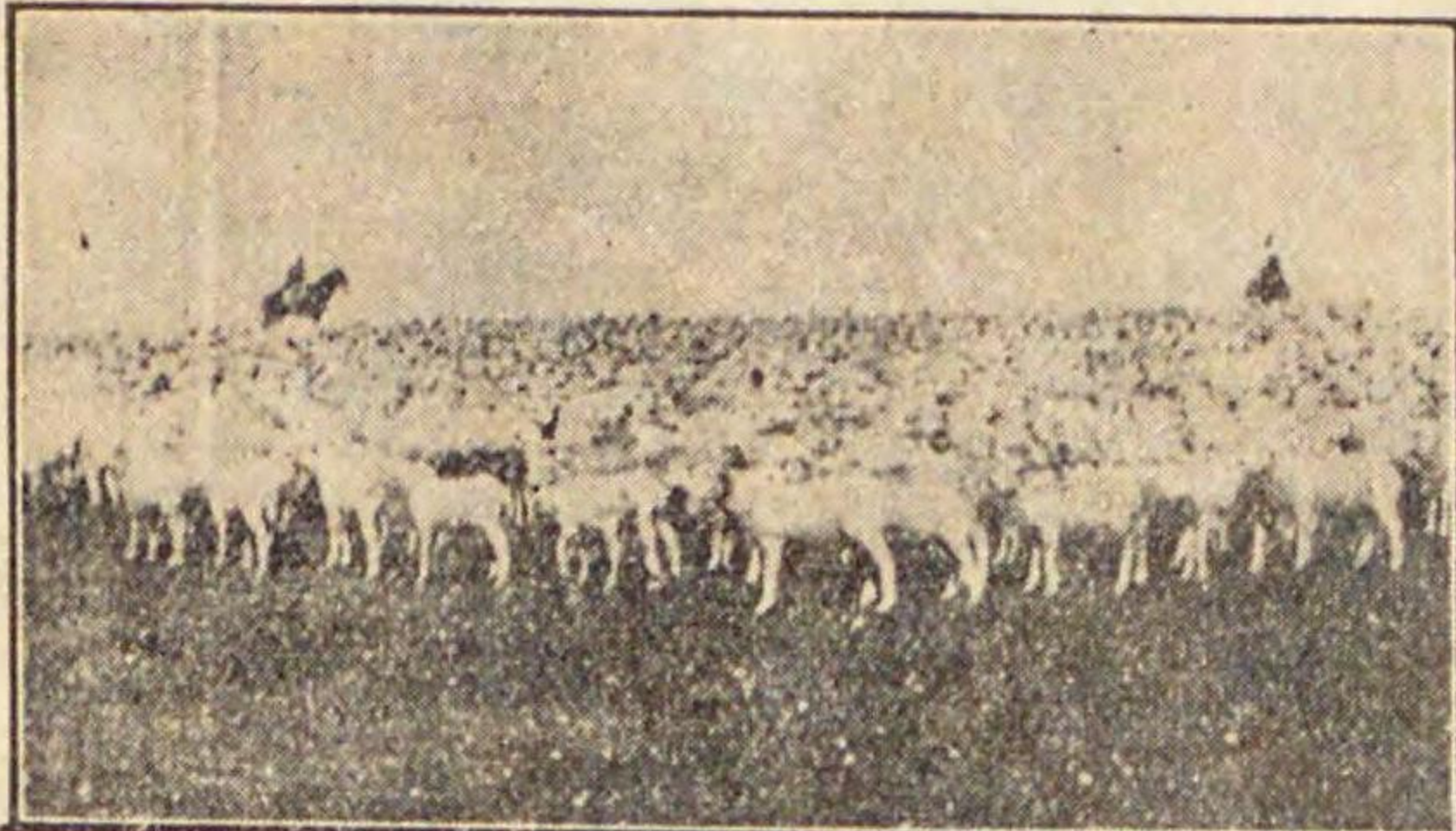
■公德試驗所

其名稱稍異様に感ぜらるるやうではあるが

一般の公德心を試験せんが爲め、「志賀祭典副
 總長の考案に成るもので、市中の四ヶ所（能
 見、両、八帖、康生）に小やかなる亭を設け、
 卓上に両公三百年祭記念の繪葉書（三枚一組）
 を積み傍らに錢箱を置き「御入用の方は金三
 錢を入れてお持ち下さい」と掲示し、自由に
 代金を錢函内に投入し、繪葉書を持ち去らし
 める事にした、換言すれば店員なしに繪葉書
 店を出して、顧客自から購買し去る譯である、
 而して其賣上の結果は左の如くであつた。

所在個處	賣上數	此代金	賣上代金	不足額
能見	一七三	五、一六	四、四〇	七、六
兩	三〇一	九、〇三	八、八七	一、六
八帖	二四六	七、四	六、六	八、三
康生	九四九	二六、四	二六、三	一一
合計	一、六〇	五〇、一〇	四六、二四	三、八六

群羊(場羊牧米場)「ンチンセルア」



群島(一ノツグ)露秘

場役村ラルバンサノ設建人本日(内地耕テエニカ)露秘

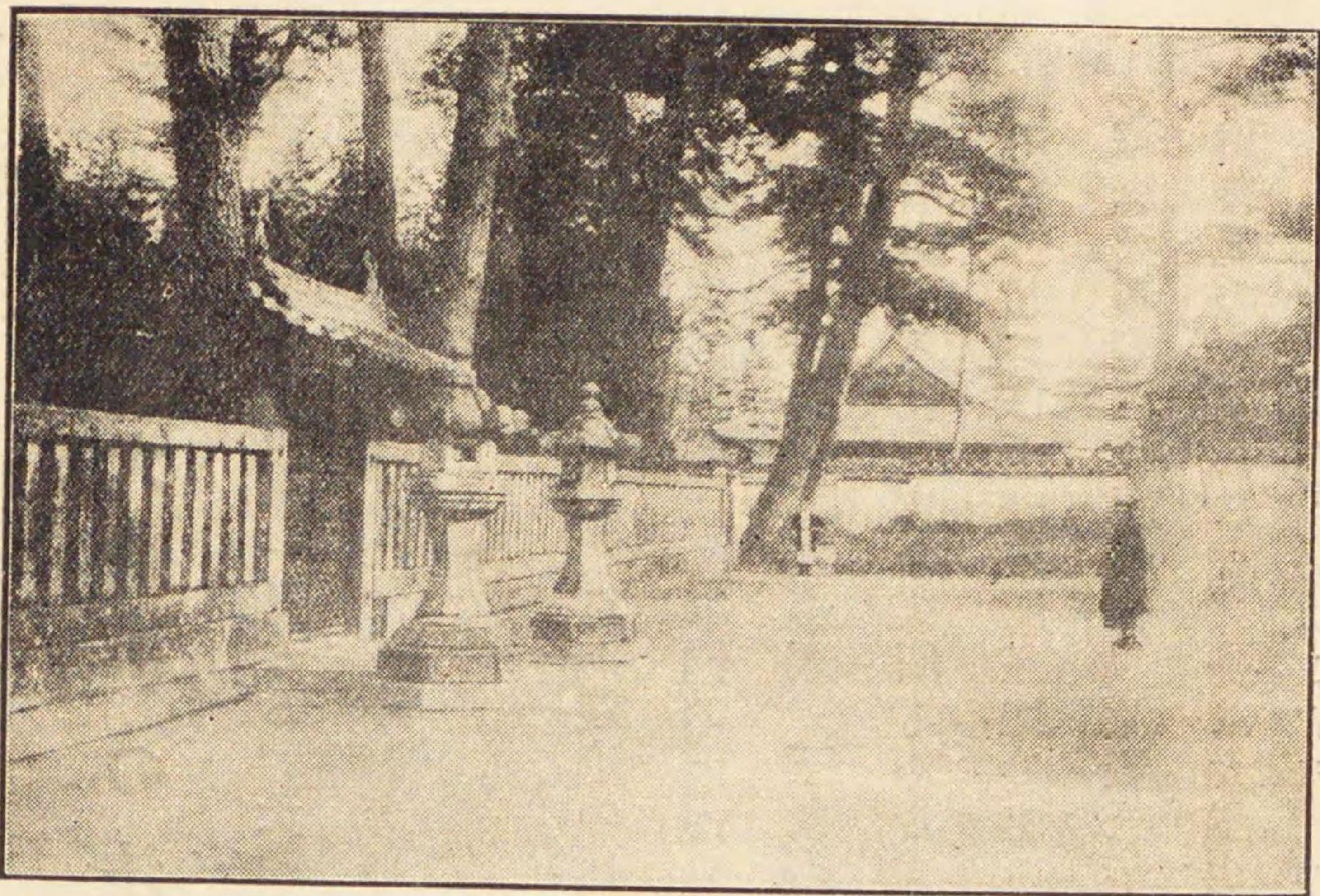
以上の結果によれば、元品に對し七分六厘強の不足を生じ、即ち一〇〇、に對する七、六の公德心欲如せるを證明した事になるのである。

■大樹寺の法會

岡崎市街を北に距る一里なる、大樹寺に於ては、此月十日より十八日に涉り、家康公三百年記念の大法會を執行された。今同寺の由緒を記すに替へて、「日本及日本人」の三田村氏が記事を其儘茲に寫す。

大樹寺は文明七年左京進親忠の建立で、清康の再建した多寶塔、家光將軍の建立した勅額門も現存して居る。勅額門の前邊に枯死したまゝの旗掛松もある、それよりも三河八代乃初代徳阿彌親氏、二代泰親、三代岩津城主信光、四代安祥城主親忠、五代長親、六代信忠、七代清康、八代廣忠の墓所もある、前三代は追修だが、四代以降は眞の埋骨地であるから、徳川家にしては祖廟の所在地である。

家康公が藏人元康の昔、元祿三年五月十九日、織田勢は暴雨に乗じて、桶狭間に夜襲し、今川義元の敗死した時、公は大高城に在つて尾張軍の奇捷を聴き、雨收り月出つる頃、漸く背進を開始され、辛くも大樹寺まで引退された。



大樹寺廟所

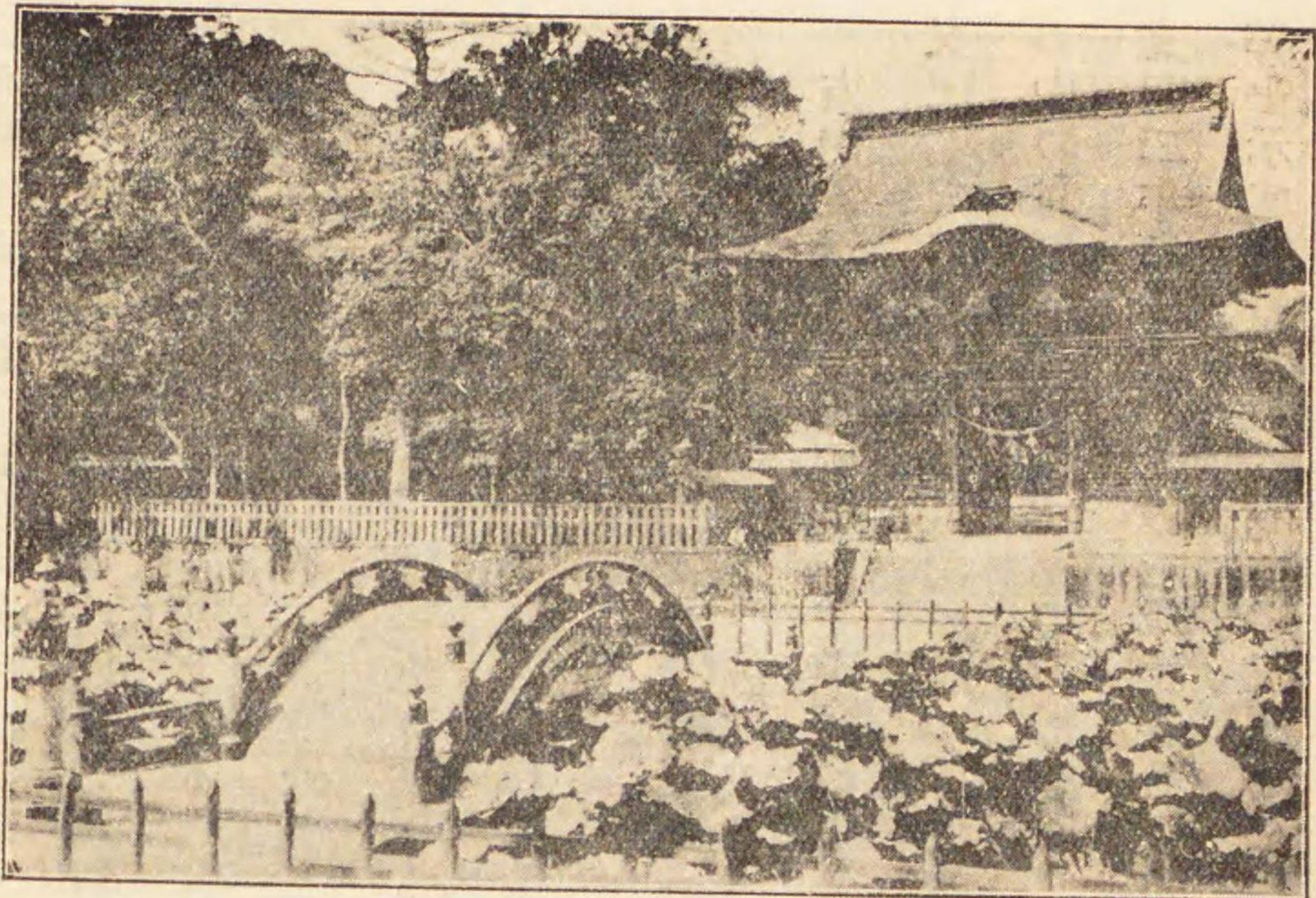
公は今日に窮れる武運を覺悟し、潔く祖先の廟前に自裁する様子であつた、大樹寺十三世登譽天室和尚は、此の際に公を激勵して、厭離穢土、欣求淨土の八字を大書せる布旗を授けた、一山の衆は各々武器を執つて敵對せんと氣勢凄し。敵兵既に惣門に逼迫し來つた、公は僅かに郎黨十八人圓頂黒衣の俄武者に和して、驀地に扉を排し、雄叫ながらに突出した、公の轡に副うた猛法師祖洞は惣門の貫栓を揮つて、敵を左右に偃倒し、纒かに路を開き、遂に公を岡崎へ導いた。江戸の覇業は永祿三年岡崎歸城を開端とする、故に祖洞の敵を靡けた門栓は、幕府の神聖視する所となつて、將軍代替の度毎に厨子のまゝ千代田城に輸入され親しく敬禮され、之を鎖鑰して、復た見るを許さぬ例であつた。幕府では代々の將軍を戒慎するのに、斯くては京都に對して相濟まぬと云ふ

の外、偕は日光に憚りありと云つた、大樹寺の貫木は日光忌憚の絶好説明であつて、祖先を追敬する上に、祖洞の故事は緊密な訓誨であつたらう。今の大臣宰相たる者、奉上の誠意はあらん、然れども爾身に近接した何等の戒慎を所有するぞ、苟くも慎しむに吝かにして、陛下の赤子に對せんは亡狀である、大臣宰相のみならず、兩院の各位も同一の談である。

大樹寺後庭の椎の木、家康公の手植といふ、抱ひて幾許あらうか、十數の巨幹叢生した珍らしい大木である。椎に近き老松も、公の手栽と聞いた、赤松の老幹亭々として雲を凌ぐ、此の松は或は年代が不足しては居らぬかと、矧川先生も首を傾けられた。

■伊賀八幡宮の大祭

市内伊賀八幡宮にても、十五日より十八日まで、家康公三百年祭を執行された。三田村氏は又記して曰く、『伊賀八幡に詣づ。岡崎町の北端、伊賀川を前に、森寂び樹老いて鬱蒼たる松杉の中の宮居は、殆ど城塞の地形をなして居る。此祠は三河八代といふ、其四代安祥城主親忠が文明二年に勸請したので、現存せる當社の諸建造は、三代將軍家光公の營進で、寛永建築の純粹を示すものである』と、又岡崎公歴代の崇敬するところであつて、軍神として其信仰は遠近に知られて居る、猶忠勝が鹿角兜の由緒に曰く『岡崎城外伊賀八幡の神祠あり、本多中務大輔



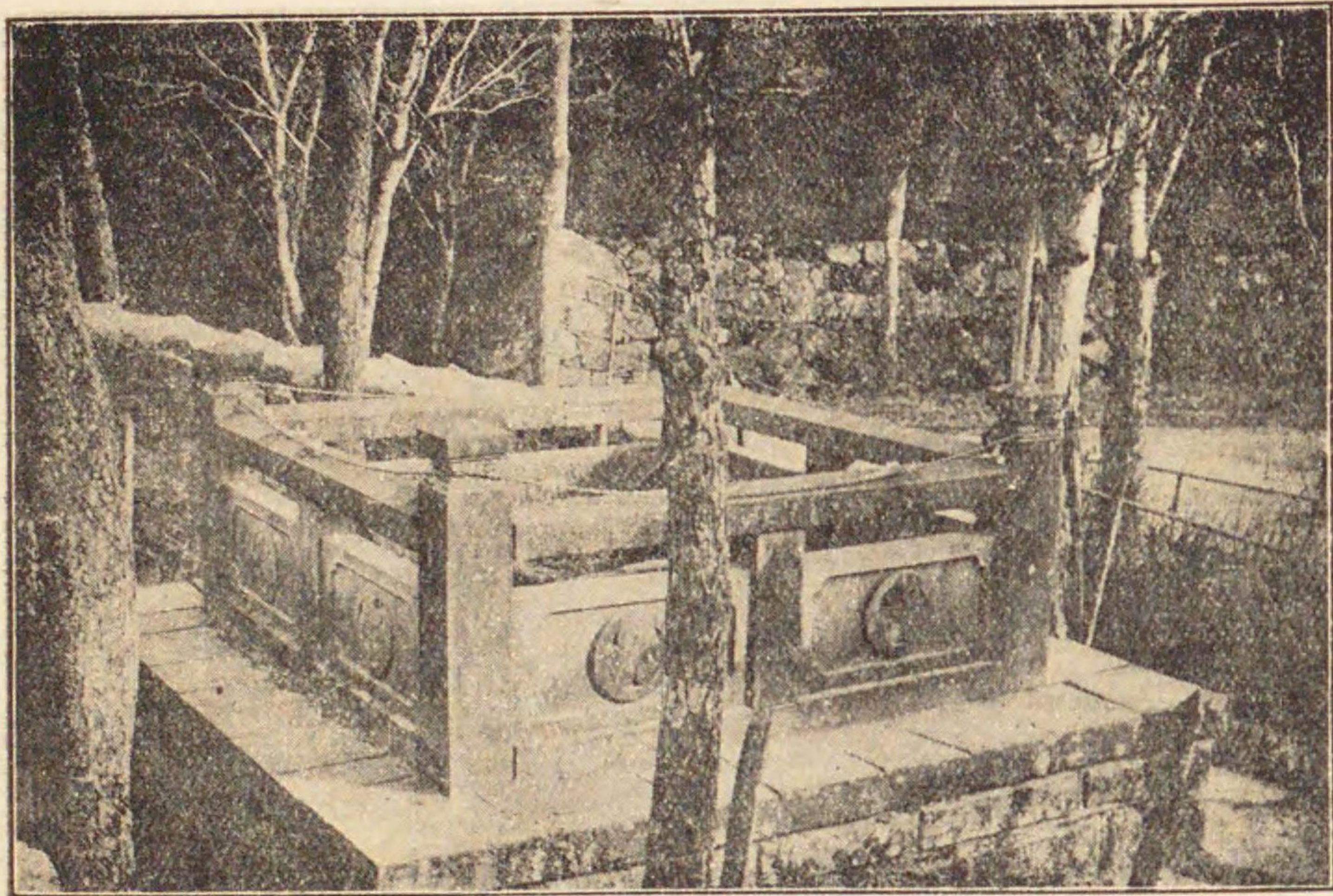
伊賀八幡宮

札を建てたるが、其個所、及由緒は左の通りである。

忠勝一宵八幡神鹿角の立物を賜ふと夢む、昧旦祠に詣で偏く之を尋れともあることなし、歸路祠官某(姓柴田氏通稱因幡)の家を過ぐ紙を以て物を製作するを見る、忠勝何をなすと問ふ對て曰く、昨夜神夢に告げて謂ふ、汝鹿角の立物を造れ余與ふるものあらんとすと、忠勝之を奇とし昨夜夢みる所を語る、祠官感嘆して以て之を忠勝に授く、爾來忠勝徳川家康公に隨待し、前後五十餘戰常に此兜を蒙り、敵と接し克ざるなく、且つ身一点の癢痕なし、蓋し忠勝一生の功業此神呪に根起する乎」云々

名蹟の表示

岡崎協賛會にては、來岡の觀光客に對し便宜のため、兩公に緣故ある名蹟に就き、それ／＼表示



家康産湯井

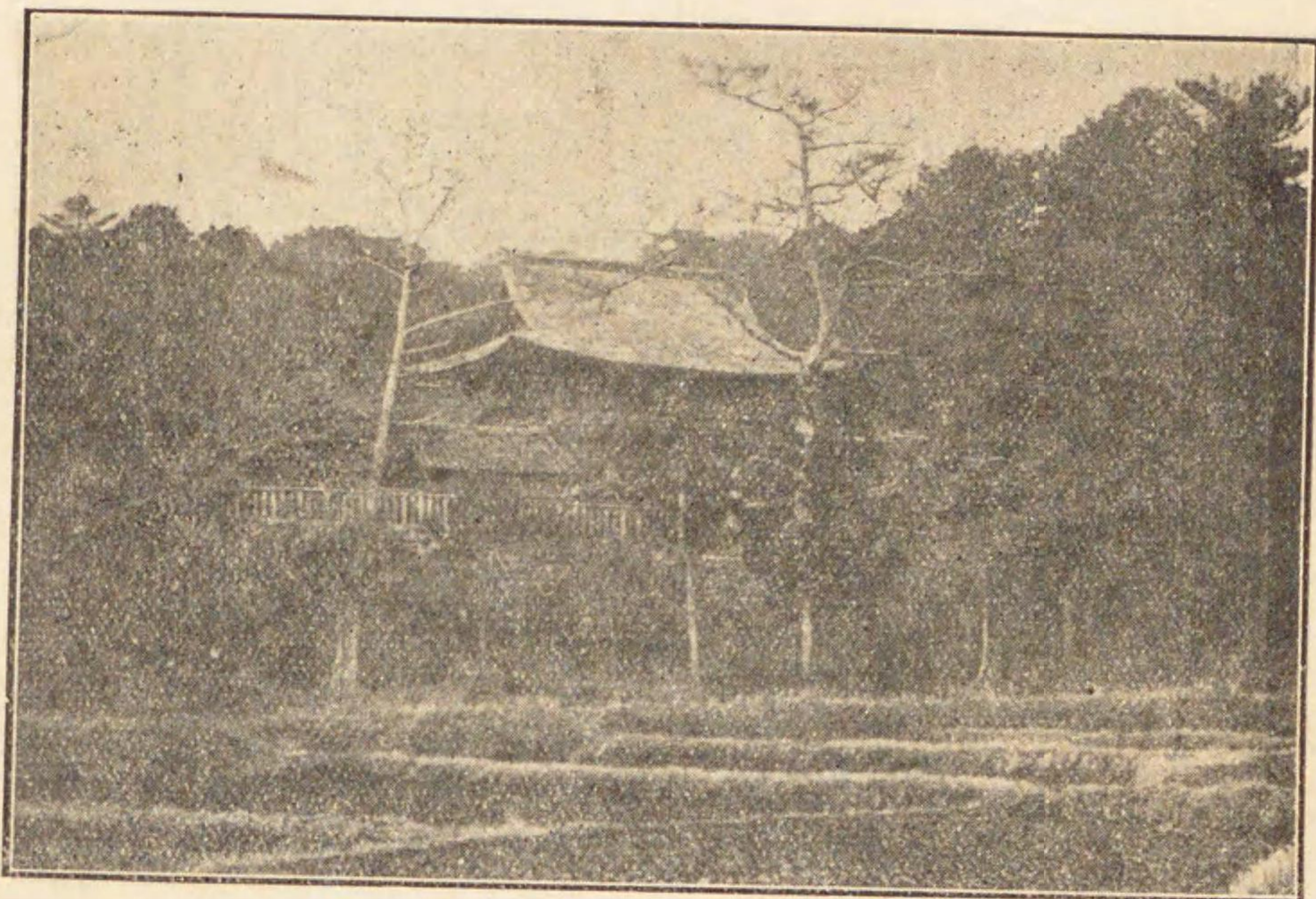
▲家康産湯井、岡崎公園の西北隅、舊東海道の路傍にあり。天文十一年十二月二十六日、家

康誕生の際用ひし産湯の水を汲めて井戸である。

東京市なる帝國ホテル雑誌は記して曰く

岡崎は家康忠勝兩公の誕生地の事とて雄大なる徳川時代を追懷するに足るべき古戰場將た歴史的遺物に富めり何れの老樹も何れの荒廢せる神社佛閣も何れの苔蒸す墳も兩英雄の勇敢なる遺功を語らざるものなし古き井あり其水もて赤子の家康を浴みせしめたりと傳ふるものは岡崎人が貴重なる遺跡として其誇としつゝ之を旅客に示すものなり。

▲松應寺、大字松本に在り。天文十八年三月廣忠薨去の時、能見原隣譽月光庵室前に於て、公の御葬儀を行つた、後家康手づから小松一株を植へ其後一字を建立し松應寺といふ。



高宮神社

たと傳ふ。護摩堂は、天文年間廣忠の建立で、其後慶長八年家康の再建である。境内の八幡

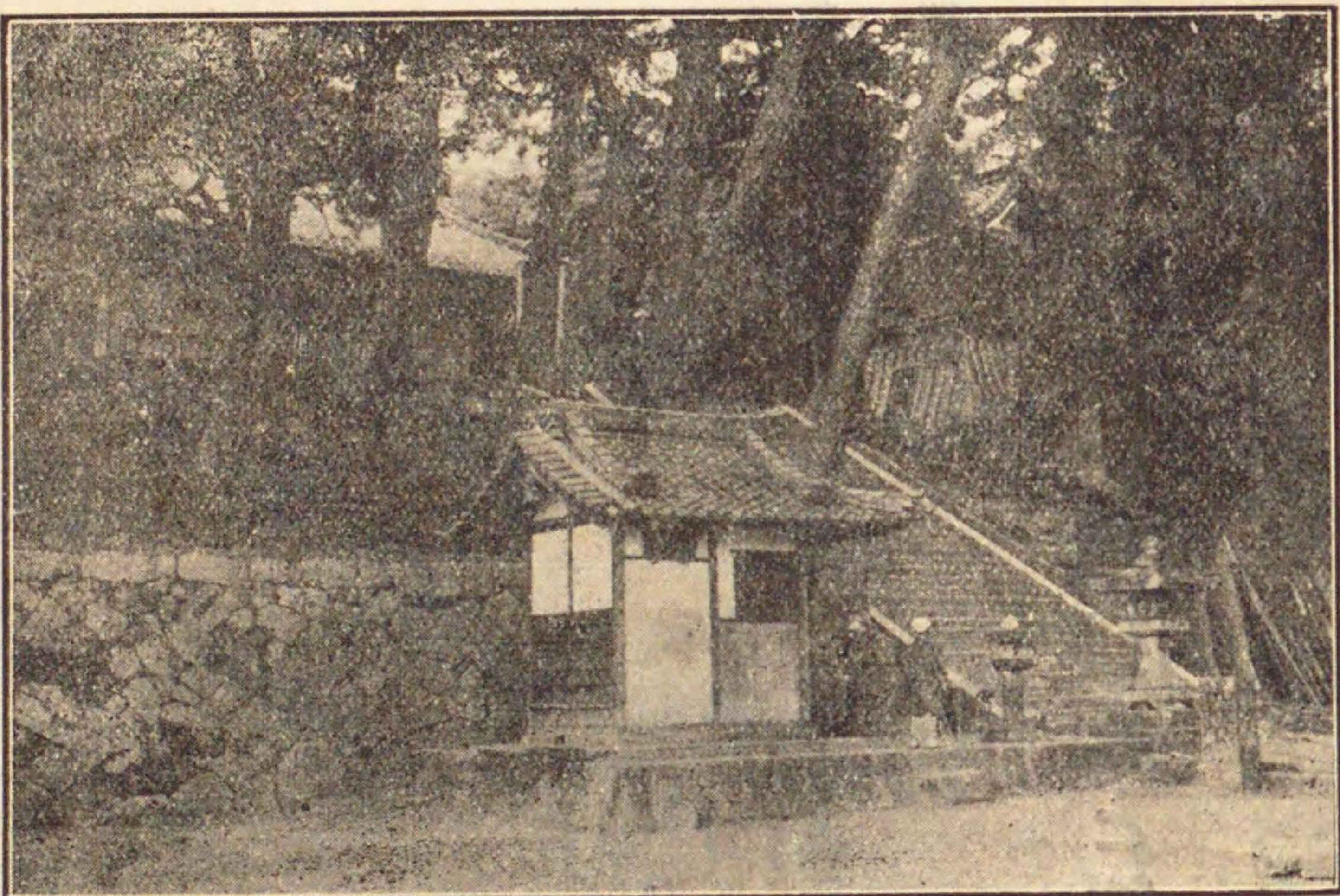
▲隨念寺、大字門前に在り。天文年間、家康の命により清康の娘隨念院の廟を建て、佛現山善徳院隨念寺と云ふ。

▲若宮八幡宮、大字投あひりに在り。徳川信康遠州二股に自刃するや、其首級を此地に勧誘し、清水万五郎正教なる者、若宮八幡宮と稱し奉つたのであると、境内に首塚と呼ぶものがある。

▲高宮神社、大字明大寺に在り。松平氏の産土神で、家康が松平村より勧誘して草創した祠である。

▲甲山寺、大字六供に在り。景行天皇の御宇日本武尊、東夷征討凱旋の日、甲を埋めたる趾といひ、其後八幡太郎義家も東夷征討の砌、其由緒を聞き、靈地なりとて同じく甲を埋め山神に手向け

宮は、大永三年清康安祥より岡崎城中に移し、慶長七年城主本多豊後守再び此處に移したものである。



甲山寺

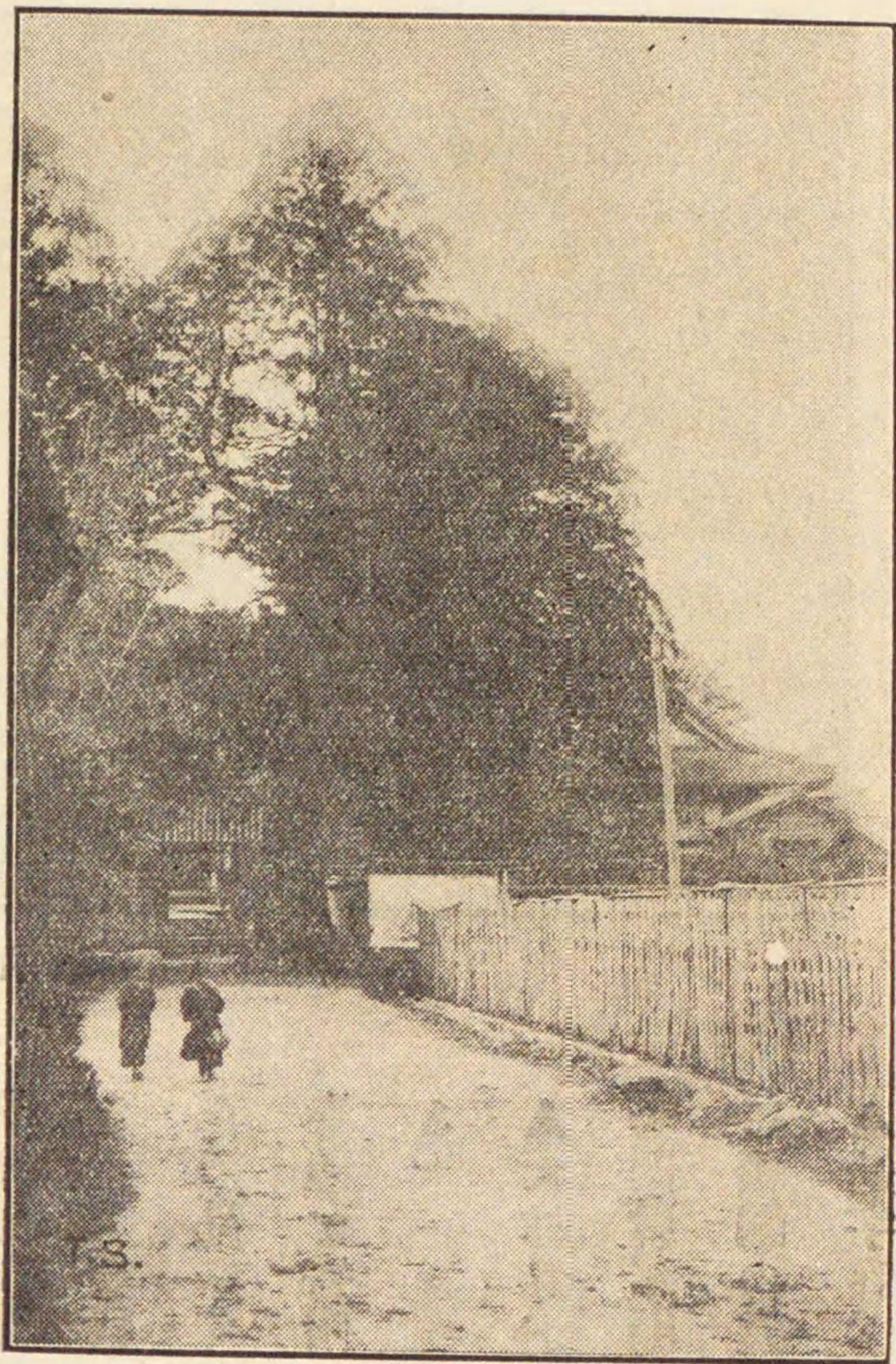
▲總持寺、大字籠田に在り。人皇八十四代順徳天皇の御宇、建保二年皇女剃髪し給ひ、利慶徳善大比丘と號し此寺を建立された、其後六朝を経て高右衛門入道心佛領地を寄附し、其娘を剃髪し住職とし法圓心妙尼といふ、時に永仁四年三月である、末後代々足利家より住職ありしが文明年間天正の乱にて寺領を掠取され、慶長八年八月新たに寺領を寄附された、尤も足利家に縁故深き寺である。

▲大林寺、大字魚町に在り。康正二年西郷彈正左衛門尉頼嗣、岡崎城を築ける當時の草創で、寺内に頼嗣の墓を存じて居る。

▲是字寺、大字明大寺に在り。満珠山龍海院とい

大ふ、享録三年清康の建立である（由緒等既に記されれば畧す）

是猶本多家に於ては、此大祭を期し、家祖平八郎忠勝の誕生地を額田郡岩津村大字藏前に確定し石標を樹立し、永遠に記念せられた。其他市街の近郊に於ける両公に因みある、名蹟は實に枚



舉に違なき程である。

臨時列車と割引

此大祭に就て、鐵道院名古屋運輸事務所に於ては名古屋、豊橋兩驛間に臨時列車を運轉し、或は客車を増結し、來岡の乗客に對し、多大なる便宜を與へたるのみならず、名古屋驛以東各驛より岡崎驛へ、豊橋驛以西各驛より岡崎驛への乗車賃二割引を斷行した。又西尾鐵道株式會

各鐵道會社の協賛

社は、輸送力のあらん限り、全く不定期に絶へず客車を運轉し、同じく乗車賃二割引を行ひ。其他三河鐵道株式會社、豊川鐵道株式會社、岡崎電氣軌道株式會社は各其全線に對して、乗車賃二割引を決定して、大に協賛の意を表されたのである。

餘興

大祭中に於ける餘興は、其大字々々に於ても、各種の催しあり、一々之を列記するは煩に堪わざるところなるが、大祭餘興事務所に於て、關係せる餘興を上ぐれば。

▲角力、十六日、公園内舊宮跡に於て、康生の小供角力の催しがあつた。十八日は幡豆、碧海及京都角力の催しがあつた。

▲大弓、公園内梅林中に於て、十六、七日の二日に涉り大弓會あり、出席者百六十餘名の多數に上り、野村仁三郎、鈴木岩吉、中根熊吉、鶴田簾平、近藤富三郎、萩原源助の六氏は金的に的中した。

▲生花會、額田郡生花會岡崎奨勵會の主催にて、大字十王西本願寺説教所内に於て十六、十七の兩日間、生花會を開く。

▲擊劍會、十七日、公園内舊宮跡に擊劍會を開く、第二師範校、第二中學校、警察吏及有志者



傳馬藝妓の踊

等にて集合する者百四十名、最後に優勝旗の授與式を行ひたるが、拜受者は碧海郡依佐美村大字高棚神谷實吉氏であつた。

▲棒の手、碧海郡駒場村の有志の奉納で市中行く／＼各所に於て、其妙技を揮ひ、觀者をして喝采せしめた。

▲盆石會、細川流、遠州流有志の催して十七、八の両日大字康生實語教會説教場に於て開かれた。

此外傳馬藝妓の行列、松本藝妓の花車など衆目を引く餘興であつた。

大祭と電、汽車乗客

大祭の人出に就ては、何人の豫想も及ばざる、驚く可き意外の人出を見たるが、各鐵道

豫想外の人出

汽車と電車の乗客

にても斯の如き多數の乗客を迎へんとは、想像し得ざる處であつた。官線の如きも上り下り線ども、岡崎驛着の列車は何れも満員にて、中には非常の混雜の爲め、改札も行はれざるが如き結果を來たした。岡崎驛にては、臨時十餘名の驛員を増加し、猶忙殺さるゝの状態にあつた。西尾鐵道の如き、岡崎電氣軌道の如きは、其輸送力充分ならざるが爲めに、乗客の總てを收容することさへ出來ず、各車とも危険を覺ゆるまでに、強て乗車せんとする乗客を制するに、恰も喧嘩の如き奇觀をさへ呈したのである。今、官線岡崎驛、西尾鐵道線岡崎新驛及岡崎電氣軌道の乗客を示せば左の通りである。

汽車、電車乗降客數

岡崎電鐵	岡崎新驛		岡崎驛		驛名	十五日	十六日	十七日	十八日	十九日	二十日
	降客	乗客	降客	乗客							
一、七八六	一六三	一五三	七〇六	三三六	乘降客						
三、四九	二六五	二〇一	一、四九六	六六五							
九、五五	九三	八三	五、一六九	二、九四五							
七、五六九	四八五	八六	二、二二九	三、〇五六							
二、八四七	一〇六	五〇九	一、一八二	一、〇五二							
二、三七五	一六九	二二六	六九七	三、〇七九							

大祭と宿泊人

遠來の珍客
近郊の縁者

大祭に就ては、我市内始めての人出にて、如何なる家にも、遠來の珍客、近郊の縁者を迎へざるものとはなく、到底其數の幾千なるやは計り知る能はざるも、今岡崎警察署に就て届出られたる各旅館の宿泊人數を茲に示せば。

宿 泊 人

		十五日	十六日	十七日	十八日	十九日
宿 泊	二二	三三	八四	三五	四四	
下 宿	四六	五〇	五〇	五〇	五〇	
木 質	四九	七二	一一〇	一〇七	七九	

猶風教上茲に表示するを快しとせざるが故に其人數を現はさざるも、他に遊廓登樓者なるものが驚く可き數字を示しつゝありし事を附記して置く。

大祭と警察事故

岡崎に於ける未曾有の盛事として、非常に多數の人の往來ありしに比し、警察事故の皆無に

均しきは、以て地方の風俗人情を推知す可く、大に誇りとすべきことである。(因みに以下の兩日前後には何等の事故なし)

	迷 子	掏 摸	遺 失 物	盜 難
十七日	七	〇	二	〇
十八日	一〇	一	一	〇

神戸ヘラルドの記者は、其二百年祭を報導せる記事中に録して曰く。

此の如き未曾有の大祭典の當日なれば、人心も不羈自由となり、自から勝手の振舞したる者無きにもあらず、然りながら吾人の實見したる所にては、一個の喧嘩も無く、一個の亂行も無く、爲めに警察を煩はすまでの出来事なく警官は他地方より來到したる不案内の旅人に對して岡崎町内の案内を指示するが、然らば餘り面白さに連れられて道迷ひしたる小供に對して町内の方角を教ふるに過ぎざりき。

一個の喧嘩
なし

大祭と罹病者及負傷者

愛知縣警察部は、臨時救護班を組織し十六、七、八の三日間、救護所を各地に置き、醫學士

齋藤檜夫、全田澤秋作及伊藤一彦の三氏各其任に當りたるが、三日間に於ける救護所の所在地は、十六日公園内、十七日公園内と菅生堤の二個所、十八日公園内と明大寺と傳馬天神の三個所にして、其取扱ひたる罹病者、負傷者數は左の通りである。

熱射病と火傷

	公園内	菅生堤	明大寺	傳馬天神
十六日 罹病者	一〇	〇〇	〇〇	〇〇
負傷者	一〇	〇〇	〇〇	〇〇
十七日 罹病者	二〇	一三〇	〇〇	〇〇
負傷者	二〇	一三〇	〇〇	〇〇
十八日 罹病者	四一	〇〇	七〇	七一
負傷者	四一	〇〇	七〇	七一

因みに罹病者の多くは、熱射病にして、女學生に多く、負傷者の多くは火傷にして、煙火係りの壯漢に多かつた。

大祭と役員

大祭に就て、本多祭主の名を以て、それ〴〵役員を委嘱されたるが、其部署及氏名は左の通りである。

- 總長 男爵 土屋光春
- 副長 小柳津要人、志賀重昂

幹事長

細谷鈴馬

幹事

寶物展覽兼會計係

和田有

式典兼來賓接待係

淺尾鏊三郎

餘興係

明石錠五郎

庶務係

大池周三郎

委員

(次第順序なし)

庶務

牧野廣吉、岡田壯太郎、細井新太郎、戸田一郎、太田松藏、柳川徳義、山

田愛太郎、山本信次郎、前田和三郎、近藤寅治郎、赤堀兼次郎、天野政吉

青山清治郎、坂部與三三郎、岸田政治、杉浦龍治郎、加藤綱吉、佐野萬作

式典

山中三郎、岩瀬源六、池田徳次郎、鳥居次一郎、竹中乙三郎、永井密太郎

長坂兵治郎、松岡庄太郎、足立廣吉、坂口富作、木藤八太郎、日置善助、

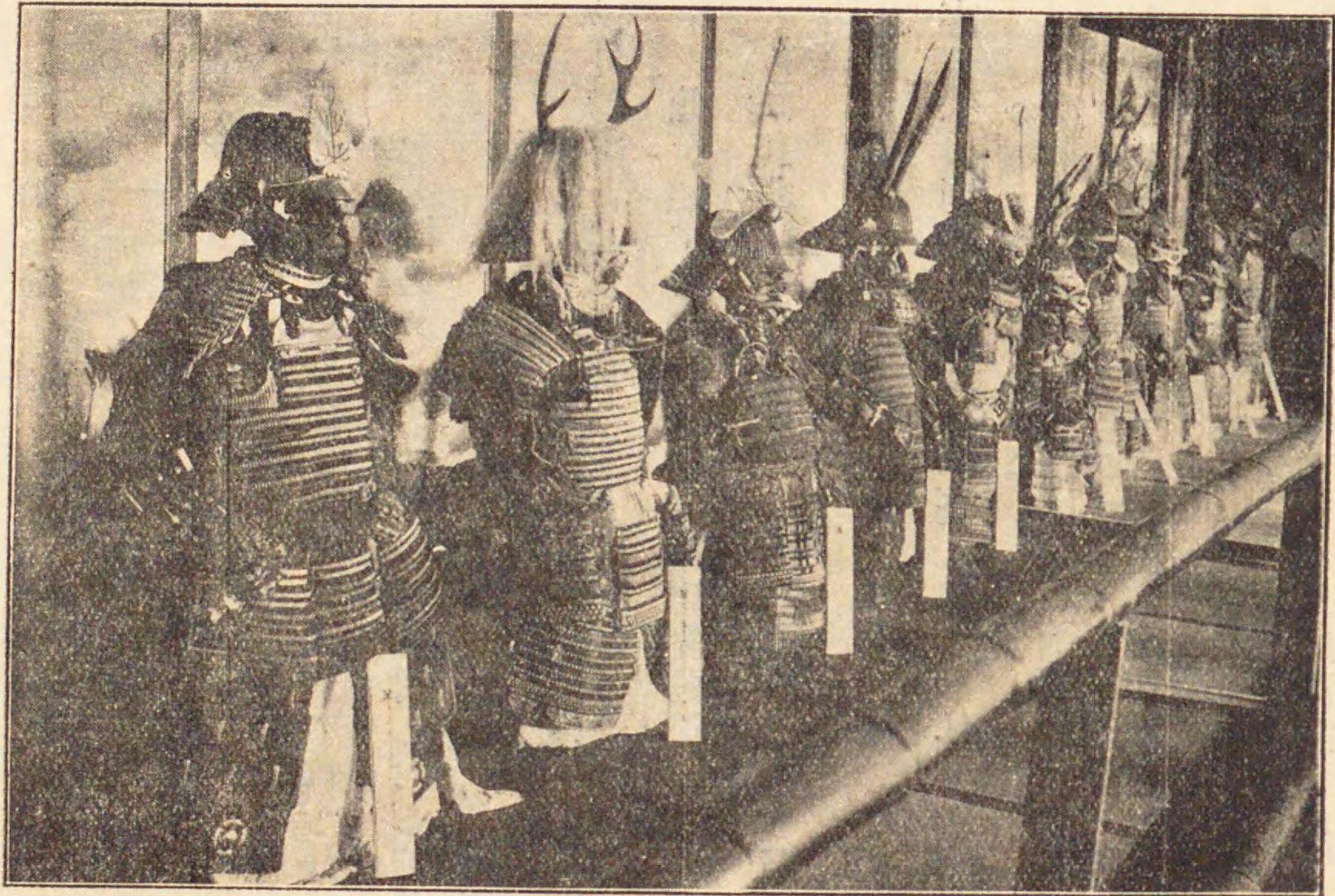
杉浦權三郎、杉浦芳太郎、加藤重次郎、清水善六。

來賓

荒川定吉、千島喜代三郎、伊藤榮次郎、磯貝甚三郎、細井幸四郎、奥瀬伊

三郎、奥井才次、高木増太郎、都築巳之吉、中島仲治、内田徳太郎、畔柳

廣市、藤井耘太郎、近藤平助、宮川源四郎、平岩飴郎、平井清吉、瀬戸庄



本多家歴代の甲冑(寶物)

寶物展覽

太郎、須藤庄吉、稻吉幸作、小田庄三郎、松井弘、(以下兼務)岡田壯太郎
和田菰、矢野慶明、小濱音一郎、中村恒八、中村善太郎、長坂小十郎、上
野金三郎、植村源五郎、矢野貫三、山口兵太、來村鎮三郎、淺井泰造、尾
崎豊、梶彰。

餘興

本多憲、大久保柳太郎、岩附定五郎、織田兼次郎、梶川長太郎、筒井龍藏、
倉光七松、牧龍夫、佐々木圓七郎、清水勝次郎、平岩利造、廣瀬安次郎、
鈴木新太郎、清水喜代次郎、服部五郎吉、間宣忠、(以下兼務)前田和三郎
近藤寅次郎、山田愛太郎、佐野萬作、加藤綱藏。

會計

木津鈞藏、菅野鈺治、濱野通房。

贊助員

早川休右衛門、新實新十郎、田中乙三郎、深田三太夫、近藤東右衛門、元
松半彌、千賀又市、千賀千太郎、齊藤義介、村松恒太郎。

茲に本稿を了るに當り、猶左記の二三項を
轉載するの光榮を有するのである。

外字各新聞紙が長きは長欄二頁に涉りて
掲載せしは縣郡教育會に於けるコックス
氏講演及寶來座幻燈會に於ける志賀氏の
講演なり。兩講演共に十分精細に全講演
を掲載し且つ近時の大演説にして最も外
國人の視聽を快くせしものなりと批評せ
り。何故に外國人の感興を此く迄に惹き
たりやと云へばコックス氏の講演は「家
康公は日英同盟の基礎を造れり」と説き
たる事が英人を大に喜ばしめ又志賀氏が
「家康公は日米交歡を期圖せし最初の日
本人なり」と説きたる事が最も米人を聳
動したるを以てなるべし、甲は日英の好

感を乙は日米の好感を喚起したるを以て此くまで外交上に資したる重要演説が岡崎といへる無名の一都會（外國人なり又は世界より見れば「岡崎と云へる無名の一都會」なり呼ばるゝも致し方なし）に於て試みられたりとは誰人（外人自ら云ふ）も期せざる所なりしならんご批評せり尤も志賀氏は寶來座に於ては十分に講演する能はざりしを以て其の原稿の全篇（英文）を來岡のカーチス氏等の交附したるが此等の邊より外國人の間に傳播したるものなるべしと云ふ。

カーチス氏は又大祭を概括的に批判して曰く、

此を要するに岡崎の家康忠勝両公三百年祭は眞に比類なき成効と評す可く委員諸君子の爲めに其非凡なるプログラムを作製せられ且つ之を遂行せられたる事を實に祝して慶せざるを得るなり

志賀祭典副總長は三百年祭に關する外字新聞の切抜が續々到來せるを看讀しつゝ曰く

日本を世界に廣告するには日露戰役と云ふ十餘億圓の廣告料を支拂ひたるが岡崎を世界に廣告するには僅々一万餘圓にて事濟みたり近年に比類無き安直の廣告料と云ふべし云々、サテ岡崎は此の如く世界に廣告せられたり此の大廣告を機とし岡崎人士にして發奮興起する所なくんば岡崎人士は未來永劫に沈淪するものたり岡崎人士たる者両公三百年祭を動機とし須

比類なき成効

安直の廣告料

らく實業上に工藝上に精神上に大に發奮興起せざるべけんや、云々

家康
忠勝

兩公三百年祭講演筆記

講演筆記目次

- △家康公と日英の關係及忠勝公の大所……………エチ、エー、コックス……………一
- △徳川家康を論して功臣としての本多忠勝の事蹟に及ぶ……………堀田璋左右……………一一
- △家康公の墨西哥交通……………志賀重昂……………二六

家康公と日英の關係及忠勝公の大所

早稲田大學教授 エチ、エー、コックス

閣下及諸君

私は英國人として、又三十年以來東京に住居して居る者として、今日此岡崎にて、家康、忠勝両公三百年祭にお招きになりましたことは、大なる名譽と存じます。

英國人、東京、これは家康公と最も深い緣因があります。東京は御承知の如く家康公が造られた市街であります、英國は家康公が三百年以前に交通を開かれた國であります。然らば私は英國人として家康公は私の最も古き朋友たる如くに感じ、又東京に久しく住居するものとして、家康公は最も大なる恩人たる如くに思ひます。然らばこの最も古き朋友にして、また大なる恩人を誕生せしめたる岡崎に來り、両公三百年祭に講演するは、單に無上の名譽のみならず、また無上の満足及愉快を感じます。

扱今日は三百年祭にて、市街は殊に賑やかで、又三河の名物たる煙火が揚がりますことと聞きました、其中で唯今この教育會にて講演などすると、諸君の心うちも落ちつかんやうに御思召すかも存じませんが、これに因んで一つのお話をいたします。

岡崎公園、即ち岡崎の城址に重昂志賀さん、日本風に申しますと志賀重昂さんの出品されました、アラモ、即ち亞米利加の長篠の戦の記念物が見へますが、此長篠城の大將たりし奥平貞昌、此人は三河武士の花と呼ばれ、奥平家を造つた人でありますが、その奥平家の家來に三田の聖人、明治の大豪傑たる福澤諭吉先生が産れました、明治御維新の時、東京上野にて彰義隊の官軍と戦を致しました時、大砲の彈丸のドン／＼鳴る音を聞きつく心靜かにウエーランド氏の經濟書を慶應義塾の書生に講義をせられたといふことは、日本文明史の一美談となつて居ります、騒動の中に心を落ちつけて居るは、また三河武士と存じます。

扱只今より本論に入りますが、日本の大豪傑たる秀吉公と家康公とに大なる違ひがあります、秀吉公は日本を統一し、朝鮮を征伐し、明則ち支那を取らんとし、また比律賓諸島を征伐せんとされたるのである、華々しい、愉快である、しかしながら實を殘さない。

家康公はこれと違ひ、日本を統一し、大なる大名の近くには競争者として他の大なる大名を掘置き、其間に譜第の大名を交せて置き、世界の歴史に於て最も完全なる封建政治を造り、而して三百年の太平といふ世界に復たとなき太平を造られました。斯くて、家康公は西班牙に對して比律賓諸島の貿易を開かれました、葡萄牙人に對して澳門及印度のゴアと貿易を開かれました、支那との貿易の根據地たらしめんとして、薩摩の島津氏をして琉球を取らせました。

和蘭人を可愛がつて居られました、浦賀、則ち江戸灣の入口に在る港は世界に對せる日本の開港場とすべしと計畫致されました。しかしながら私は英國人として、最も家康公に感心せるのは、家康公が我が英國の如き日本より最も遠き國と交通を開かれたことであります。これより先き英國人にウイル、アダムスと申す者が應長五年則ち西曆千六百年に日本の九州豊後の國に漂着いたしました、此のウイル、アダムスは船の舵取則ち按針でありました、船及航海に殊に通じて居りました。眼の明かな且つ胸の潤き家康公はアダムスの才を認め之を用ひられました、アダムスは家康公の命令に隨ひ、墨西哥に渡海する船を造りました、家康公は益々アダムスを重く用ひられました、幕府の武士馬込勘解由の娘を嫁はせました、江戸に屋敷を興へられました、即ち按針よりして今日も日本橋區に按針町と云ふ町がありますが、これは按針アダムスの屋敷があつたからで御座います。今の横須賀船渠附近に領分を宛られました、此處は相摸國三浦郡逸見といふ處でありますから日本の人はウイル、アダムスを三浦按針と呼びました。三浦按針の石塔は今日にても横須賀市の逸見に在りまして、その妻則ち馬込勘解由の娘の墓と並んで居ります。江戸按針町の人はアダムスの徳に服し、其石塔の傍に二つの石燈籠を献納致しました、三百年の間按針町の人の毎年白米八升宛を按針の石塔に献納いたして居る、明治維新の後には米に代へて寄附して居ります。此の三浦按針則ちウイル、アダムスが送りました手紙を英

國人が見ました、其内にこう云ふ事が書いてありました、「日本の人は其性質宜しく、殊に禮儀に厚く、また勇氣ありて事に臨めば死を恐れず、法を守りること公平にして、偏頗なる裁判を

四

記念展覽會
陳列品

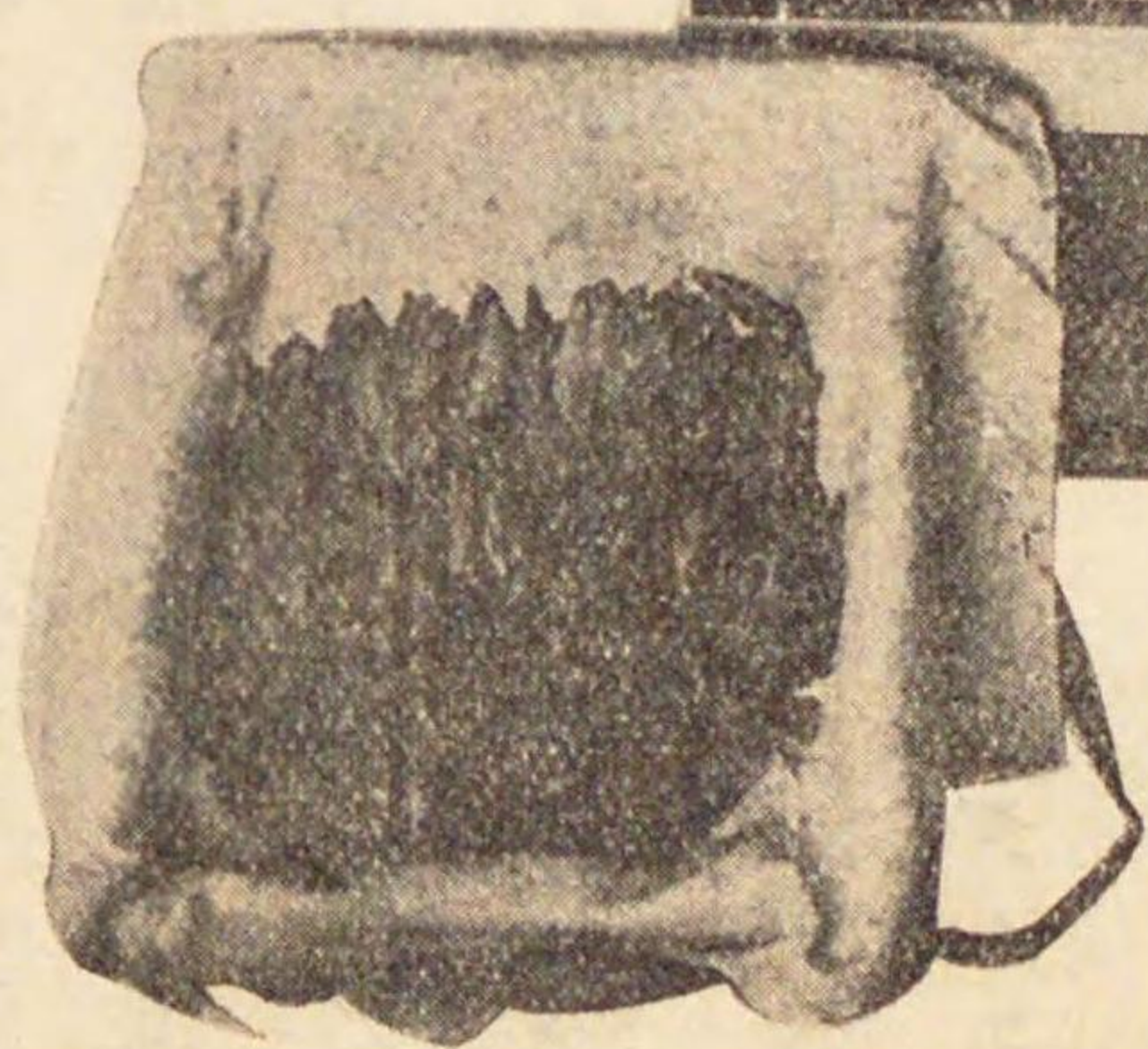
本多忠勝自書讀と

烏毛頭巾

黒鷄毛にて製す天正十

八年小田原陣の節徳川

家康より拜領



することなし」と。そこで甲比丹ジョン、セーリスがクロウヴ外二隻の船を率ひ、一千六百十一年四月二十八日に英國のダウンスを出帆致しまして、慶長十八年五月四日則ち一千六百十一年

の六月二十一日に日本の九州平戸に着きました。

家康公は英國の船の來たる事を歡び、甲比丹セーリス等が駿河則ち静岡に到着したる翌日、セーリス等に面謁いたしました、セーリスは國王ジエームス第一世よりの書面を家康公に献しました、其手紙はパーチメント即ち羊皮紙に認め、縁には銀の唐草を染め、手紙の文字は金で書き、實に立派なるものでありました、其文句は唯今の英語より見れば實に奇妙の字で Wee を Wee, have we have, if we ye といふやうな書方であります。

Wee haue encouradged our said subjects to vndertake a Voyage into your Country, as well to sollicit your freindshipp and Amity with vs, as to enterchange such Commodities of each others Countreys as may be most of vse the one to the other, beinge nothinge doubtful, but such will be your princelie magnanimitie and disposition as to be readie to ynlprace this our desier.

讀めは別に奇妙でもありませんが、若しこれを字に書いてお目にかけたらば、今日本にて英語を學ばれたる諸君には奇妙であります。

扱この時家康公の顧問は京都の南禪寺金地院の崇傳といふ和尚でありました、和尚崇傳は此の英吉利文が讀めなかつたのです、其日記にも「文言は讀めざる故」と書いてあります、無理

五

もない。そこで有繫のユライ和尚もウイユル、アダムスに翻譯させました、アダムスも日本語を餘り多く知りませなかつた、キング、ジェームスを「せめし帝王」と譯し、羅旬語の Rex 即ち國王が解らぬ故に假名字にて、「れんし」と記し、Westminster Palace を「居城にしめした」と書きました、不思議奇妙なる翻譯であります。

しかしこれでも意味が解つた故に崇傳は家康公の命令を奉じ、漢文にて「日本國源家康復章伊伽羅諦羅國主麾下（伊伽羅諦羅即ちイガラテイラは西班牙語にて英吉利の事なり）雖隔萬里之雲濤須齊咫尺之封疆乎」と記しました。此時ジェームス王よりは羅紗、象眼入の鐵砲、望遠鏡、蟲眼鏡其他種々の物を贈られ、家康公よりは、押金の屏風五双を贈られました、日英同盟の眞の淵源であります。

これからして家康公は英國人を愛し、英國の商人に特典を與へ、又種々の方法を以て、日英貿易を奨励されたのであります。「上の好むところ、下之を好む」で、日本の婦人も英國婦人を愛し、英國人と結婚した者がいくらもありました、其内ウィリアム、イートンは日本の女を嫁り男の子が産れました、此子はウィリアムの子で日本人の母なる故にウリエモンと日英同盟的に命名しました、よき兒たと見へました、平戸に居たる和蘭の甲比丹が、「Mr. Eaton has here a bright boy. He is fat and just like his father」と書いたのを見ました、また其母より父に寄

せたる日本文の玉章に「ウリエモン事萬事頼み申し候、そのととさまを親よりも思ひ申し候」と認めてある、日英同盟は事實上益々堅くなつたのであります、以上の如く家康公は事實上に於て日英同盟をつくられたる人である、故に私は英人として家康公を私の最も古き朋友の如くに感じるのは自然であります。

以上の如くに日本人の海外發展は家康公が最も力を盡されたるのであります。然るに日本人は、却て逆さに家康公を以て保守的の人物と認めて居らるゝ様でありますから、茲に私は英國人として、家康公が日英の關係を開通せられたる第一の人として、聊か紹介いたしました譯で御座ります。

扱これより忠勝公の事を申し上げやうと存じます。本多忠勝公の事はどなたにでも御承知であります、三河のお方殊に又岡崎のお方は元よりよく御承知であります故に、忠勝公に就て英國人なる私などが別段に講演する必要はないのであります。しかしながら忠勝公に就てどうしても一つ申し上げたいのは公が常に其敵よりして褒められる事で御座ります。旅順の戦の時、乃木大將の二人の令息共に戦死した事を聞き、敵なる露西亞の、ステッセル將軍は涙を滴ぼして乃木大將を慰めました、然るに乃木大將は「いや私は日本の武士の家で産れました者である、武士の家の子供は産れるよりして既に之を主君に捧げてあるのである、されば二人の子供が戦

死したとて、もとより覺悟の上なれば私は何んとも思ひません」と答へられた。すると、ステッセル將軍は愈々涙に咽び、「大人の道である！大人の道である！」と叫び、それよりして常に乃木大將の事を褒めた。即ち乃木大將はその敵より褒められたので、乃木大將の人に勝れたる處はこの敵より褒められた處にあるので御座ります。

扱本多忠勝公も斯の如く敵より褒められるのであります、忠勝公は乃木大將と同じくその御子の忠朝公は大阪陣で戦死なされました、忠勝公の祖父も父も伯父も皆戦死されました、此等は實に同情に堪へない次第であります。扱忠勝公が家康公に仕へてより第一の激戦は三方ヶ原の合戦で御座ります、その時忠勝公の武者振を見て、敵たる武田勢は「家康に過ぎたるものが二つある唐の兜に本多平八」と諷ひました。

次に忠勝公の出征された激戦は小牧山で御座います、此處に忠勝公は八百の兵隊を引き連れ、三万五千の大敵即ち太閤秀吉の兵を並び進み、悠々と我馬の手綱をゆるめて水を呑ませつゝ居るを見て、秀吉公は覺わす「敵ながらも天晴れなり、日本一の大膽者かな」と褒められました。其後家康公と秀吉公と和睦を致されました時、忠勝公は京都に行き、偶々秀吉公に面會されました、其時秀吉公は忠勝公を見て「我は豫てより汝の武勇を聞て居つた、しかし小牧山の戦にて汝が僅かなる兵隊を引連れ、我が大軍と並び行きたるなど實に大勇者でなければ出来ぬ事である」と申されました。

佐藤忠信兜
頭形五軒筋錆色眉庇表に
金泥にて獅鬚あり鞆二枚
錆色鉦綴浮裏皮頭立黒鳥
毛長一尺七寸外に熊毛長
九寸立物添
頬當錆地髭金泥にて涎懸
へかけて盤く涎懸三段錆
色紺寶懸
由緒に曰く、小田原陣後
天正十八年七月中旬秀吉
公野州宇都宮に至り忠勝
を招き一の兜を出し此は
是傳へ聞く佐藤忠信が兜
なり昔忠信芳野の役生を
捨て其主の厄を脱す今汝
亦徳川家の爲め三方原、
長久手等の戦場に於て身
を輕んじ敵に當る其忠信
に異體同志と謂つべし此
兜を着くべき者今世汝に
あらずして誰乎依て之を
賜ふはす。



それから後に秀吉公は小田原に北條を征伐せられました。北條は能く防ぎ戦つて却々降参いたしました。すると忠勝公は北條氏勝に降参を勧められました。敵の北條氏勝は「本多忠勝は頼りになる人である、彼人が降参を勧める故に其言ふことを聞く」と云つて、遂に降参いたしました。

秀吉公は北條に勝つた後、宇都宮に参られ、扱忠勝は何處に居ると申され、忠勝公を上總の應南より召され、扱忠勝公に兜を賜はり「これは昔の勇士佐藤忠信の被りたる物である、今の世に日本國中に於てこれを被る物は唯汝のみである」と謂はれました。此兜は本多子爵家の御寶物となり、此度の三百年祭に當り岡崎是字寺の展覽會に出品されてある由を聞きました、私は演説もこれにて御免を蒙り、明日なり是字寺展覽會に参り、御蔭にてこの兜を拜見いたし、日本の四人の英雄即ち佐藤忠信、秀吉公、家康公、忠勝公を追懐いたし、昔を偲ぶ心得で御座ります。

最後に當り、私は日本に對し最も熱誠の朋友たる英國人として、日本の兩英雄なる家康、忠勝兩公の三百年祭を心より祝し、斯くて此三河より將來にも兩公の如き大英雄が續々と輩出することを祈ります。

徳川家康を論じて功臣としての本多

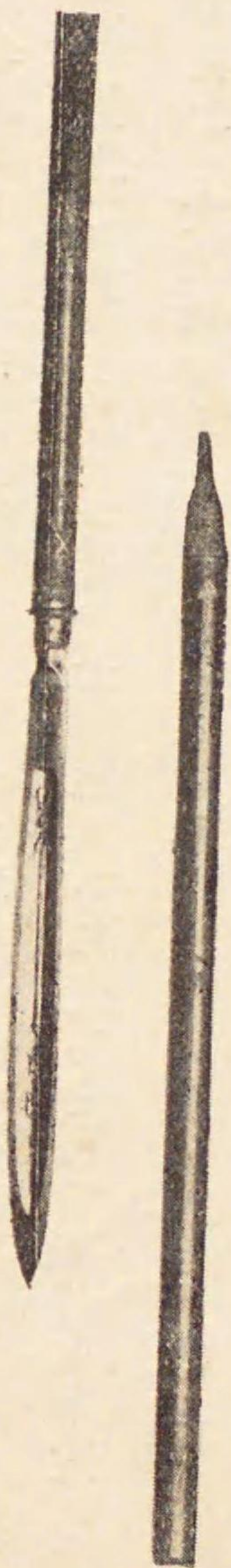
忠勝の事蹟に及ぶ

堀田 璋 左右

今日は兩公三百年祭記念の講演會を御催しで有つて私も兩公の事蹟に關する一場の講話を致すを得ましたのは、無上の光榮と存じます、本題に入るに先ちまして御斷りを致して置きたいのは、兩公共に歴史上の大人物でありますけれど、我々は常に此の如き人物に對して敬稱を用ひないのが通例で有ります、是は慣例上の事ですから御免を蒙ります、家康の事業又は人物に就いての評論は簡單に云ひ盡し難い、それは歴史上の人物に事業も多く各方面に就いて各種の事實が複雑に存じて居りますから、之を概括して申上ぐると、多くは空論に成り易く、又興味も薄い事と存じます、今日は場合が場合、又教育會の御催の會で有れば家康の權謀術策とか云ふ様な點は之を避けまして、教育の爲めに成りそうな點、又は此大英傑を偲ぶに足る様な材料などを述べて而して、其の人物の位置を論定せん考へで有ります、先づ第一に家康は階段的の成功をした人で有ると云ふ事から申上げたい、一體徳川氏はもとは松平氏を稱したものです、家康の祖父清康の時の西三河を手に入れたのです、此人は家康の

生るゝ七年前に、尾張森山に殫れまして、其子廣忠が家を継ぎました、其時は十歳の幼年者で有りましたので、尾張の織田信秀は之を併呑せんとしたので、此際廣忠は今川氏に逃げ倚つたのですが、松平方にも織田黨は有つたのです、それで織田は終に安祥を攻め取る事に成りましたが、岡崎では援兵を今川氏に乞ふたのです、そこで人質として六歳の家康(天文十一年十二月廿六日の誕生なり)を駿河へ送ることに成りました、家康は廿八人の質子と雑兵五十餘人を連れまして、田原の戸田康光が方へ陸地は敵が多いからとて、船で送り届ける事にしました、此康光は家康の繼母の

蜻蛉剪鎗 本多忠勝所用 在銘藤原正眞作
身長一尺四寸五分幅一寸二分重ね三分半柄黒塗長一丈三寸



記念展覽會
陳列品

父で有つたのです、此時の事は大久保彦左衛門の作つた三河物語と云ふ本に出て居ります。
田原の戸田少弼殿は廣忠の御爲めには御舅なり、竹千代(家康の幼名)の御爲にはまゝ祖父なり、然れども少弼殿織田の彈正之忠(信秀なり)へ永樂錢千貫目に、竹千代様を賣らせ給ひて、御舟に召して熱田の宮へ上らせ給ひ、大宮司あづかり給て明の年まで御座します、

と書いて有りますが、松平記には戸田の弟五郎が、潮見坂で奮うて、舟で尾州へ往いて、織田へ差上げた所が、信秀は五郎に永樂錢百貫文を與へた、之を世間では右の代に受けたのじやと取沙汰したなご書いて有ります、武徳編年集成には田原へ迎へ取つて、之を織田へ渡すから東三河を貰ひたいと申出たので信秀は固く其約束をして、當座の賞として使者に五貫文を遣つたとして有ります、要するに天下の英傑を敵に賣つた事に成ります、
家康は尾州に遣られて三年目、即ち天文十八年八歳の春、父廣忠が死にました、又織田の方でも信秀が死にました、岡崎は今川の代官が之を支配して居たのです、そこで織田方と松平方との間に媾和が成立ちまして、今川軍に安祥で圍まれて居つた織田信廣と家康と人質交換が出来て、家康は三河に歸り、直ぐ又駿河の今川へ人質と爲つて往いたのです、駿河に居たのは随分永い間で、其間に種々の教育を受けて、兎も角も戰場に立つて恥かしからぬ迄に、人物を仕立上げられたので有つて、其間の艱難辛苦の一通りで無かつた事が、種々の談話に遣つて居ります、遠州高天神の城を家康が攻落した事が有りました、甲州の武田勝頼方が來て持つて居たのでして、孕石主水と云ふもとの今川方の侍も籠つて居たのでしたが、家康は主水を捕虜にしまして、終に彼に切腹を命じました、全体ならば此んな人物は皆赦して遣るのが家康の遣り方でしたのだが、之を赦さなかつたと云ふ譯は、家康が今川に居た時に、此者等が自分を冷遇した

からで、家康が小鷹を使ふた時に、其鷹が外れて、主水が邸へ這入つた事が屢々あつた、其折家康は裏の林へ這入つて鷹を据ゑ居た事も有つたのを、主水が知つて、大きな聲で「三河の悴に厭き果てた」などと度々云つたのを家康が聞いて残念に思つて居た、高天神の落城は夫れから三十七八年も立つた事で有つたに、善く覺ゑて居たと云ふのは、受けた侮辱の詞がよく／＼悔やしかつたので有つたらうと考へる、要するに今川に居た時は非常の虐待を受けたものらしいのです、

又西三河には今川氏から代官を遣つて支配をさし、家康には扶持を與へて、三河の収入は全部自分の方へ押領して居たので、三河の臣下はドウカ家康に山中二千石の地を與へて呉れど、今川へ請うた事も有つたが、少しも省みられなないので、是れを見ても家康に對する扶持の少なかつた事が知れるのです、夫れでしたから臣下の給養が全く不足で有つたと云ふのは當然です、三河譜代の衆は田地の手作をし、して、年貢米を納めたのです、丸で小作百姓の様に鎌鍬を取つて妻子を養育した、おまけにサア事が起ると、織田征伐の從軍を命せらるゝので、之が年に五度も三度も有つて、戦死するものも多かつた所から、三河衆が駿河衆を忌み嫌つた事は一通りで無かつたのでして、其間凡十箇年と云ふ永い年月の苦心で有つたのです、

永祿二年即ち家康十八歳の時に、大高城の兵糧入れと云ふ事が有りました、之は今川方で難か

しい場所へ家康を遣つて、自滅せしむる策で有つたのです、此時大高城は織田勢に包圍せられて居て、糧食に乏しい所から、之を救はんが爲めに家康を出したのでした、家康は巧みに此難場を成功しまして入城が出来たのでした、然るに翌三年に爲りまして桶峽の戦役となつて、今まで駿遠三の大勢力であつた今川氏が只一朝に失敗したものでしたから、家康は最早今川に屬する能はざるの状況に立至つたので有ります、

信長は家康と和睦を行ふたので、家康は其御禮の爲めに、百騎を從へて清洲へ往きました、信長は非常に之を欵待しました、信長が曰ひますには、此上は兩旗を以て天下を一統させよう、今より水魚の交りを爲し、互ひに之を救ひませう、此事は聊も偽は無い、織田が若し天下の首將たらば、徳川は其幕下と爲り、徳川が若し天下を取つたなら、織田は其幕下と爲らうと、信長は如才無いことを云ひました、實は此時信長は尾張國內を統一したから、是れから美濃經略に掛らんとする積りで、甘い事を云ふたのですが、兎に角、家康の實力が認められたから、信長は彼をして東方の敵に當らしめんとしたものと見て、差悶へないと思ひます、即ち家康が一歩の成功をしたもので有ります、

今川方では松平方が織田に附いたと云ふのを憤りまして、三河から取つた人質を吉田(今の豊橋)で殺しました、随分慘酷な目に遇つたのです、是より後は家康は今川氏に對して屢々戦を行つた

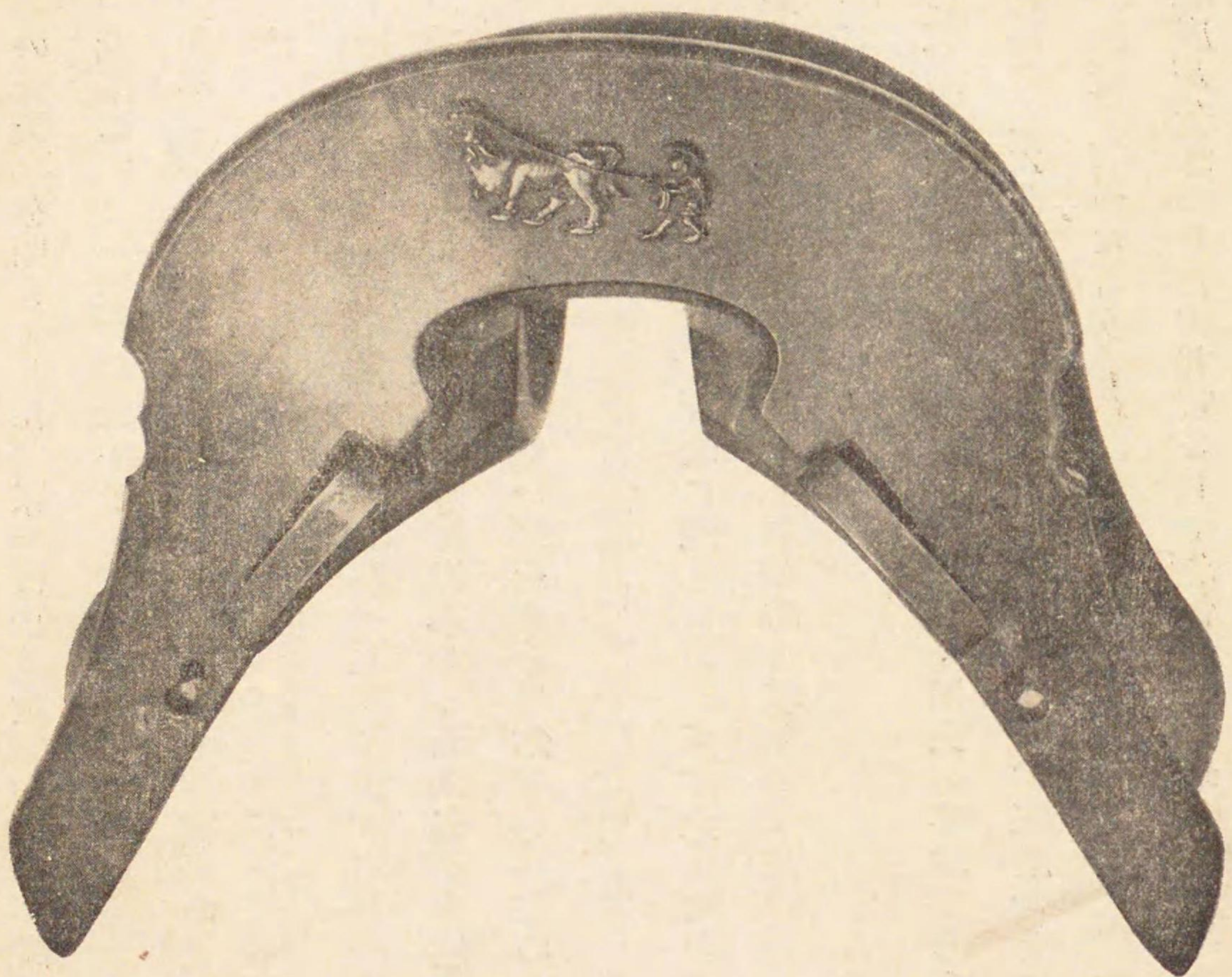
のです、然るに一面領内では、一向一揆と云ふ難問題が起つたのでした、一時は譜代の臣下な
ども、其渦中に投じまして、敵對行爲を示したのでしたが、幸に今川氏は暗愚の君で有つたか
ら、事無くしてドウヤラコウヤラ治めましたが、随分危険の事でした、

永祿八年、家康廿四歳の時に、東三河が首尾よく手に入りました、廿七歳の時、即ち永祿十一
年冬、家康、信玄の間に條約が出来まして、大井川を堺として、遠州を手に入れる事に爲りま
した、それで其翌々年に引馬城即ち後の濱松城に居を移しましたのでして、是からは家康と信
玄との交渉が頻繁に起つたので有ります、然し今川氏に屈して居た時から見ますれば、それほど
大きく爲つたと云ふ事は推察が出来やうと存じます、

元龜三年十二月廿二日、家康三十一歳の時に信玄との大合戦が有りました、之が名高い三方原
の合戦で、此時は流石の名大將も武田方に悩まされた事は非常なものでした、後世之を家康一
生の大事の一つに加へて有るやうに存じます、何れ家康自身の口から白状された事で有らうと
思ひます、家康の子義直は尾州の太守ですが、此人が名高い畫工の探幽に命じて、此時の家康
の肖像を描かせました、今日之を拜見致しますに、床几に腰掛けた其姿が、普通に有る像と違
うて、顔色憔悴の体、また片足を片膝の上に載せて、沈思熟考といへる姿を顯はして居るのは
實に當年の苦心の狀を追想せしむるに足るものと存せられます、蓋し義直は之を以て座右の銘

記念展覽會
陳列品

手形鞍 本多忠勝ヶ原戰場の乗下なり



同様の積りで書かしたらうと存
するのです。

天正十年、即ち家康四十一歳の
時に武田勝頼が滅亡したので駿
河國を手に入れたのでした、そ
こで家康は御禮の爲めに、安土
に出で信長に謁したので、此
時馬鎧三百領、黄金三千兩を獻
じました、信長は大に喜んで、
家康に此序を以て京都、大坂、
堺を遊覽せんことを勤めまして
其資にとて右の黄金を還されま
した、それから右の場所へ出掛
けまして、丁度堺の遊覽を了へ
て歸らんとする途中、六月二日

本能寺の大變事を聞ききました、家康は少人數でトウドウ間道を通つて、無事に三河へ歸着しました、此事は家康一生の最難事として、諸書に出て居りますが、誠に危険千萬な事で有つたのです、此年冬小田原の北條氏と和睦をしまして、家康の女を北條氏直に妻はす約束が出来ました、それで武田氏の舊領甲州一圓を確實に占有することが出来ました、今は舊時の家康で有りません、駿遠三甲信五箇國の領主と爲つたのです、其後秀吉との衝突が起つて、其實力を明示したので、其一生にどれ程の進歩が出来かと云ふ事が推察されるので有ります、即ち長久手の合戦で、秀吉に其實力の侮り難い事を充分に知らしめたので有ります、是に於て家康は其子秀康を質として豊臣氏へ遣はし、又秀吉は家康の入浴を求むる爲めに、異父妹を家康に妻はすことになり、且つ生母大政所を岡崎に派したのです、之は取りも直さず、人質の交換と見て宜しい、之が天正十四年、即家康が四十五歳の時で有りますが、是れで秀吉は安心して九州征伐に出かける事が出来たのです、

其年に家康は駿府に移りました、之れは今川氏の舊城でして、古へは家康人質として永く此に住したのでしたが、其領主今川氏は既に亡んで、家康が此に住ぶ様に爲つた事は、家康に取つて感慨無量で有つたらうと思ひます、夫れから家康四十九歳の時に小田原征伐が有つたのです、此時家康が先鋒でした、其賞として北條氏の舊地を貰う事に爲りました、即ち關東へ領地がへ

に爲りました、二百五十五萬石の大名に爲りました、其臣下には萬石以上が三十八人も有つたのです、如何に豊臣氏の天下が統一に困難なりしかは、此一事でも知れるので有ります。

秀吉は家康が五十七歳の時、慶長三年を以て死去しました、是からが家康の技量の顯はれる時代です、時はズン／＼進んで、關ヶ原役後は、實際に於て將軍の權力を持つて居たのです、然し急に將軍に爲らずに居たものだから、中には不審に思うて居たものが有つた様です、藤堂高虎、金地院の長老崇傳が話の折、何となく此事を云ひ出した、其時家康の曰ふには、さる方の事は急がぬ事々、只今差當つて天下の制度を立て、萬民を撫育して安樂ならしむる事こそ急務なれ、況して諸大名の國替所替などにて何れも多事なるに、我一人己が私を計るの違わらんやとて、心にも掛けななんだので、兩人感じ入つて退去したとの事です、慶長八年六十二歳で、家康は終に將軍にられました、同十年になつて、直ぐに職を秀忠に譲り、自分は隱居しました、其間少しも輕舉妄動せずして、幕府の基礎を固めることに力を入れました、七十三歳の時、大坂冬の陣あり、翌元和元年夏の陣あり、終に豊臣氏は亡びて仕舞ひました、其末の方は前の方と比べて聊か性急の様に見えますが、之は家康の老境にもあり、生前に大坂を形附けると云ふ必要から、戦争を促進せしめたので有うと存じます、要するに家康の終始の主義は漸進で有つて段階的の成功を積んだものなることは争はれ無い事だと斷言致します、

筆德永野狩 用所場戰勝忠多本 驗馬植鐘
分五寸八尺二長分五寸八尺三幅



家康は實際大政治家であります、其大政治家たる素養の充分に備はつて居たことは、種々の事蹟に残つて居ります、殊に其隱居後の教訓などは、後世の最も模範として宜しいので有ります、其例を一つ二つ述べて見ませう。

江戸(秀忠)の老臣の中、誰か名は缺ける居るが、其者が使者として駿河(家康)へ罷出でた、其時家康か教訓をして曰く、凡べて大小の諸臣をして、將軍へ思ひ附かしむるも、怨を含ましむるも、皆汝等が心一つに有る事じや、第一、主人の氣に入り、威權の歸するに従

うて、驕奢の心何時となく出来るものなれば、我身の尊くなるに従ひ、愈々謹慎にして、物事を粗略にしてはならぬ、又人を推薦するに些も私意なく、其人品の邪正を確かに見定めて、性質の良忠にして奉行頭人にも爲る可き器量あらば、我と中惡しきとも、私情を捨てて之を登庸す可し、第二、重役の癖として、己れ一人して萬事を沙汰し、人には何にも云はせぬ様にしたく思ふ心の出来るものだ、此心が有る時は何程聰明で、才幹が有つても、甚だ害の有るものだ之を物に譬へて云へば、昇夫の駕輿を擔ぐに、其長同じ程の者が二人有る上に、添肩の者が有つてこそ長途の險所をも擔ぎ行けるなれ、如何に剛力でも一人して駕輿擔ぐことは叶はず、其身の長短、釣合はねば危い事だ、天下國家を治るは、此上も無き重荷なれば、其重荷を持こらへて落さざらん爲めに、數多の諸役人を設け置き、夫れ々の位祿をも與へ置くのだ、去るを己れ一人して、主の對手になつて擔當せんと思ふは大きな心得違ひだ、昇夫に添肩の有る如く長き老臣數多集まり、奉行、頭人も夫れ々の任に叶ひ、何事も思ふ所を包まず、打明けて相議し、殊さら善と思ふ事を取り用ひたならば、萬民も歸服し、天下長久の基となるで有る、凡て和漢とも世々の名臣と云はるものは、一己の功を立てんどのみ思はず、賢哲を選び、才能を勧めて、主の資とするを以て第一の急務としたものだ、汝等常々此旨同僚と相議し、輔導の助を爲さんと心掛けよ、云々、此教訓は明かに家康の一生の經驗を述べて見たものと取つて差支

へない、家康は此主義に協つた名臣良將を得たからこそ、天下が結局其手に這入つたので有ると私は存じて居ります、次に武功に就いての談が有ります、福島正則が關ヶ原の大功で、安藝、備後の兩國を賜はり始めて家康に謁して之を謝した事が有つた、此時に其家老三人も謁を賜はつた、第一の福島丹波と云ふのは、片足痿へて進退は不自由で有つた、第二の尾關石見は兔缺で有つた、第三の長尾隼人は一眼で有つたので、近侍の士は思はず、之を笑つた、後に家康が之を戒めて云ふに、彼の三人は武勇によりて片輪となつたので有つて見れば、誠に榮譽の事で有る、汝等も彼等にアヤかりたく思ふ可きで有る、さるに笑ひの出つると云ふは何事ぞ、惣じし武士は生れも附かぬ片輪になるものと覺悟を極めねば武功は爲し得ざるもので有る、我心には彼等をば汝等如き若者に煎じて飲ましたく思ふこの事で有つた、家康が武功の士を愛したことは、此外數多の談話に残つて居ります、家康が度量の大きかりし例を一つ二つ申上げませう、關ヶ原の役、浮田秀家は伊吹山に逃げ入つた、其時家人進藤正次一人従ひました、正次秀家より差料の國次の脇差を貰ひ受け、拙者謀る所あればとて、主を薩摩へ落し、自分は本多忠勝の陣に至つて曰ふに、某、主の秀家を手に掛け、其死骸を深く埋め、差料の脇差を持参したりと述べた、忠勝曰く、何故に檢使を受けざ

記念展覽會
陳列品

關ヶ原諸將手形

慶長五年關ヶ原陣の諸將より本多忠勝に宛てて各自の手形を捺し血判をなしたる書



りしやと、正次曰く、主の首いかで敵に渡して島木にかけんや、抑も此脇差は秀家が常に愛して、身邊を離さざりしこと、内府(家康)も知ろしめす所なり、御覽に入れ給はれと、忠勝乃ち之を御覽に入れました、紛ふ可くも有らずとて御家人に加へられました、其後秀家虎口を免がれ、薩摩に下つたことが聞かれました、そこで正次が前言の齟齬せし事を糺明に及びました所が、正次の申すは、最初は如何にもして主を遁さんとして詐言を申した、主の爲め身を亡さんは原より期した所なれば、此上は如何なる重科にも行ひ給へと、家康此旨を聞きまして、己が一命を捨て主を救はんとせしは、天晴の忠義者で有ると賞詞が有つて、これ迄充てられた月俸を其儘に賜はつたこのことです、家康嘗て上洛して、二條城に在つた頃、落書するものが多かつた、所司代板倉勝重が之を搜索せんとしたのを家康は止めて、其儘に捨て置かした、抑も如何なことを書いて有つたかと御尋が有つたから、御所柿に短冊様のものを附けたるを持つて出

て御覽に入れた、

御所柿はひとり熟して落ちにけり木の下に居て拾ふ秀頼

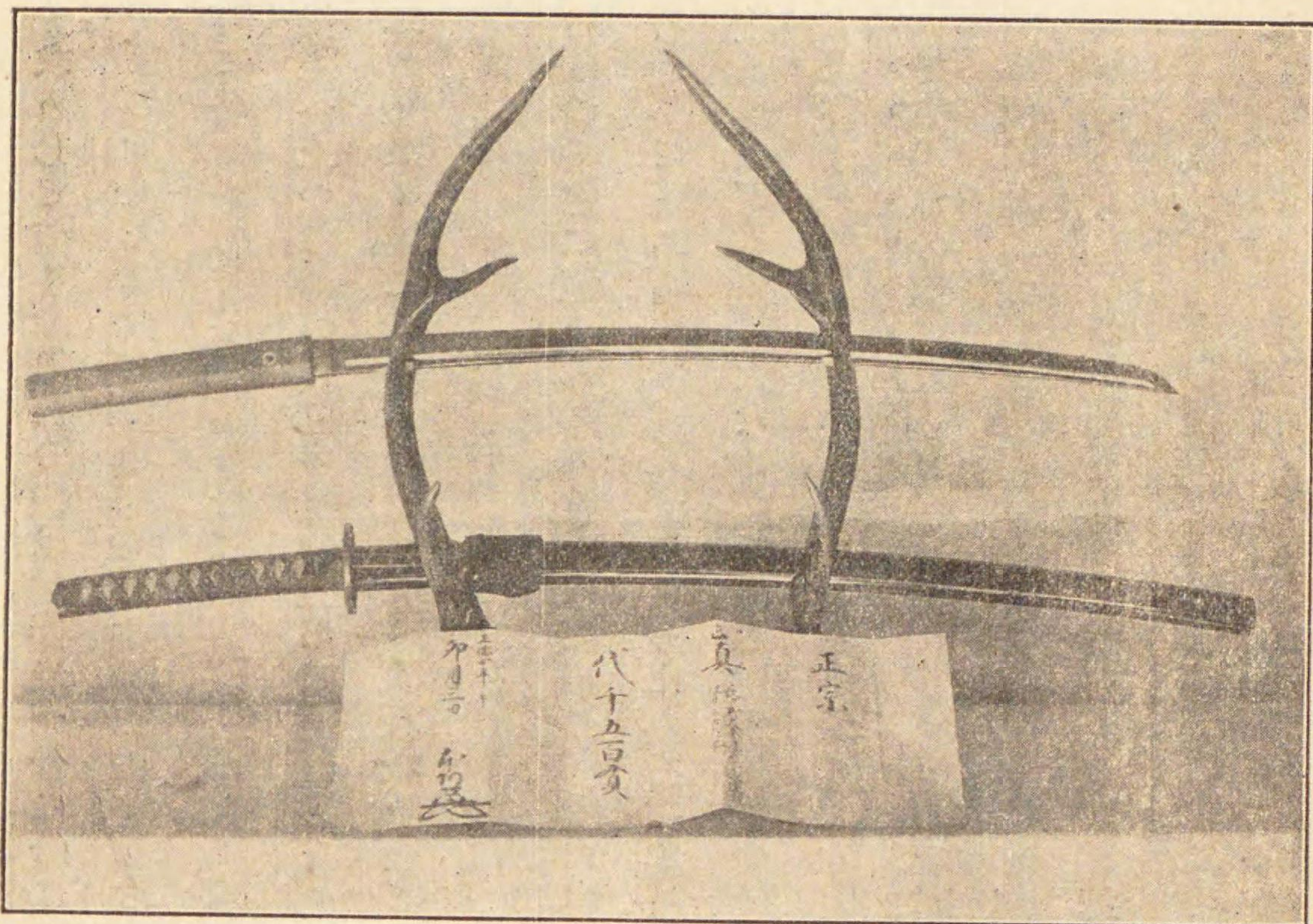
家康は之を御覽して、落書は禁斷す可らず、陋劣なる事ながら、我見て心得に爲ることもあれば其儘にせよ、幾度も覽んと仰せられたとの事でも有ります、之も家康が度量の廣いことを示したもので、其人を追想するに好材料と存じられます、

家康大御所と稱せられし時、將軍秀忠を召して曰く、小身の旗士へは別けて目をかけ召し遣はる可きで有る、同じ大名の中にも三河以來の譜代より拔擢せられ、萬石に連なりしものは、當家と興亡を共にすれども、外様國持の輩に至つては、各々其家を大事と思ふ故に、時に従ひ勢に付き、只家名の長く存せんことを以て主とせるは、古今の常態なれば、是れ亦深く責むるに足らずと云ひて、譜代の大名、旗下の士を大に愛せられたとの事です、家康が其士を愛せられたことは、其事蹟また多く有りますけれども略して申しません、

質素節儉と云ふ事は、家康の特に心を用ひたもので、家康は幼年より辛苦艱難つぶさに嘗め盡したもので有るから、自身の奉養は更なり、御家人までも常に之を以て教諭したもので有りますから、何れも皆其風儀を學び、京士の如くならず、甚だ質素で有つたとの事です、家康の三河に在りし時には麥飯を食した、又御家人に命じて、家人等の妻を迎ふるに、よく木綿を織り

得べき女を求めして曰く、出陣の後は、俸米充分に給はることならず、其時かゝる物を織出て家産に充てよと、人々其儉約にして生理の闕乏を計り給ひしことを感じたこと云ふ、此事は前に述べた駿河に居た時の苦勞と思ひ合はして、其由つて來たる所も知らるゝので有る、慶長九年江戸から伏見へ上つた時の行列の様を見るに、極めて質素なもので、鎗二本、長刀一振、弓一張、挾箱二、徒衆も僅に二十人で有つた、又板坂卜齋と云ふものが侍座の時に、壺に入れて在つた人參を賜はらんとて、家康が兩手で之を下された、違ひ棚に奉書の紙が有つたのを見附けて、一枚給はつて之に包まんとした、家康曰く、それは大名どもへ書狀を遣はすに用ふる料で有る、用なき事に使ふ可らず、人參は良藥にして、汝等無くて協はぬものなれば取らすのじや、奉書は一枚と思ふ可らず、大なる費で有る、羽織脱いでこよとの上意で有つたので、羽織で之を受けて、奉書は元の如く棚へ返し置いたこと云ふ、此話で家康を想見す可きで有らんと存じます、家康の老いて猶勇氣の有つた事は、軍陣の有る毎に常に前方太刀を出させて帶して見たが、大坂冬役の時も例の如く太刀を取出さしめて、之を帶し、且つ曰く、此まゝ席上にて打果てんは残り多き事と思ひしに、此事起りしは本意の至なり、速に馳上り、敵どもを打果し、老後の思出にせんと、乃ち太刀を抜いて床の上へ躍り上つたのを、見たものは其英氣の老いて益々盛なのに感服して、何れも勇氣彌増したと云ふ事です、其後出陣してからも、諸口を巡視せられて

相州正宗刀 本多忠勝爾後傳來
長三尺一寸一分、重二兩二分半、反六分餘、無銘折紙付



唯一騎城の堀際まで乘廻はされた、家康は素肌に鷹の羽散らした標色の羽織を着て居た、城中より彈丸雨の如く來たのに、些かで恐るゝ氣色なく、加賀、越前の丁場まで巡視して住吉の陣へ還つた、此時本多正信家康に速く過ぎ給へど云つたが、聽かなかつた、然るに爰に初鹿野傳右衛門信昌、横田甚右衛門尹松と云ふもの進み出て、殿様には元より鐵砲の烈しき所を好ませ給へば、爰よりは船場の陣が宜し、彼所には大筒を仕かけあれば、ちと御覽す可し、いざ御伴申さんと、馬の口を取りて船場へと續いた、然るに爰は峰須賀の持

口で城よりは間遠で有つたから、彈丸の來ることは稀で有つた、家康曰く、大將が巡視に出て彈丸を恐れて引返しては三軍の示しにならず、流石の兩人は甲州者ほど有りて、軍陣の法に練達して居ると殊に賞譽されたこの事です、是より少しく家康の學問の事を述べませう、家康は幼年より武事に拘はり、戰場に往來して居たものであるから、讀書講文の暇は充分に無かつた、然し馬上で天下を治むることは出來ないと云ふ道理を、疾くより會得せられて居た、そこで四子の書、史記、漢書、貞觀政要など繰返し侍講せしめられ、又六韜三略、延喜式、東鑑、建武式目などを常々閱覽あり、藤原惺窩、林道春、同信勝等は云ふ迄も無く、南禪寺の三長老、東福寺の哲長老、鹿苑の兌長老、天海僧正、船橋秀賢など侍座の折、常に文武周公の事は云ふも更なり、漢高祖の寬仁大度、唐太祖の虛懷納練の事も仰出され、さては太公望、張良、韓信、魏徵、房玄齡の己を捨てて國家に忠を盡した言行などを常に譽められた、家康藤原惺窩が名を聞かれ、文祿二年、江戸に召し寄せられ、貞觀政要を侍講せしめて、之を聽かれた、慶長五年、重ねて伏見にて之を召し、漢書及び呂東萊が十七史詳節を讀ませて之を聽かれた、又其頃家康二條に在つて、羅山を召出して、秀賢、兌長老など博識家と共に閑談をした、又駿河へ退隱の後も羅山朝夕顧問に備はり、家康は彼に東鑑、盛衰記などの校合を命じ

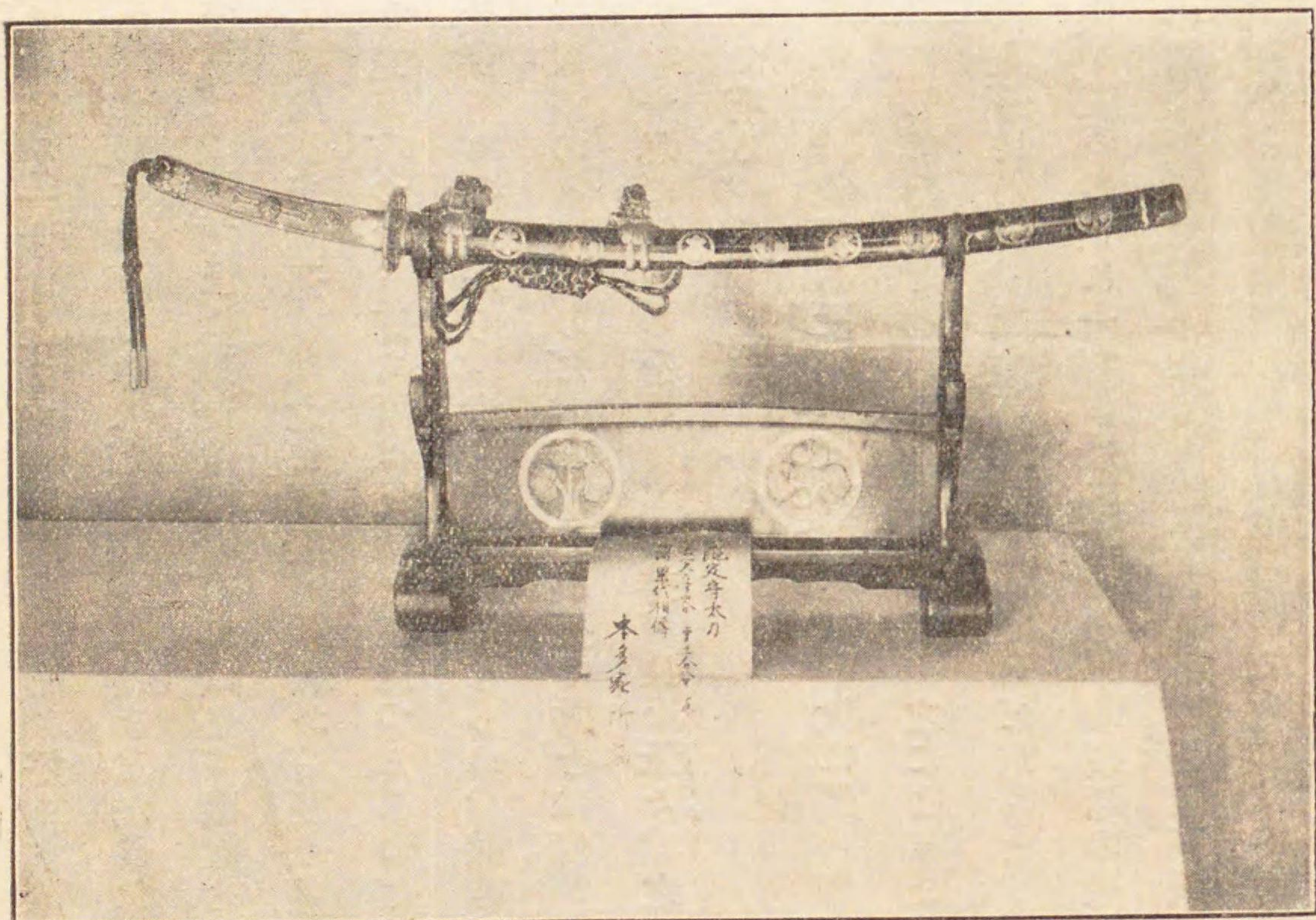
た、或時道春京都に諸生を集め、新註の論語を講説した、聴衆四方より集つて、門前市を爲した、船橋秀賢は禁中へ奏して曰く、我朝古より經書を講ずるは、勅許なくては出来ぬ事だ、然るに羅山私かに閩巷に講帷を下ろして、宋儒の新註を用ふること、其罪輕からずと朝議一定せず、武家の意見を聞く事となつた、家康之を聞いて問ふには、聖人の道は即ち人の學ばずして叶はざる道なり、古註、新註は各々其好に應じて、博く世上に教諭す可き事なり、之を妨害せんとするは、全く秀賢が偏狭心より猜忌するものなれば、尤も拙陋とすべしとの旨であつたので秀賢の訴も遂に行はれずして止んだと云ふ事です、

慶長五年から貞觀政要、孔子家語、武經、七書などを博く海内に施さんとの考で、十萬餘の木製活字を新に刻せしめて、之を三要に給ひて、印刷せしめた、東山一乘寺村の圓光寺でやつたと云ふ事です、其後羅山、崇傳に命じて、群書治要、大藏一覽を銅製活字で刊行せしめました、之が元和二年に竣功したのです、其時家康は之を見て、文字鮮明なりとて稱美せられました、此書二百餘部を印刷せしめて、三家を始め諸家に配頒しました、

慶長七年五十川了庵と云ふ人、私に太平記を印行して、世に弘めましたのを家康が聞きまして、文庫の東鑑を貸し與へて、之を刻せしめました、此本は小田原の北條氏の藏本でしたが、黒田孝高が城内に使した節に、氏政から引出物に貰うて歸り、家康に献じたものです、

記念展覽會
陳列品

傳相代累家多本 刀太守定池三
刀太野裕、燒直分三り反厘八分一ね重、分二寸六尺一長



家康は又應仁以降百餘年騒乱打つゞき、天下の書籍悉く散佚したのを歎きまして、遍く古書を購求せしめました、此時諸家より献じたものは少くは無かつたのです、日本紀、本朝文粹などの闕卷を寫し、梵舜と云ふ僧に命じて、異書を搜索せしめた、慶長七年には江戸に文庫を創建せしめ、一面には院御所を始め、公卿の家々に傳ふる本朝の古記録を遍く新寫せしめんとして、林羅山と金地院崇傳が惣裁となつて、五山の僧侶が集つて之を謄寫しました、此外獎學に關する事蹟は夥しいが、此には略します、

家康の趣味の事を一寸申上ます、遊戯はあまり好まず、時には田樂を見られた事も有つた、圍碁將棋なども消閑には弄ばれたが、深くは嬉まなかつたらしい、只放鷹の事は天性好まれたと思はれ、若年から老年まで、聊かも暇があれば必ず出立せられた、其主張する所によれば色々の利益が有るとの事で、恐くは之は家康が経験から割り出した事で有らうと思ふ、飲酒に就いても家康に意見が有つた、即ち酒は元氣を引立つるものだけれど、遊行の折など量を過せば必ず争鬭など仕出すものだから、大に慎まねばならぬ、然し軍陣か、鷹野には下戸も一盃呑めば勇氣出で、一入精の入るものだ、左れど小盃で呑むは何か祝言の席めきて弱し、上戸の茶碗などにてスハ／＼一息に飲むのを見ると心持が良い云々、之によると多少は酒を嬉まれたことが想像さるゝので有る、

上州館林善導寺に藏する所の家康の畫像は、世に鏡の御影と稱しまして、家康七十一歳の時自らの貌を鏡にして自寫せしものと申します、之によりますると、家康の容貌は目大にして口しまり、鬚は上下にあり、顔は年配相當に瘦せて居ります、然るに東叡山の青龍院にも畫像があつて、家康が天海僧正に一實神道の奥義を學んだ時の狀を探幽に命じて畫かしめたものです、之は家光の時に此寺に納めたもので、之によると顔が割に長く、眉が濃く、目大きく、兩頬豊かにして、自から圓滿の相あり、本縣にては愛知郡高針村蓮教寺にある畫像などは此系の圖で

有る、之を要するに猪首の良く太つた人で有つたには相違ない、岩淵夜話に聚樂の筈に申樂を催した時の事を書いて有る、主人關白を始め織田有樂齋など皆次々に奏せしが、家康は船辨慶の義經になつた、元より肥太つて居つた上に、進退舞曲の節々に左まで心を用ひなかつたので苟ち義經とも見えず、諸人笑ふたと有る又下腹が膨れてあつた故に、自から下帶をべることが出来なかつたと云ふを見れば、公の體格も略々想像が出来るので有ります、

家康は四十歳を越してから、時に病に罹つた、四十四歳の時に癱が出た、五十六歳の時眼病に罹つた、五十九歳で瘡、其年また眼病に罹つたが、關ヶ原役の二三日前に直ぐ癒つた、六十九歳の時に重い腫物が出たが、終に直つた、兎に角良い體格であつたので、病氣もズ／＼平癒したので有る、然るに元和二年正月廿一日に駿河の田中に放鷹した、其時茶屋四郎次郎が京より來着して、此頃鯛の天アラ流行の事を話したので、丁度榊原清久から献上して在つた鯛を天プラに料理させて食せられた、二時間ほど過ぎて、其夜より腹が痛み、服藥して一時は輕快となつたが、其後食慾進まず、漸次に衰弱して、四月十七日に死亡した全く胃腸の病氣で在つたらしい、

以上で大英雄たる家康の人物の半面を想像することが出来ると思ひます、終に臨んで之を古英雄に比較して見ませう、家康は常に頼朝を推尊して、將軍の器と云ふた事もある、又東鏡を愛

讀せられて、大に鎌倉の政治を参照せられた、家康は確に頼朝を手本にせられた所が有つたに相違ない、しかし頼朝に比べて何處かに勝つた所も有り、且つ長生をした丈けに事業も多く、大きい事も出来た様に見ゆる、學問の奨励などは頼朝に見られぬ事で、之は亦全國史を通じて中々の大功績の様に思はれるで有ります、次に人品の上では足利尊氏と比して遜色は無い、然し寛容な輪廓の大きな所は或は一步を尊氏に輸するかも知れぬが、事理を齟齬して、道義の辨別を立つる点に於て、彼に於て皆無の様に思はれる、矢張り勝扇は家康に揚げたい、信長の功績に至りては誰人も異論を爲すものは無く、又秀吉の大豪傑たることも衆人の等しく認むる所で有るが、両雄共に何處となく缺点の有る人物の様に感ずるのは、拙者一人ばかりでは無いと信する、確かに両雄には人を識るの鑒が足りなかつたとか、色々不足を數へ上げらるゝで有らうと思ふ、家康は實に圓滿に、各種の機能の發達して居た人物で、新井白石は之は後漢の光武に似た人だと評したのは、當らずと雖も遠からずで有ると思ふ、

さて徳川氏が天下を得ました事に就いては、其臣下に數多の良賢武勇の有つた譯で、即ち三河武士の忠節と云ふ事が大に與つて力有ると信じます、信長の旗下にも見られ無い程のもので有る、秀吉の組將にも見られ無い程のものも有る、三河武士と云ふものが、家康を圍繞して、其功業に赫々たらしめたので有る、其多くの三河武士の中に別けて四天王と申して、井伊、榊原、

本多、酒井は有名なる三河武士の模範と云ふ可きで、取分きて本多忠勝は重臣で有る、關ヶ原戦後に家康が家國を譲る可き兒を問ふた五人の中に、其一人に入つて居るのを見ても知れるのである、

忠勝は武を以て常に家康を擁護し、家康の往く所、忠勝が蜻蛉切の槍の見ゆる時は無かつた位です、實に武勇の有つた人で、夫れも其筈、祖父は安祥にて戦死し、父も同所にて戦死し、叔父も味方原に戦死した、其血を承けた人だから、並一通りの勇者で無つた事は想像されるので有る、乃ち彼は常に先鋒をして、姉川、味方原、長篠、天正十年の難、關ヶ原等の役に夫れ々の功を樹てたので有るが、戦争に出たこと五十七回、一度も敗れず、一度も創を蒙らずと云ふ、豊太閤或時曰く、東國にては本多忠勝、西國にては立花宗茂、この二人は當今無双の勇士にて、天下の干城とも云ふ可きで有ると、二人は是より懇に云ひ交はして、常々會合した、宗茂は忠勝が己れより長じて、軍にも老練すればとて、何時も忠勝に就いて、武邊の物語などを聞いた、一日忠勝曰く、我等主人には年若き時より何事に就きても明瞭とせしこと申さるる故、忠勝なを常に心得無くのみ思ひ渡つたが、近頃になりて始めて思ひ當つた事で有る、惣て上より下を見るに、下様の事は能く分るもので有る、其分るに乗じて下々を攻め使へば、下々の者は頭の出づべき様なし、それで有るか主人は若年より是等の所を酌量して、成るだけ下の者を寛容し

通交哥西墨の公康家

Iyeyasu's Efforts to Open Intercourse between Japan and Mexico.

伯刺西爾史學協會 志賀重昂
名譽會員

I take this opportunity to make a few remarks concerning the efforts of Iyeyasu to open intercourse between Japan and Mexico, in view of the fact that almost all the Japanese look up at him as a great soldier, as well as, a great statesman, strongly believing, however, one that he was too conservative to open Japan to the world at large. But this is absurdly baseless, inasmuch as he was really the very first Japanese that opened Japan to the world; the intercourse he opened extended westward as far as England and as far as Mexico in the east. The western intercourse has fully been divulged by Mr. Cox in the lecture preceeding; I shall have the honour to speak before you about some historical facts concerning the efforts of Iyeyasu to open commercial intercourse between Japan and Mexico.

The world at large, and even the Japanese themselves, believed that Japan had relations with America only since the arrival of Commodore Perry, just 60 years ago. Townsend Harris, the first American Minister to Japan, wrote to this effect, that when the Japanese warship Kanrin-maru sailed from Japan for San Francisco in 1860, it was the first attempt of the kind by Asiatics to cross the Pacific Ocean, and he praised the daring undertaking and courage of the Japanese. But since then, it has been found, that in reality some 250 years before this time, Japanese had already crossed the Pacific, at least five times. After the Restoration, when the Japanese Government sent Embassies to America and Europe in 1873, the members of the corps found old documents bearing on the Japanese Embassy which was despatched to Europe and Mexico in the early part of the 17th Century. They were quite startled to make such a discovery, and they could not believe that this was a fact. If the members of the Japanese Embassy felt this way, it was no wonder that Harris thought and believed that the Japanese crossed the Pacific in 1860 for the first time. The reason for this mystery may be explained in this way, that Japan secluded herself from the world for some 300 years, and in order to maintain strict seclusion, anything bearing on foreign intercourse was not permitted to be published, and, of course, the government itself concealed such documents. Not only this, but Daimyos who were connected with such undertakings either concealed or burned to ashes all documents bearing on them, for fear of persecution from the Shōgunate Government.

But there was one, Hakuseki Arai (1657-1725), historian, linguist and states-

てあしらはつたものと見ゆる、忠勝も折々此事を以て江戸の黄門へ語り聞かせ、若年の主の警戒とすると、宗茂も思ひの外に賢き事を承れりと云ふて、甚だ感歎したとの事有る。天正十年、家康は少數の旗下の者を召連れて堺を遊覽中、信長が本能寺に弑せられた、此時家康は京都へ入つて信長の吊戦をなして戦死せんと云ふたのを、忠勝が諫めて、獻策をして無事に間道から歸國した、又二丈餘の槍を老年になつて三尺餘り截り取らした事や、種々智謀に關する逸事があるのを見れば、必ずしも武勇一徹の人で無い、智謀を兼備へた名將で有つたらうと思ふ、

本講を終るに當りて、一言を呈します、永々しき両公の事蹟に就いての贅辯に對し、各位の忍んで御清聽下さいましたのを深く感謝致す次第で有ります、

(完)

clock with the inscription of Madrid, 1581, which is still preserved at the shrine of the mausoleum of the great Shogun.

The embassy of Masamune Date to Mexico, Spain and Rome is another notable fact; the ship being built at Tsuki-no-ura, which departed from the place on the 15th of the 9th month of the 18th year of Keichō (Oct. 28th, 1613 A.D.). The date of arrival at Mexico is not mentioned in any Japanese documents discovered thus far, but Mexican and Spanish documents describe a date distinctly, that is January 25th, 1614.

Concerning the object of Iyeyasu and Masamune above mentioned there has been much discussion, and no decision has been reached until this day, but most authorities as well as myself think that according to the result obtained from many sources, we may conclude that its object was to open direct trade between Mexico and Japan, and if possible through Mexico with Spain, then the mother country of Mexico. The former country was considered by Iyeyasu and his Dutch Adviser, Jan Joosten, and his English Adviser, Will Adams, to be a very productive country and extremely rich in gold and silver, so Iyeyasu sought to open intercourse with these countries, as in those days Japanese and Europeans considered that only gold and silver comprised wealth, and those who possessed these two precious metals were considered rich. Consequently, the object of the great Shōgun was not only to get gold and silver from America but to open up gold mining in Japan. Iyeyasu thought it advisable to employ competent miners, well versed in carrying on this work, from Mexico. Documents describe that Iyeyasu, desired to obtain 50 miners from that country.

Now you understand that Iyeyasu was so clear-headed as well as broad-minded that he had actually proposed to open intercourse between Japan and far-off Mexico, beyond the vast ocean some five thousand miles wide, in the age so early as the first part of the seventeenth Century. Surely it was a gross misrepresentation to deem him as a personage of conservatively inclined not to open Japan to the world at large. How enterprising he was, you have been probably enabled to appreciate in consideration of the facts that have been researched for and discovered up to this time, and much more you would be able to appreciate after further inquiries into his plans.

Pondering on what Iyeyasu had performed, my brethren here, who were born in the town of Okazaki, wherein the great soldier-statesman was also born, you should push on with redoubled energy to exploit new land such as Mexico, and be good successors to their forefathers' enterprises; and I myself, also as a boy born in the same town, shall push on after you.

Shigetaka (Jūkō) Shiga.

man, who wrote prodigious volumes of books and also acted as an Adviser to the Shogun, who gained confidence in him for his great ability. Arai in the course of his studies began to know of the life of Abbot Sōden, adviser on foreign affairs to the first and second Shōgun, who lived at the Konchin, Nanzenji Monastery, Kyoto. He discovered a diary written by the Abbot, consisting of some 180 sheets of paper, extending from the year 1608 to 1629 in which manuscripts of early intercourse with Nova Espana and Spain appear. This memorable discovery occurred in 1712. After that Arai and Jūzō Kondō used to attempt to study about foreign intercourse in the early days with another man, but as they could not read Spanish, Latin, nor any of the modern European languages, their search was handicapped.

Recently some one or two Japanese have been over to Spain in search of historical documents relating to the early intercourse between Japan, Mexico, Spain, etc. Even in Spain these are very rare and difficult to obtain, but the document of Sebastian Viscayno, the Spanish Envoy who came over to Japan with Nuno de Sotomayor, a Mexican Envoy, is worth noting. This is entitled: "Relacion del Viage hecho para el descubrimiento de la islas llamadas Rios de oro y plata."

This threw much light on the investigation, so now the diary of the Abbot Sōden above mentioned, and the Spanish Mexican Envoys' documents are the two chief reliable sources and light which have aided the study, yet very much remains to be brought to light and, even to-day, many errors are witnessed in books written by great foreign authors about this matter. In 1913 when our country was honoured by the visit of the Mexican Envoy, on one occasion I was asked to speak, and I dwelt on the old relations of that country and Japan, and the relations between the United States and Japan prior to the arrival of Commodore Perry. When an outline of this talk appeared in a certain paper in Tokyo, it was a surprise to most of the Japanese readers, and some even wrote and expressed themselves as being so, and they were surprised to learn of these facts, which were novel and interesting to them.

According to the diary of Abbot Sōden and documents of the Spanish-American Envoys above mentioned, with several other fragmentary manuscripts discovered in Japan, Spain and Mexico, it was learned that Iyeyasu Tokugawa, the founder of the Shōgunate and the greatest of the Shōguns, built two ships, 100 tons each, under the design of Will Adams, the first Englishman in Japan, on the coast of Idzū, naming one of the ships San Buena Ventura, after the Spanish, and a most appropriate name for such a venturesome voyage, and he despatched this one to Mexico, and the ship arrived at Acapulco and returned to Onahama on the 28th of the 4th month of the 16th year of Keichō (June 9th, 1611 A.D.), and they brought back many presents from the Viceroy to the Shōgun. Among these presents was a

大正四年八月十五日印刷
大正四年八月二十日發行

(非賣品)

家康
勝
兩公三百年祭事務所

著者 愛知縣岡崎町大字投百十一番戶
岡田 太良次郎

印刷人 東京市本郷區丸山福山町十五番地
川西 房太郎

印刷所 東京市麴町區有樂町二丁目一番地
報文社

大清光緒二十八年
正月二十日

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

✓

